

第五章 民俗芸能

第一節 鳴沢神楽

鳴沢に伝承されている神楽の記述をする前に、日本の民俗芸能の中でも代表的な神楽の起源および、内容による分類などの概況を記する必要がある。

「カグラ」の語源には諸説があるが、概ね統一されたものとしては、はじめ神霊を入れて持ち歩く移動式の神座を指すものと、舞人が手に持つ採物とりもの、例えば「御幣」とか「櫛かみ」とかに神霊が降臨するものとして、それを神座とする、いわゆる「神座」説が濃厚であって、その神座説が後に楽舞全体の名称となったものであろうというものであり、本来は「神」の「座くら」つまり「カムクラ」が語源となったものである。

神楽には宮廷で行われた「御神楽みかぐら」と、民間に伝承された「里神楽さとぐら」との二種類があるが、宮廷のものは一条天皇（九八六—一〇一〇）の御代に、宮中の内侍所ないしどころで行われたものが起元とされ、正しくは「内侍所御神楽」と呼ばれるもので、その意味するものは冬まつりの時期に、各地の神々が宮中に集まり、天皇をはじめ周囲の人々のために鎮魂たましずめの神事として舞踊を行ったものである。

この場合神に仕える者（神役）が、神の資格で人間を対象に行ういわゆる神事芸能であった。

一方民間に伝承されている神楽は、この神事芸能の影響を受けたかどうか、また別にすでに先行している芸能が後

に「御神楽」の様式を受けて習合したのか疑問であるが、意図するところは「御神楽」が鎮魂のための神事であるのに対し、この方は鎮魂という呪術的なものよりも、むしろ悪霊を追放するための祓（はら）を行う行事として発達し、舞人も人間が人格化するというものではなく、舞いを神に奉納して神徳を得ようとするものであった。

したがって現在各地に伝承されている、太々神楽・大和神楽・岩戸神楽などと呼ばれている神楽のほとんどは「里神楽」と総称される民間伝承の芸能と見てよい。

また民間神楽は地方に広まっていろいろに発達し、さらに先行芸能とも関わり合ったことから、演技の形体にも複雑な変化を生み、それぞれの地域性が加味されて、同じ神楽であっても、いくつかの分類を示すようになった。分類を四つに分けてみると、①巫女神楽・②出雲流神楽・③伊勢流神楽・④伊勢流に属するものではあるが獅子舞を主体とする、いわゆる獅子神楽である。

①の巫女神楽は巫女舞を中心として巫女（少女）が舞いながら神霊の降臨を導き、やがて神霊が乗り移る「よりまし」となつて「ご宣託」を得るといふ、極めて神懸りのなもので他の神楽とは違った要素を持つものである。

②の出雲流神楽は、出雲の佐陀大社（島根）で行われる「七座神事」|| 剣舞い・清目・散供・勸請・祝詞・御座・手草|| を前段とし、後段に神能と称する十二段の能風の曲目で演ずる舞踊を起源としたもので、これが民間に伝承され各地に広められたという経緯をもっている。

この神楽の特徴は、はじめに素面（面をかぶらない）の舞人による神事的な舞が演じられたあと、採物（舞人が手に持つもの）を持って行う仮面神話劇を演じるころにあり、その仮面神話劇には「岩戸開き」「天孫降臨」「御大漁」などと呼ばれる代表的なものがある。県内にもっとも多く伝承されている神楽は、この里神楽のうちの出雲流神楽であり、その伝承数はおよそ六十カ所を数えている。鳴沢神楽も当然この系統に属するもののひとつである。

③の伊勢流神楽の特徴は「湯立て」という神事を伴うところにある。湯立てとは大きな釜に湯を沸かし、神官が笹の葉を束ねたものでその湯を周囲の者に振りかけ、人体についている罪や穢れを祓う神事である。

また、この神事を中心にして神楽舞が行われ、鬼とか天狗などが登場するものである。

④の獅子神楽は湯立ては伴わないが、獅子舞を中心とする伊勢流神楽の系統を持つもので、経緯などは別節「獅子舞」の項で説明することにした。

以上神楽の概説を述べた上で、つぎにこの村に伝承されている「鳴沢神楽」の内容に入ってみよう。前記の概説からして、この神楽は出雲流の系統に属するものである。



現在「鳴沢神楽」と称するものが伝承されているのは、村内の春日神社（毎年四月十五日奉納）と魔王神社（毎年四月十八日奉納）の二カ所である。舞の演目や所作は両者ともに異なっていないので、伝承の経緯は同一のものであると考えられる。

明確な記録はないが安政三年（一八五六）前後にこの土地に「神楽座」が構成されたと、古老の記憶には留められている。

当時土地の富士屋源右衛門という人が、この村の人たちが熱心に信仰する春日社および魔王社に、ぜひ神楽を奉納したいと一念発起して現三珠町の古老を尋ね、市川荘の総鎮守であった表門神社に伝承されている神楽の伝授を願いたい、と懇請したところ、快諾を得てここ鳴沢の地に神楽座を構成することができたというもので、その時期が安政三年ごろであったというのである。したがって伝承の歴史はおよそ百三十年と推測できよう。

しかし神楽がもともと盛んに行われたのは明治に入ってからで、明治五年から三十年ころまでにかけて伝承に活躍

した人びとの名が具体的に記録されていることから、このことは裏づけられる。

ちなみに記録に残されている神楽座の面々は、渡辺与左衛門・小林武良・渡辺仁衛門・渡辺福松・渡辺卯之甫・小林豊作・渡辺長吉・渡辺舜索・渡辺国吉・渡辺春松・渡辺直吉などの人びとであった。

神楽の名称はこの村の場合「太々神楽」の文字を当てているが、これは他の地方の「太々神楽」および「大大神楽」と同じ意味のもので、どの文字を使っているにせよ「だいたい」と読む点は共通的であるのは、これが本来「ダダ神楽」を語源としたところにあつた。「ダダ」とは舞の所作の中で、足で大地を踏み鳴らす、いわゆる「ダダを踏む」ことが多いところからきたもので、後にこの「ダダ」に「太々」の文字を当てはめ、「ダイダイ」と読むようになったものとされている。

「ダダ」とはこの仕草によつて、大地の中にひそむ悪霊の鎮魂をすると同時に、清められた空間に神霊の降臨を招く呪術的所作である。これを「反閤へんが」という地方もある。

神楽座の伝承者は安政三年に記録されている者は三人に留まっているが、明治元年には五人、昭和五年には七人が記録され、昭和五十七年には十八人と多数になっている。このことは村人たちが誇り高い伝承芸能を、しっかりと受け継ぎ、確実に後世に残し伝えようとする心の動きによるものであると思われる。

神楽奉納の段取りと演技

前述の春日社および魔王社の祭典にあたり座員一同はすべて精進潔齋を行い、つつしみ深く奉納の場に臨むのであるが、ここには特別な神楽殿の常設はない。古くは神社の境内に仮設の神楽殿をつくつて演じたといわれ、現在でもその影響を留めている。

奉納の場には当然神座が設けられるが、この村では神座のことを「舞いどころ」と呼び、昔は四隅に榊を立て、こ

れに注連縄の代わりに藤づるを張りめぐらし、竹の葉をつつてその中を舞場としたところから「舞いどころ」の呼び名が生まれたのであろう。

神座の正面に幣を立て、そこを「ミテグラ」と呼んでいる。「ミテグラ」とは神霊の依りつく「依代」の意である。現在では、正前に案（物を置く台―これは鞍を意味する「アン」の意味か）を備えその上に五色の御幣（向かって右から青・赤・黄・白・黒）を立て、その両脇に榊を立て、向かって右側の榊に三種の神器をかける。三種の神器とは八咫鏡・天叢雲・八坂瓊曲玉のことである。

このような舞いどころの準備が完了して、いよいよ太鼓四人笛四人の楽人が位置につき、舞が開始されるが、その前に神官が神座に向かつて、神に奉納の趣旨を申しあげる祝詞が奏上される。その内容はつぎのとおりである。

そもそも神楽の由縁と一派（言へばか？）

天照大御神

天の岩戸にかくれまして

世はしばらくも常闇となりぬ

その時諸神たち

神集へに集ひ給ひて

舞ひゆとう（舞いうたうか？）がゆえに大御神にも

あわれ

あなたのひ（あな楽しか？） あなさけなや（あな沓けか？）

あな面白とみそなはしたまふ

ことに手力男尊たぢからのおのみこと 天の岩戸を開き

給ひて

天が下を知ろしめし給ふ

村内氏子安全の為神楽を奏し奉る。

これが終わるとおほらいがあつて、引き続きつよせ太鼓が打ち鳴らされ、その後順を追つて舞が演じられる。演目
はつぎの十二の舞である。

一、乙おつの舞・二、五行ごぎやうの舞・三、太王ふしたまの舞・四、うずめの舞・五、猿田さるたの舞・六、事代主ことしろぬしの舞・七、国固くにかための舞・

八、須佐之男すさのおの舞・九、金山かなやまの舞・十、岩戸いわどの舞・十一、弓ゆみの舞・十二、乙おつの舞

以上の十二の舞が終わると再びよせ太鼓、ついで千秋楽の歌となる。

千秋楽には谷をのぶ

万歳楽には命をのぶ

相生いの松風

さあー 幸の聲ぞ楽しむ

さあー 幸の聲ぞ楽しむ

がそれである。

はじめの「乙の舞」から十二番目の「乙の舞」までは、すべて仮面をつけて舞ういわゆる「仮面神話劇」で、前述の出雲神楽の要素を十分に満たしている。ただこの神楽が前に記したように、三珠町表門神社から伝授されたものと

いわれているにもかかわらず、その演目にはかなりの違いがあり、とりわけ表門神社にない「五行の舞」が鳴沢神楽の中に組み入れられている点などから、長い年月の間に各地の神楽と習合して「鳴沢神楽」独特の形をつくりあげたものではないか、ということが考えられてくる。

一 乙の舞

舞人の衣裳は、大ブチ、上下ともに青色、かぶり物は大型の黒烏帽子えぼし、採物とりものは右手に鈴、左手に扇子おあきを持って登壇、神前に向かって一礼、二拍手、一拝したあと、祭壇から扇と鈴をとり大きく右回りして右足から十二歩で舞台を一巡

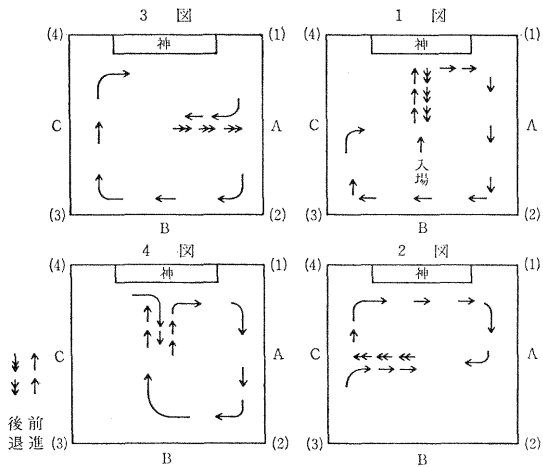
する。この場合一步進むごとに鈴を三度振る。しかも一步ごとに祝詞を一句ずつ唱えていく、これは古くから神楽に先立って行われる能三番叟せうに相当するもので、仮面も翁面おきなが用いられる。一步ごとに一句の祝詞は、前出の神官の祝詞とほとんど異なる内容である。翁が十二句の祝詞を唱え「あげると」三歩目で正面に正座して「村内安全のため神楽を奉納する」と唱えて舞をはじめ。

乙の舞

二 五行の舞

天兒屋根命あめのこねのみことの舞った舞とされている。採物は右手に鈴、左手に大型の御幣みひ、面は女型、衣裳は白の上下を着る。かぶりものは中型の金色烏帽子こんじきえぼし、この天兒屋根命あめのこねのみことは神産巢日神かみむすひのみかみの子で天岩屋戸あまのいわやどに天照大神が身を隠した折に、祝詞を奏して大神の出現を祈ったその神である。

後に天孫ニニギノミコトに従って日向ひらがの国に赴いた五部神いつともがみの一人で、そ



の子孫は代々朝廷の祭祀を司る中臣氏（後の藤原氏）の祖神である。また春日神社の祭神ともされている。舞ははじめ扇を持って登場し、神前に一礼二拍手一拝をしたあと、扇を神前に置き、神前にある鈴と御幣を採って舞い始める。

舞に伴う楽は口伝によるもので

トヒャラーピッ ヒャーララ ピフヒャーララー。トヒャラピッヒャーラ
 リー トーピッヒャウ ヒャラリッ ヒャウヒャーララーライイ。
 ヒリトロヒッヒャーララー ヒャーララー

注・楽は口譜（口ぐさり）といい、忍野村の後藤義隆氏（山梨郷土研究会理事）が永年の研究により残したものである。

であり、舞順は上記の図のとおりである。

三 布刀玉の命

天の岩屋の変に天の香山（天の金山のこと）に赴き雄鹿の肩胛骨と、
 「ははか」（朱桜かにやぐさ）の木の皮を取ってきて「ははか」で鹿の骨を焼き、そのひび割れによってことの吉凶を図る骨
 占をし、岩屋戸に隠れた大神の出現を祈った布刀玉の神（斎部氏の祖神）の神占の舞である。

面は男面の笑顔、衣裳は白の上下、かぶり物は中型の銀色烏帽子、採物は右手に鈴、左手に榊かきである。

初め、舞人は扇を持って神前にすすみ、一礼二拍手一拝の後、扇を置いて鈴と榊を採って舞に入る。舞に伴う楽はつぎの記述中にある布刀玉の舞のとおり、また舞順は前出のものと同じである。

大鼓と笛の譜

乙の舞

トーヒーロン トーヒーロン トーヒヤラー ヒヤラーラリーツ
 トーヒヤラー ヒヤイトロヒヤイ ヒフヒヤラーラリーツ

五行の舞・布刀玉の舞・国固めの舞・弓の舞・事代主の舞

トヒヤラーピーフヒヤララ トヒヤラピーフヒヤラーラリーツ トーピーフヒヤウ
 ヒヤラーラリーツ ヒヤウヒヤラーラララー ヒーリートロヒフ ヒヤラーラララー
 ヒヤラーララー

注 大太鼓 □ ↓ 小さく打ち込む □ 大きく打ち込む。

小太鼓 □ ↓ □ ↓ は間をおいて打ち込む。 ○ の印

四 宇受売の舞

天の岩屋の変に神々の前で舞を演じ、また天孫ニニギノミコトが降臨の折には随神としてニニギノミコトをたすけ、天の八衢にいた猿田彦の神の心を和らげたという女神である。芸術を司る神とされ、後の猿女氏の祖でもある。



面代主命の面

舞は事代主命が出雲国の三穂之崎で魚釣りをしている場面を演ずるもので、面は笑顔の男面、衣裳は白の上下に赤袴を掛け、金色の中型烏帽子をかぶり、採物は右手に鈴、左手に釣り竿を持つ。舞い方は神前に正座して一礼二拍手一拝し、静かに立ちあがって舞いながら三步後退して図(1)の方向に三步前進のち中央に向かって座る。ここで釣り針に餌をつけて静かに立って釣りをはじめ。そのあと(2)のところまで釣りながら移動し(2)の位置で再び中央に向かって針を投げる。三回投げて釣を試みるが魚はかからず(3)の位置へ釣り針を投げ入れたまま移動、ここでも三回試みる

特に天の岩屋の変では熱狂して乱舞するあまり、着ていた衣の前をはだけ神々がドット笑ったという神話の主人公であり、かつこの神々の笑いに不審を抱いた大神が、堅く閉じた岩屋戸をわずかに開いて、外の様子を見ようとした瞬間大力男の命が岩屋戸を引き開けて、大神を岩屋から迎え出したという神話につながる、重大な役割りを果たした神である。

この舞の舞人は女面(姫)を用い、衣裳は十二単の上に大ブチを覆い、下は緋袴でかぶりものは月の飾りをつけた瓔珞、採りものは右手に鈴、左手に幣を持つ、女舞であるから両足は開かず静かな舞である。舞に伴う楽および舞順は前出のものと同じである。

五 事代主の舞

この神は大國主命の子で出雲國(現島根県)で大國主命をたすけて政に参与していたが、天照大神の命令で國土を天孫ニギノミコトに献上するようにいわれたとき、父神大國主に大神の命令に従うべきであると勧めた神として神話に描かれている。



猿田毘古命面

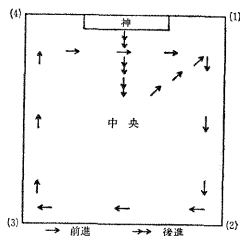
六 猿田の舞

天孫ニニギノミコトが高天原から日向国（現宮崎県）の高千穂の峰に降臨した、いわゆる天孫降臨の折、道案内をつとめ、のちに伊勢国（現三重県）の五十鈴川のほとりに鎮座したといわれる命で鼻の高い身の丈の優れて大きな恐ろしい顔の、俗に天狗さんと呼ばれる猿田毘古命の舞である。

舞人の面は天狗面、衣裳は上下ともに赤色で袴を掛け、烏烏帽子（烏冠。とりかんむりまたは鳥かぶと）をかぶる。

舞順は、まず神前に向かって一礼二拍手一拝して三步後退し、舞台中央から図①の(3)の位置に後退し、(1)の方向にいる銚（さ）を持つ者に向かって一拝し「トトトットン」の太鼓の合図に合わせて力強く三回足踏みをする。ついで銚は図②③④の順に移動し、猿田は銚が移動するたびに銚の方向に一拝し、さらに中央にすすんで「九字」を切ることを繰り返す。

これが終わると、神前に置いた鈴を右手に、銚を左手にとって舞いあげる。なお「九字」を切る際に力足を踏む所作があるが、これがいわゆる「反閉」



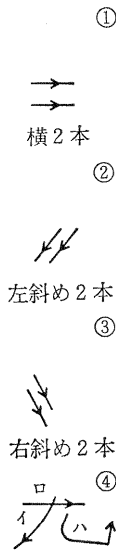
舞順の図

がまだ釣れない。(4)の位置に移動し、ここで三回目に針を投げ入れたところでやっと鯛を釣りあげる。釣りあげた鯛を神前に供えて舞いは終わる。

この舞は面の笑顔に相応したユーモラスな舞であつて、ほかの地方で演じられている「御大漁の儀」の舞と同じものであるが、他の地方のものと相異なる点は、介添え役の登場がない一人舞いであることである。舞に伴う楽は前出の「五行の舞」「布刀玉の舞」と同じである。

の神とあがめられた神である。

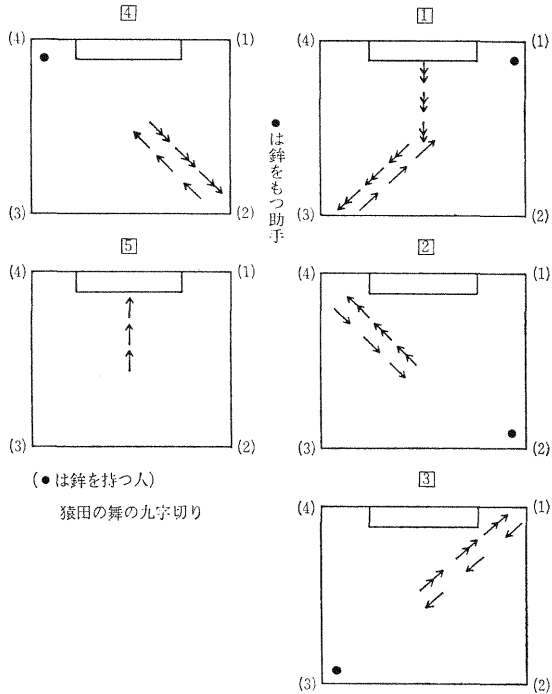
舞人の衣裳は上下ともに赤色の大ブチに赤の袴を掛け、かぶりものは鳥烏帽子(鳥冠)採物は右手に鈴、左手に



「ハ」の所で悪霊を追いかぶるようにする。

九方
田の切

命が火の神軻遇突智を産んだとき、熱に焼かれて苦しみなから嘔吐して金山姫とともに産んだ男神で、金の神・鉱山



(●は鉦を持つ人)
猿田の舞の九字切り

舞の順図

である。「反閉」とは陰陽道の秘法で、足で地をふみつけることにより悪気を押え、正気を生じさせる呪術のことである。

また「九字」も陰陽道の護身の秘呪として用いられ「臨兵斗者皆陣列在前」の九文字を唱えながら、図のように右手の人さし指と中指を合わせて体の前方に突き出し描き出すことである。この呪術を行うことでどんな強敵も恐れるに足らずと、自信を得ることができると信じられたものである。

七 金山の舞

金山彦命かみやまひこのみことの舞である。この神は伊邪那美

剣である。

舞はほかの舞と異なつて一人舞ではなく、二人の弟子との共演である。弟子の衣裳は上下とも白に中型の烏帽子を

かぶり、採物は長柄の槌である。

舞いの順序は、まず二人の弟子が鈴と槌を持って登場。(一人の弟子は金敷かなじきを小脇こわきにか

かえている)弟子たちは神前に礼拝し、そのあと金山彦が剣と短い柄の槌を携えて登場。

神前に向かい一拝二拍手一礼してから、弟子とともに剣を打つ所作に入る。(鍛冶をす

る)剣を鍛えあげると、金山彦の手でこれを神前に奉納し、神前に置いた鈴と今鍛えた

剣ではなく、別に用意した剣をとつて舞い、舞い終わると登場のときと同じ剣と短い柄

の槌を持って退場する。続いて弟子たちは神前に一拝して、長柄の槌と鈴をとつて舞

い、退場のときは槌を持って退場する。

金山彦の面は白色の誇張された眉毛まゆに丸い大きな目、鼻の下にはこれも白色の誇張さ

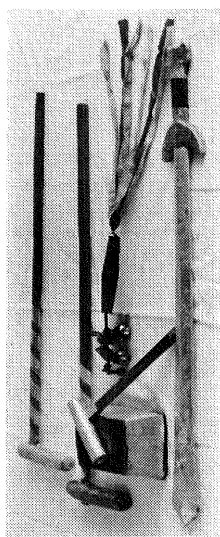
れたひげが左右に張り出している。また弟子たちはそれぞれ道化面である。



金山彦命の面



弟子の面



金山の舞の採り物

八 国固めの舞

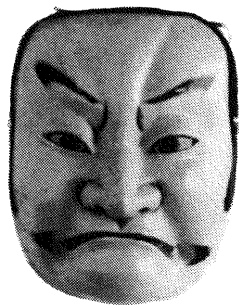
天照大神が出雲の国を平定し

て、これを祝福する意味を表す

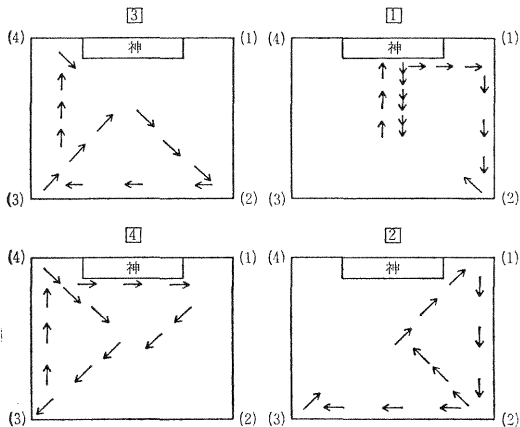
舞である。

舞人は力強い男面をつけ、衣

裳は赤色の上下に大ブチ、赤の



国固め舞の面



国固めの舞い順

袴を掛けて金色の小型烏帽子をかぶる。採物は右手に鈴、左手に剣である。
舞い順は、扇を両手に持ち剣を腰に差し舞い人が神前にすすみ、礼拝してから立ちあがって、三步後退で中央に位置し、再び三步前進してから右に大回りし、図①の(1)の角に至りそこから右折して(2)の位置につき、ここで中央に向かって剣を力強く前方に差し出す。

続いて太鼓に合わせて力強く中央に向けて三步踏み出し、そこで剣を地に差し
て三回「九字」を切る。このあと図②のように(1)・(2)の方向に
舞い進み、(3)の角に至ったとき中央に向いて、図③のように太
鼓に合わせて力強く三步前進し、ここでも剣を地に差しして「九
字」を切る。これが終わると(2)の方向に移動し(3)・(4)と舞い進
み、図④のように(4)から(1)の角に移動して中央に向かい、中央
に位置してから力足を踏んで「九字」を切る。最後に神前に
礼拝して扇と剣を持って退場。この舞も「猿田の舞」と同じ
「反問」の呪法が伴う。

九 順佐之男の舞

天照大神の弟、素戔嗚尊の舞である。この神は凶暴で、天の
岩屋戸の事件を引き起こした張本人であるが、事件解決後出
雲国に流され、ここで八岐大蛇を退治し、大蛇の尾から出てき



天照大神の面



素戔嗚尊の面

た天叢雲劍あめのさぐくものつぎ（後の草薙の劍）を大神に献じ、さらに朝鮮半島に渡って船材にする木を持ち帰って、植林の道を教えたといわれる神である。暴風神・農業神・英雄神として多面的崇敬を集める神である。

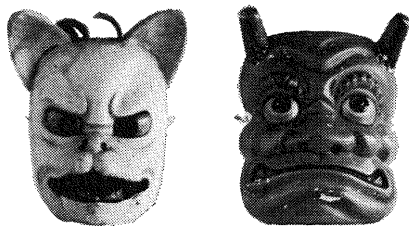
舞い人のつける面は荒々しい表情の男面で、衣裳は青色の上下に大ブチ、襷を掛けて採物は右手に鈴、左手に弓を持つ。かぶりものは黒色の大型烏帽子。

この舞には、上衣を十二単ひとえ下衣を赤色の長袴ばかまの衣裳を着て、かぶり物には太陽の飾のついた天冠よろい（瓔珞）を用いた天照大神と、白の上下衣で道化烏帽子をかぶった鬼と狐が共演する。いわゆる無言神話劇である。

はじめ大神が宝珠を持って神座につく、そのあと鬼と狐が道化ながら登場して、大神の持つ珠たまを奪い取ろうとする。

再三失敗の末、とうとう珠を奪った鬼と狐は、大喜びで珠をもてあそんでいるところへ、弓と矢を持った須佐之男が登場し、鬼と狐に向かってその珠を大神に返すようにと迫るが、鬼と狐は返そうとせずあたりを逃げまどう。仕方なしに須佐之男は弓矢を構えて、三度気合いをこめて鬼と狐をおどして、やっと珠を取りもどしてこれを大神に返上する間、鬼と狐はほうほうの体で逃げ去り（退場）須佐之男は弓と鈴をとって舞う。舞い納めると弓と矢を持って退場。

そのあと大神は助手のかざす傘の下に入って退場する。舞順は前出の「五行の舞」と同じ、楽は猿田の舞と同じであ



狐 と 鬼 の 面

十 岩戸の舞

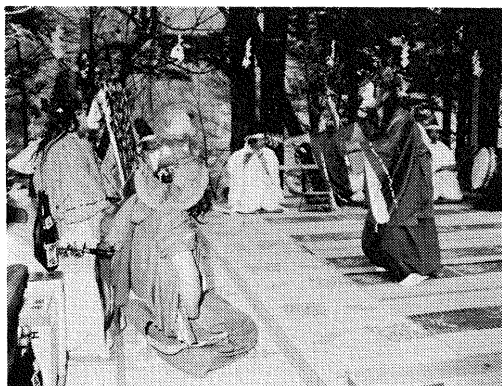
『古事記神話』の中でもっとも知られている。天照大神の「岩戸隠れ」を、無言神話劇に構成した舞いである。

須佐之男命のかずかずの乱暴に怒った大神が、天の岩屋戸に身を隠してしまったので、大地は真つ暗闇となり、闇に乗じて邪悪がはびこってきたので、これを追放し大神の復活を図る神々は、岩屋の前に集まって祭祀を催し、天照大神の狂乱の舞をきつ掛として手力男命が、岩屋を開いて大神を岩屋の外に導き復活を得た——という物語を演ずるものである。

舞い順は、初めに大神が助手のかざす傘の下に入って、両手に扇を持ち入場し中央の席に着くと、続いて須佐之男命が入場、生き馬の皮に見立てた赤い布を大神に投げる。

馬の皮で穢けがされた大神が怒って天の岩屋に隠れ、世の中が真つ暗闇になり邪気がはびこったことを想定して、神々が岩屋の前あまのすまほら（天の安原）に集まる。

集まる順は「五行の舞」の舞人を先頭に「布刀玉」「宇受売」「手力男」の各舞人が衣裳と採り物を整えて登場し岩屋戸に隠れた大神に一礼二拍手一拝してつきつきに大神の前に整列する。



岩 戸 の 舞

整列の形は

下記のとおり

で↓印は舞人の

向く方向を示すもの

である。

天照大神



○五行の舞人 ↓

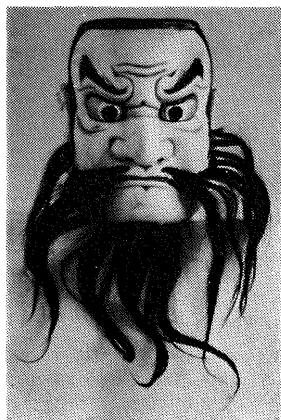
○布刀玉の舞人 ↓

○宇受売の舞人 ↓

○手力男之の舞人 ↓

一同整列が終わると「五行の舞」から舞が演じられ、舞納めて退場すると「布刀玉」の舞がはじまり終わって退場すると「宇受売」の舞が続く、「宇受売の舞」のとき大神は岩屋戸を少し開けて外の様子を窺うが、このとき待ち構えていた助手が、鏡を持って大神にそれを向ける。

宇受売が舞い納めて退場すると、手力男之命が登場し、大神の隠れている岩屋戸を取り除きかさず大神の背後に五色の注連縄を張りめぐらす。



手力男命の面

このあと手力男は鈴と岩屋戸を持って舞い納めると、その場に平伏する。岩屋戸を出た大神は手力男の前を、助手のかざす傘の下に入って静々と退場。手力男もそのあとに続いて退場する。

十一 弓の舞

この舞はすべての演目を終了し、神に奉納したことで神霊を招くことができたので、その神威を示すために演ずる神事舞と見ることができ、今までの舞はすべて面をつけて演じられたが、この舞だけは素面（面をつけない）で行われるところにその意味が示されている。舞人は白の上下の衣裳に、黒の大型烏帽子をかぶり、

する。

最初の「乙の舞」が能三番叟であるため、しめくりの舞も能三番叟で祝福する。

はじめ寄せ太鼓が打ち鳴らされ、これが終わると舞人・楽人・関係者全員が神座の前に並び、つぎの千秋楽を合唱

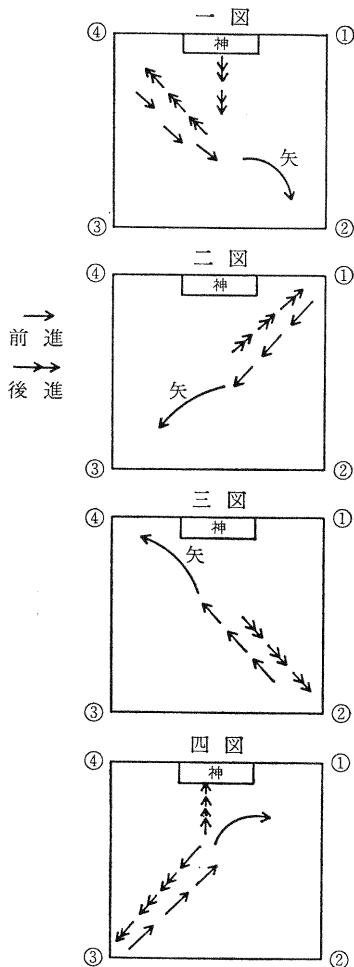
十二 千秋楽

同じ、また前舞のあとに舞う舞も「五行の舞」と同じである。

矢には神霊が依り移っているから、邪悪を払う呪力が盛んであるためといえる。この舞に伴う楽は「五行の舞」と同じ、また前舞のあとに舞う舞も「五行の舞」と同じである。

拍手一拝し、今度は鈴と弓を持って舞い納める。

矢をつがえ「ヤー」という声をあげて弓をふりかぶり三回目に声をあげたとき、②の方向に矢を放つ。これと同じ動作を二図、三図、四図に示すように繰り返す、これを前舞と呼び、前舞の終わったところで、もう一度神前に一礼二



舞い順

採り物は右手に鈴、左手に弓を持つ。舞い順は、弓と四本の矢を持って登場した舞人が、神前で一拝し④の角から中央に進んで、弓を床に固定しながら一本の

千秋楽には谷をのぶ（延ぶ）

万歳楽には命をのぶ

愛に愛生（相生）の松風

さあ幸の声ぞ楽しむ

さあ幸の声ぞ楽しむ

以上で鳴沢神楽は終わるのであるが、全体の流れの中で考えられることは、安政三年に三珠町から伝承し、以後村人だけの手ではじめて奉納されたのが明治元年である。といわれているので、その間十余年のうちに、元の形や組み合わせが変わったり、また明治元年以後も長く中断した時期もあったことなどから、再興に当たって他の地域の芸能の取り入れも影響して、伝承当時の形をかなり崩している点が見られる。

現在行われている十二番の神楽の組み合わせも、最初と最後に「よせ太鼓」を配し、また一番に「乙の舞」十二番に「乙の舞」を入れて、能三番叟で前後をしめくくっているところなどは、明らかに純粋な神楽舞ではない。いつの時代かに能との習合があったものであろう。

また村ではこの神楽を「日本神話」のうちの代表的な物語りである天照大神の「岩戸隠れ」の一連の神話劇と理解しているが、十二番の舞のうち、その部分に関係のあるのは三番の「布刀玉の舞」四番の「うずめの舞」九番の「須佐之男の舞」と十番の「岩戸の舞」で、そのほかのものは別の神話に素材を求めたものである点、長い間に多くの神話劇が消滅し、かつ順序が入れ替えられていったことが考えられる。

例えば「岩戸の舞」の内容を見ても、本来は、もつと多くの神々がそれぞれの役割りをもつて登場し、具体的な演技内容を持つものであるが、この場合はかなり省略された形で演じられている。

正しく伝承されている「岩戸の舞」は、

1 須佐之男命が登場して、荒々しく舞って退場したあと。

2 天照大神が登場し舞い納めた後正前に腰を降ろして、天の岩戸で身を隠す。

3 つぎに思金命おもいかねのみことが登場し、大神が岩屋隠れして天地が暗黒となり、邪気がみなぎる世界に、再び大神を呼び

戻して復活を図ろうとする意味の舞を演じ、舞い納めてからは退場せずに大神の近くに侍している。

4 続いて伊斯許理度売命いしこりどめのみこと（老女）が登場して神鏡をつくる意味の舞を演ずる。

(卯) 神話では知恵者の思金命が神々を集めて相談した結果、まず常世（海の彼方の国）の長鳴鳥を集めて鳴かせて邪気を払い、つぎに天の香山（金山）から鉄を鍛えるための金敷かなしき（かなしき）用の石を取ってきて、鍛冶の神である天津麻羅あまつまらと伊斯許理度売の命のみことに鏡をつくらせたり、また玉祖命たまのやしろのみことには勾玉まがたまを緒に通した玉飾りを作らせたとある。これらは大神を迎えるための祭儀の重要な祭器御霊代みたましろ（みたましろ）であった。

5 つぎに登場するのが中臣氏あたごのこぞ（後の藤原氏）の祖である、天兒屋根命あめのこやねのみことである。

6 続いて布刀玉命ふたたまのみことが登場する。

注 神話ではこの二神が天の香山（金山）から捕ってきた雄鹿の肩胛骨を同じ香山の「ははか」かたわかくら（朱桜）の木の皮で焼いて、そのひび割れで吉区をはかる骨占ほねうら（鹿卜）をする。

また天兒屋根命は祝詞の褥唱まじらひをし、布刀玉命は御霊代みたましろの神の枝を捧持して舞う

7 つぎに天宇受売命あめうすめのみこと（女神）が登場し神懸りの舞を演じるうちに衣裳がはだけて、陰部まで見える熱演をするというしぐさの舞である。

(卯) 神話では宇受売の命が天香具山あまのかぐまから採ってきた、日陰葛ひかげがらを身にまといさらに頭にも葛かたを巻き手にはこれも同じく香具山

から採ってきた笹を持って、ウケ、と呼ぶ台にのぼり、それを踏みとどろかせて舞い狂い、神懸りする。胸乳もあらわに腰に結んだ裾も陰部のところまで下げるありさまとなり、これを見た神々がおもしろくてどっと笑ったため、岩屋のうちの大神が外は闇のはずなのにみんなが楽しそうに騒いでいるのはどうしてであろうと不思議に思い、岩屋戸をわずかに開けて外の様子をうかがう場面が記されている。

8 このあとよいよ手力男たぢらおのみこ之命が登場する。天宇受売命の神懸りの舞で、神々が笑いさんざめくのを聞いた大神が、岩屋戸をわずかに開けると、目の前の鏡に己の姿が映り、これはどうしたことか、岩屋の外にも自分と同じ者がいる」と驚いて、あわてふためいているところを、手力男命がすかさず岩戸を引き開けて、大神を岩屋の外へ迎え出すという意味の舞を演じる。

手力男はじめ力強く反閉はんぱいをしながら舞ったあと、岩屋に近づいて、大神が隠れている岩屋戸を取りはずし、それを小脇にかかえて歓喜して舞い納める。

9 つぎに天照大神の舞となる。二番目に舞った思金命以下手力男命まで舞人はすべて大神の座る場所の脇に整列して、その前で復活した大神がよろこびの舞を演ずるのである。

以上が「岩戸神楽」と呼ばれる舞の概要であるから、これに対して鳴沢神楽の場合は、前述のような省略および、他から移入した芸能の混同があつたものと思われるが、形や順序はどうあれ、この芸能を通して曾祖父から祖父へ、祖父から父へ、父から子へと伝え残し、それを曾祖母から祖母へ母から子へと一体となって支えてきた、伝統の重みは尊いものがある。

祖先たちが真剣に立ち向かった、ふるさとの心の保存の火を、今に生きる人びとが消し去ってしまうようなことがあつては、どんな新しい文化も語る資格がないと思う。

第二節 獅子神楽

「神楽獅子」^{かぐらじし}「おかぐら」^{おかくら}「太神楽」^{たかぐら}「代神楽」などとさまざまに書き、また呼ぶが、この神楽は獅子頭を中心に演ずる神楽舞である。



復活された獅子神楽

獅子はもちろん仮空の動物ではあるが、源流はインドで、ライオンを象徴したものであると考えられている。

獅子舞には^{かしら}頭と後部に二人の舞人が入って舞う二人立ちのものと、越後獅子のように一人で演ずる一人立ちのものがあるが、中部地方から関東および関西方面にかけて行われる獅子舞といえ、大方は二人立ちのもので、県内でも東部の上野原周辺にある「三匹獅子」というものを除けば、すべて二人立ちのものであり、これは残されている民俗芸能のうちでも最も多い数を示している。

それだけに戦前までは各村単位とか集落単位に必ず一組の神楽座があつた証拠でもある。

「鳴沢の獅子舞」の場合ももちろん二人立ちのものであつたが、現在では舞われていない。かつて小正月に道祖神場から出発して、村中の家々に正月の祝詞を配ってまわつたはずの獅子頭が、今も教育委員会に保存されていて、最近はこの復活に意欲を燃やしている人々が、その準備をすすめているという経緯

がある。

鳴沢獅子神楽の演目は

① 幣へいの舞 ② 歌の舞 ③ 幕の内の舞 ④ 剣つぎの舞 ⑤ くるいの舞—の五つとなっているが、この内容は他所で行われている獅子神楽とあまり差異はない。

獅子神楽は伊勢流に属するもので、はじめは伊勢の皇太神宮の神職たちが、鎮魂の呪術として舞ったものであるが、室町時代ころから、伊勢神宮の神威を各地に広めるため、神職が自ら地方に向いて、各地で演ずることで悪魔を退散させ家内安全・五穀豊饒・無病息災などの祓いの呪術として普及し、江戸時代に入ると神職の手を借りずに、村

人の中でこれを会得するようになった。「代神楽」の名称も神職に代わって行う神楽という意味を持つものであると考えられる。

このようなことから、獅子舞は獅子頭が主役となるわけだが、この獅子頭を載せて運ぶための「お宮みや」と呼ぶものがなくてはならない。つまり「お宮」は皇太神宮そのもので、運搬できる程度の小型のものである。あるが、神威を勧請した、いわゆる移動神宮に匹敵するものである。

獅子頭はこれに登載されて移動し、神の威力を人びとに施すことを目的とした。しかしところによっては「お宮」は形式的な道具のひとつとなつて、獅子頭だけが中心となつてしまったという例も多い。

舞の順序は本舞と称する基本的な神事舞を行い、そのあと余興として獅子頭を使った芝居・手品・玉乗りなどが行われるが、鳴沢村のものは本舞だけが記録されている。



幣の舞

演目の名称は地方によって異なるが、本舞の順序は

1 幕の舞

これは神を招くためにしつらえた場所の幕を開けるという意味を持つもの。

2 剣の舞

これは剣と鈴（鈴の舞として独立しているところもある）を持って舞うもので、神の降臨を得る場所（獅子頭）およびその周辺に浮遊する悪霊を鈴の音やよく切れる剣で薙ぎ払う意味を持つもの。

3 幣の舞

これは神を持って舞う神の舞とするところもあるが、幣にしても神が訪れてくるための依代よしろとして舞人が手にするもので、この舞によって神霊は獅子頭に降臨してくる。

4 狂いの舞

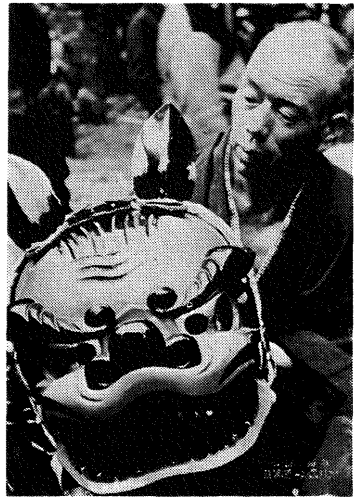
神霊が幣または神を依代として獅子に乗り移ったことを意味する舞で、獅子頭をかぶる舞人がこのとき、普通の人間から神懸りして神に成り代わる段階の舞である。従って舞の形も激しくなり、舞い狂う状態になることから「狂いの舞い」と呼ぶようになった。

獅子舞が最後の舞で「狂い」の状態を示すことで、初めて今までの獅子頭が神そのものの資格を持つので、このあと家々をめぐって悪魔退散の呪術の効果をあげ、家内安全・五穀豊饒・無病息災の利益を与えることができるのである。

鳴沢の獅子舞の順序は、右のような観念からすると順序が整っていないが、これも長い間に入れ違ったものと思われる。

この獅子神楽は享和年間（一八〇一〜〇三）ころ始まり以後継承されたが、太平洋戦争中に中断したまま、現在村内では行われていない。しかし、三十数年前に復活の議があつて、一部の指導者が努力し公演を試みた経緯もあつたようである。しかしそれも後継者不足のまま一時的なものとなつて今日まで時を経てしまつてゐる。

ところが最近また、ふるさとづくりの一環として、ぜひとも祖先の心を復活しようという動きがでて教育委員会では



舞の歌

は、昭和六十年に新しい獅子頭を購入して、村の中でかつて獅子舞を経験した渡辺和吉さん（現在七十六歳）から指導を受けた結果今年（六十二年）の小正月に、鳴沢地区の道祖神場でめでたく復活の公演が行われた。（演目は暮の内・狂いの舞・剣の舞の三つ）

付記

写真①は昭和三十年ころ復活をめざして鳴沢地区で舞われた獅子舞で、②の方はその獅子頭を持つ渡辺和吉さん（故人）であ

る。

鳴沢の獅子舞はこの復活の機会を逸して以来伝承が絶えたようであるが、その時の獅子頭は（雌獅子）現在個人の所有物（佑吉さん以外の人）として保存されている。

なお教育委員会で最近購入した獅子頭はこれとは別のものである。

また昭和三十年ころ復活のきざしを見せた獅子神楽の囃子には、大太鼓一、しめ太鼓一、笛一、鉦一が使われていると伝えられている。

第三節 地芝居（じしばい）

上方や江戸で役者を演技させ、稼業として行われた歌舞伎芝居とは別に、地方民間に受け入れられ定着して伝承さ

れてきた歌舞伎芝居を「地芝居」「地狂言」「村芝居」などと呼んで、江戸時代から明治初年ころまでは全国各地で盛んに行われた。

特に娯楽のとぼしい山間の村々では、年に一度か二度行われる公演が、村の最大の行事として期待され、公演に至る数ヵ月も前から出演者が集まり、出し物の決定や役者の選定をはじめ、鳴り物の担当とか裏方の人選など夜おそくまで行い、それぞれの役割が決められると、各部門にわたって猛練習が始まった。

芝居が公演される時期は大方農閑期であつたので、見物人も一層楽しみを深めたが、地方によつては氏神社の祭礼や盆、あるいは虫送りの行事の一環として行われた記録もあるので、これは単に娯楽本位のものではなく、神仏に奉納して祖霊を慰めたり怨霊の慰めを図る村人たちの心遣いの意味も十分にあつたようである。

また、このことが定着して伝承性を帯びてくると、各役割に應じて年齢集団が結成され、ひとつの通過儀礼としての要素を持つようになったところもある。

例えば、何歳から何歳までは下働き、何歳以上何歳までは囃（はやし）方とか演技者として、さらに何歳以上は長老として指揮監督に当たるといふふうにある。

地芝居の興行には信仰上（神事芸能）の理由から、三番叟さんぱんそうが特に重要な役割を占め、芝居に先立ってこれが行われたが、ところによつては三番叟だけを重要視して、他の狂言をおろそかにしたため、三番叟だけが残されてしまった例がいくつもあり、また一方逆に神楽様式の中に地芝居が採り入れられて「神楽風歌舞伎」といったものも発生するなど、地芝居はいろいろの面で他の芸能と関わりを持ってきた。

いずれにしても民間芸能の中でも、特に大衆に支持されたものであることは事実で、その生命力も長かったが、神楽や獅子舞に比べて、比較的早い時期に消滅していった理由は、演目が固定していないこと（常に変化のある演目を披

露しなくては大衆に飽きられるため）経済的に支えられなかったこと（舞台装置や衣裳の面で）技能の修得に時間がかかったことなどが挙げられる。

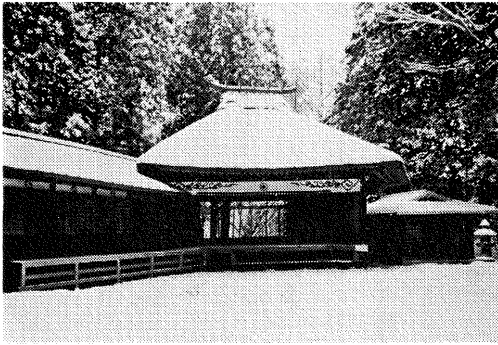
鳴沢村にも江戸時代から地芝居の公演があったことは、現在八幡神社の舞台と呼ばれているものに「回り舞台」および「奈落」の遺構があることで証明される。

また明治時代に入ってから芝居興行の許可をお上かみに差し出した記録もあることから一層の裏付けとなるが、現在のところ興行の内容を物語る資料がまったくないので、果たして明治期の文書を通してこれが地芝居といえる公演であったかどうか不明である。

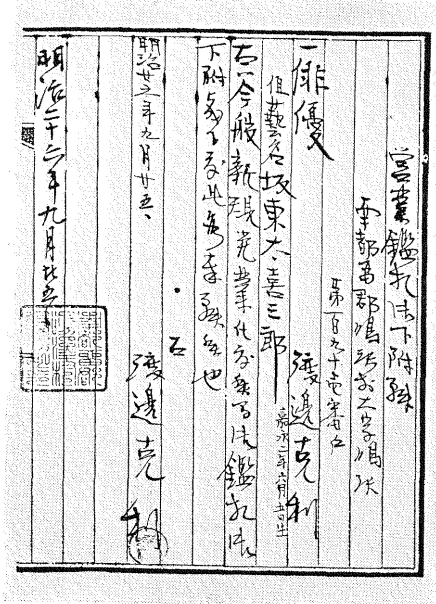
村に現存する明治二十六年九月二十五日付けおよび、明治二十八年九月三十日付の資料によると、この時期芝居はすでに営業化されていて、村内にも俳優と称する者が数人いたこと、またそれらの者が村内で営業としての公演を行ったことが推定できるし、また明治二十八年の資料では、静岡県から芝居の一座を呼んで、興行がなされたことがうかがわれる。

ただし、当時どのような（下題げだい）が公演されていたか、その資料は見当たらない。おそらくこの時期はいわゆる旧来の歌舞伎芝居ではなく、新派と称する近代演劇が行われたものと思われるし、たまたま日清戦争という時代背景もあったので「軍記物」「愛国物」といった部類のものが公演されたものと思われる。

また、そうした時代であったから、役者の営業許可、興行の願い出にも厳し



八幡神社の回り舞台



営業鑑札下付願

い制約が行われ、無鑑札の役者や遊芸関係者では興行が許されなかったことや、興行に当たっては、その都度官庁への届け出が必要であった。

つぎに記述するのは村に現存する役者の営業鑑札を受ける願出書である。

営業鑑札御下附願

南都留郡鳴沢村大字鳴沢

第百九十番戸

併優

渡辺克利

嘉永二年六月五日生

但芸名 坂東大喜三郎

右ハ今般新規開業仕度候間御鑑札御下附願上度此段奉願候也

明治廿六年九月二十五日

明治二十六年九月二十五日

南都留郡長印

南都留郡長 鯉淵忠常殿

また同日付けで、同様式に従ったつぎの者からも鑑札下附願が出されている。

右

渡辺克利

同村大字鳴沢 第六十七番戸
俳優 (芸名中村尾登五郎)

同村大字鳴沢第九十番
俳優 (芸名坂東太賀松)

渡辺音松

慶應元年十一月二十七日生

渡辺文蔵

明治六年十一月十一日生

なお以上鑑札下附願を届け出た三人は、村で興行をするに当たって、新規に一座に加入するため願い出たものであることは、翌二十六日付けで南都留郡役所が検印を押捺している、既鑑札保持者の一覽が添付されていることでも推察できる。

添付の資料に名をあげている者は、つぎのとおりである。

第九〇号 俳優鑑札

南都留郡鳴沢村大字鳴沢第二十六番戸

渡辺甚作 (芸名 市川助若)

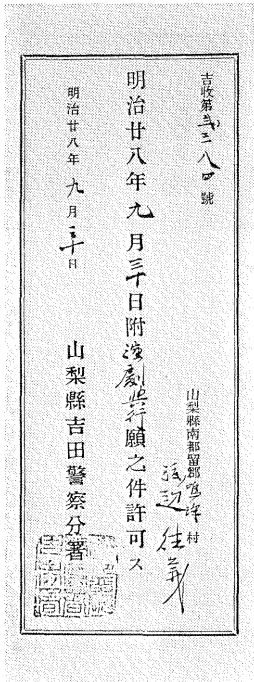
弘化三年四月生

第九〇号 同

右同 第二十五番戸

清水伊之松 (芸名 市川紫桔江)

慶応元年二月生



演劇興業許可書

第九貳号 同

右同 第七十七番戸

第九三号 同

右同 第十六番戸

第九四号 同

右同 新第六番戸

第九五号 同

右同 第十三番戸

第九六号 同

右同 第七十一番戸

以上七人である。

渡辺巳之吉 (芸名 市川桔美代)

文久二年十二月生

渡辺長吉

(芸名市川助蝶)

明治六年二月生

清水竹松 (芸名市川助鶴)

慶応二年十月生

小林亀太郎 (芸名市川亀紫)

明治五年三月生

渡辺與左エ門 (芸名市川世佐吉)

安政五年六月生

しかしまたつぎの資料を見ると、三日後の二十九日に、右七人のうち渡辺巳之吉および渡辺與左エ門が廃業届を出している。

このことは前出の新規鑑札下附を願ひ出たものとともに芝居の興行をしてから、座員の交代があつたことを物語るもので、また同時に營業的興行とはいふものの、各地を巡回して興行する一座、つまり芝居役者を稼業として生活をしている者たちではなく、一時的に役者の鑑札を受けている愛好者の域を抜けていない副業的な存在ではなかつたかと思われる。

いふならば、村内の者が集まって芝居を愛好するグループを構成し、村祭りなどにこれを披露し、木戸銭を取つていくらかの一座維持費を得ていたものか、あるいはある程度の収入を得て、農業収入以外の収入として一家を養う足にしたものである。

そうした意味からすれば、これはまだ民俗芸能のうちの地芝居の要素はかなり残されているものとみてよい。

しかし明治二十八年の興行の内容になると、これは、静岡県から一座を招いて村内で興行しているので、ここまできると民俗芸能としての本来の要素はかなり薄らいでくる。

ちなみに静岡県から一座を招いて興行した関係文書を村の資料で見るとつぎのような内容であつた。

演劇興行願

南都留郡鳴沢村大字鳴沢

第百六十八番戸

興行主 渡 辺 徳 義

右者本村大田和組山神社例祭ヲ祝スル為左ノ俳優ヲ雇入レ来ル十月四日ヨリ晴天三日間毎日午後一時ヨリ十二時迄放楽演劇興行仕度尤御規則之趣堅ク相守リ不取締之義致間敷候間御許可被下度別紙御鑑札之写相添此処ニ奉願候也

明治廿八年九月廿九日

鳴沢村
印

吉田警察分署

御中

右は鳴沢村渡辺徳義が、大田和組山ノ神の例祭に当たって芝居興行をするため、静岡県の一座を雇い入れ公演を行いたいので許可していただきたいという趣旨の願出書であり、これに対して鳴沢村が可と認めた上、吉田警察分署に提出したもので、書面の中にある「左ノ俳優」というのは、左記の面々である。

静岡県富士郡富士根村小泉六十九番地平民

同 六十四番地平民

同 七十番地平民

同 六十九番地平民玉吉長女

同 六十四番地長右エ門養女

同 田方郡田中村大仁二十四番地

明治廿八年九月廿九日

右 渡 辺 徳 義 團

保証人

小 林 武 重 團

中 村 玉 吉 (芸名中村玉吉)

岡 都 長 右 三 門 (芸名瀬川春吉)

神 山 繁 太 郎 (芸名市川繁太郎)

中 村 マ サ (芸名竹元中大夫)

岡 部 ミ チ (芸名瀬川ミチ)

平民久兵エ二女當時富士郡富士
根村小泉七十一番地寄留

室 伏 チヨ

右各俳優 以下遊芸稼営業

静岡県駿河国富士郡富士根村小泉

七十一番地平民

中村玉吉(道化手踊)

同 六十九番地平民

中村フサ(芸名枝太夫)

同 七十一番地中村玉吉二女

中村タキ(三味線)

同 七十一番地平民玉吉長女

中村マサ(道化手踊)

以上の内容からすれば、当然民俗芸能である地芝居には属さないもので、むしろ娯楽の項で扱うものとなる。

ただ、こうしたものがこの時点で行われていたことは、それ以前に地芝居の盛行があつたことであることは認めなくてはならない。

この部分では参考のためにこれを説明した。

(志摩 阿木夫)

第四節 俗 信

鳴沢村の人々の生活は、畑作農業と林業をその基盤として、今日まで続けられてきた。そこでの農業生産に基づく儀礼などは、再生産をはかるばかりでなく、病害虫などさまざまな災禍をしりぞけるためにも行われてきた。そのような儀礼に加えて現実のムラでの生活の場面では、それらを補完するものとして、拝み屋やオウカガイ、あるいはイチイ（イチッコ）などと呼ばれる民間宗教者にたよる部分も少なくない。鳴沢ではハウエン（法印）が実際にクダ狐を使ったり、また狐に教わって易をみたりして、かなりはやっていたようである。

鳴沢村では、そのような民間宗教者の活動ともかかわりながら、俗信の伝承は伝えられてきた。俗信の中心をなすのは、予兆^{よちよ}、卜占^{ぼくせん}、禁忌、呪法の四者である。たとえば、「朝雨は笠ぬいで待ちろ」とか、「烏鳴きが悪いと人が亡くなる」というようなことは、予兆とみなされている。また、「夜、笛を吹くものではない」というようなことは、禁忌あるいは「いみ」と呼ばれている。呪法は、雨乞いや豆占いなどのほかに、さまざまな民間療法があげられる。そのような俗信の言い伝えは、今日の考え方からすると、単なる迷信とかたづけられかねないものであるが、それらは古くからの信仰や、豊かな経験の中から生まれてきたものである。ここでは前述の四つの項目に分け、それぞれの伝承には、いちおう採集の地名を書きそえるが、かならずしもその土地だけに限られるものではない。

予兆

○朝雨は笠ぬいで待ちろ（鳴沢）。

○朝雨は笠ぬいで待ってろ（大田和）。

- 朝虹はその日のたて洪水（鳴沢、大田和）。
- 朝焼けがしれば（すれば）雨、夕焼けがしれば天気（大田和）。
- 朝焼けが黒く消えると雨、白く消えると天気がいい（鳴沢）。
- 夕焼けは百日の日照り（大田和）。
- 夕焼けはあしたの日照り（鳴沢）。
- ヨタカがしきりに鳴くとあしたも天気がよい（鳴沢）。
- 富士山がカサ（笠雲）をかぶれば雨が降る（大田和）。
- オヤマ（富士山）がカサをかぶって、カサが西にかたむくと天気が変わる（鳴沢）。
- ツルシ（吊し雲）が出ると近いうちに雨が降る（大田和）。
- 黒いツルシが出ると雨、白いツルシが出ると風が吹く（鳴沢）。
- 富士山にハラオビ（帯雲）がかかると天気が悪くなる（大田和）。
- 富士山が高く見えれば雨が降って、おちついて低く見えるときは天気が続く（大田和）。
- 富士山が高く見えるときは陽気が悪い、低く見えるときは天気が続く（鳴沢）。
- 東の空が曇れば雨になる（大田和）。
- ナゴ（水蒸気・朝もや）があがると雨になる（大田和）。
- ナゴが下がってくると天気は回復する（大田和）。
- ナンゴがのぼると雨になる（鳴沢）。
- 逆さナンゴ（ナンゴが下がる）だと天気になる（鳴沢）。

- 東風が強いときは天気が変わる（鳴沢）。
- 東風が吹いてくれば雨が降る（大田和）。
- 東風は天気が変わる前兆（鳴沢）。
- 西風になると天気になる（大田和）。
- 西風が強いときは天気かもつ（鳴沢）。
- 日がさ、月がさが出ると天気が変わる（鳴沢）。
- コウジンサン（自在鉤）の煤が手にはりつけば、近いうちに雨が降る（大田和）。
- オコウジンサマにシナ（湿気）がくると天気が変わる（鳴沢）。
- 干葉はじばにシナがくると天気が変わる（鳴沢）。
- 日陰解けがするとぬく（暖かく）なる（大田和）。
- 富士山の沢に雪が多いと、その年は寒い、冷害（大田和）。
- 富士山の農鳥が早く出た年は豊年（大田和）。
- モロコシの根が、高根に張る年は強い台風がくる（大田和）。
- 雀が屋根棟に巣うくった年は大風おおかぜはこない。雀が軒下に巣うくった年は大風が吹く（大田和）。
- カラス鳴きが悪いと不幸がある（鳴沢、大田和）。
- 朝グモは縁起がよい（鳴沢）。
- 蛇のむけがらは縁起がよい（大田和）。
- ヤマツカガシのむけがらは縁起がよい（鳴沢）。

ト占

○正月十四日の夕方、ムラの中心にある道祖神の両側にもす提灯の明暗によって、その年の災難を占った。たとえば、西側のそれが暗いとニシムラで火ごとたたり（火災）や災難があるといい、反対のヒガシムラは明るいので安心したものだという（鳴沢）。

○正月十四日の晩から明け方にかけて、イリメシサマ（月）の山の端（イリメシサマの沢）への入り方によって、その年の豊凶を占った。道祖神の台の上に登って、柱によりかかり、陽気占いを行う。陽気の悪い年は、月が出たり入ったりするという（鳴沢）。

○月占いは、奥の家（屋号）の前で行った。「イリメシサマが入らっしゃる、出て拜めよ」と互いに声をかけ合つて月を拝み、その年の豊凶を占った（大田和）。

○正月十四日の朝、外で鳴く鳥の声によって作物のできを占う。小さい鳥が先に鳴けば小物があたり、反対に大鳥が鳴けば大物があたるという（鳴沢）。

○トシトリ（節分）の晩、豆まきの後に柀に残った豆で作物の占いをした。粒の揃ったものを十粒選びだす。粟を占うならば、「粟、粟」と唱えながら、飯茶碗へ水を汲んでおき、その中へ落とす。かりに二粒浮いて八粒沈むとすれば、八分と占った。モロコシ、芋、大豆、蚕などを占い、その結果を紙に書きつけて、壁に貼ったりもした（鳴沢）。

○トシトリの晩に、大豆で陽気占いをした。ヒジロ（イロリ）の熱灰をならしてサクをつけ、なま大豆を十二粒並べ一月から十二月までの天候をそのはぜる順によつて占った。三月の豆がはやくはぜると三月は陽気が高い（早く暖かくなる）などと占った（大田和）。

○富士山に降る雪の降り方や消え具合によつて作物を占つた。東側の稜線にかたよつて降れば大麦があたり、一方、西にかたよつて降れば小麦が豊作だという(鳴沢)。

○地震があつたときは、何時、何時で占いをした。「六つ八つ風に九は病、五七の雨に四つ日照り。」また、九つに揺れば苦を求めるといふ(鳴沢)。

禁忌

○御飯にオツユ(味噌汁)をかけて食べてはいけない。そうすると、頭から水をかけられるといふ(大田和)。

○汁かけ飯をしてはいけない。ことに、サキヤマはかけ飯を食うと、倒す木がからだにかかるといふ(鳴沢)。

○神主は馬さしを食べない(大田和)。

○御飯を食べて、じきに(すぐに)寝ちよ、牛のようにずうずうしくなるから(鳴沢)。

○御飯を食べてすぐに寝ると牛になる(大田和)。

○びっこ箸を使つてはいけない(鳴沢、大田和)。

○二十九日には餅を搗かない(鳴沢)。

○二十九日は苦餅、苦を搗く、苦を持つといつて、餅を搗かない(大田和)。

○杵を落とせば杵どおし(空臼を搗くこと)。そうすると、その家は絶家になる(鳴沢)。

○杵を落とすと苧殻の梯子を燈芯で臼を背負つて、屋根棟まで登らなければならない(鳴沢)。

○杵を落とすと苧殻の梯子を臼を背負つて、屋根棟まで登らなければならない(大田和)。

○杵どおしをしちよ(空臼を搗く)。(鳴沢)。

○不幸のあつた家では、正月に門松を立てない。年賀に行かない(鳴沢・大田和)。

- 元日には、座敷をはき出してはいけない(大田和)。
- 月の朔日つぎちと十五日には、掃除をしてはいけない。また、それらの日には女の衣類を洗ったり干したりしてはいけない(鳴沢)。
- 二月八日に、外に下駄や履物を出しっぱなしにしておいてはいけない(鳴沢)。
- オヨウカの日には、針を使っちゃあいけない(大田和)。
- オヨウカに出かければ、八日たつても戻ってこない(大田和)。
- 月の八日に旅立つ者は帰るまいぞよ九日に(大田和)。
- 七日八日に旅立つ者は帰るまいぞよ九日に(鳴沢)。
- 八日子はきらわれる(大田和)。
- 八日子は親を取り殺す(大田和)。
- 四菜、九菜、なくな(蒔くな)(大田和)。
- 四年稗、九年びねは生おえないから播おいちよ(鳴沢)。
- 仏滅の日には着物をたつちよ、旅に出ちよ(大田和)。
- 祝いごとは申の日はさける(大田和)。
- 子味噌、卯味噌は寝てえて動かない(鳴沢)。
- 子味噌、卯味噌はきらう(大田和)。
- 普段に逆さ水は使つちよあいけない(鳴沢)。
- 逆さ水はしちよあならない(大田和)。

- 箸と箸とはさみっこをしちやあまずい（鳴沢）。
 - 位牌は四十九日が過ぎるまでは家から出しちやあならない（大田和）。
 - 朝がけに針を使うとよくない（鳴沢）。
 - 朝がけに出かけるときには、針を使うものじゃない（大田和）。
 - シメシ（おむつ）の夜干しをするな。夜干しをすると、ムジナに持ってかれる（鳴沢）。
 - シメシの夜干しはよくない。夜干しをすると、狐につままれる（大田和）。
 - 櫛を拾うことは、人の苦をもとめること。踏んづけて、くじいて通ればいい（鳴沢）。
 - 櫛は拾うものではない（大田和）。
 - 夕方かくれんぼをすると神隠しにあう（鳴沢）。
 - 夕方かくれんぼをすると鬼に隠されてしまう、隠し神様に隠される（大田和）。
 - 夜、笛を吹くものではない。それは悪者への合図だ（大田和）。
 - 夜爪を切るものではない（鳴沢、大田和）。
 - 足袋を履いて寝ると、親の死に目に会われない（鳴沢、大田和）。
 - 敷居をふむもんじゃあない。敷居にのぼることは父親の頭にのぼることと同じだ（鳴沢）。
- 呪法
- 早魃かんぼつのときには、ノガシラの池と竜宮の池と榛名山の池の水を合わせると雨が降る（鳴沢）。
 - 早魃のときには、榛名池の底をさらうと必ず雨が降る（大田和）。
 - 雷が鳴るときには、「クワバラ、クワバラ」と唱えて、桑かの木の下へずくんだ（大田和）。

○七草粥を食べたあとの鍋や茶碗を洗った水を、「蛇もムカデもどおけどけ、俺おらこの家の主やだぞ、逃げなきや焼いて水かけて殺すぞ」と唱えながら、家の回りにまいた（大田和）。

○道祖神のドンドコモシの火にあたると、夏になつても蚊にくわれぬ（大田和）。

○道祖神のドンドコモシの火にあたれば、山に行つて蚊かに食かあれない。道祖神参りに行けば、一年中病むことが軽い。道祖神は厄除けの神様だ（鳴沢）。

○道祖神のドンドコモシの火（消炭）をもらつてきて、お蚕お蚕のときのたきつけにすればお蚕お蚕があたる（大田和）。

○トントリ（節分）には、烏、雀などの病害鳥虫の口焼きをする（鳴沢、大田和）。

○五月節供の菖蒲湯へ入れば、山へ行つて蛇に見込まれない（鳴沢）。

○盆の十六日に人が死ぬと、イザル、釜、鍋をかぶせてやる。そうしないと、ホトケに頭をたたかれる（大田和）。

○菖蒲で頭に鉢はちまき巻をすれば、頭の病気を病まない（大田和）。

○頭の痛いときに、菖蒲で鉢はちまき巻をすれば、熱が下がる（鳴沢）。

○けがをしたときは、その部分をさすりながら、「この傷のいたところは、遠くの奥山へすつとべ」と唱え、三回息を吹きかける（大田和）。

○けがをしたときは、「いたい、いたい、の向こうの山へすつとべ」と唱える（鳴沢）。

○ものもらいができたときは、べっこうの櫛を火であぶつて、「ものもらい、ものもらい、人の眼まなこへなぜできた、熱い物で焼いてくれるぞ」と唱えながら、そこに押しあてる（鳴沢）。

○いぼができたときは、三日月様を拝めば治る（鳴沢）。

○いぼができたときは、割箸などを用いて「いぼいぼ渡れ、一本橋はしよ渡れ」と唱え、他の人の身体に箸の先をつけて

渡した（鳴沢）。

○ホウソウを植えて七日たてば、赤い紙でオシメ（御幣）を切り、豆強飯を炊いて親類に配る（大田和）。

○ホウソウを植えて八日目にホウソウマツリをする。八日紙（赤い紙）でオシメを切り、十二日目にホウソウ送りをす。藁でフネ形のをこしらえて、その中にホウソウガミサン（赤い幣束）を入れて神社へ納めに行く（鳴沢）。

○厄年生まれの子は、道の四辻に捨て、拾った人の子にしろらう（大田和）。

○便所を作るとき、紅を入れればよい。便所を埋めるときは尻をぬいて埋める（大田和）。

○夕顔をとるときには、小枝を折って夕顔にちよつと刺してとると苦くない（大田和）。

○夕顔をとるときには、必ず木の棒（小枝）を刺してとる（鳴沢）。

○猫が死体を持ちあげるので、死体の上にキレモノ（刃物）をのせておく（大田和）。

○イチイ、イチッコが回ってきて口寄せをした。家の悩みごとを拜んでくれたり、死んだ人の口寄せをした。女衆おんなしゅが何人か集まつたのみ、飯食い茶碗に水を汲んできて、ヘダの木（イチイ）で水向けをすれば、だんだんホトケが寄つて来るといふ。死んだ者の気持やあの世のことなどを聞いた（鳴沢）。

○昔、イチイ、イチッコといつて、死んだ人を寄び出す女が回ってきて、口寄せをたのんだ（大田和）。

民間療法

○風邪には、ヒジロで梅干の種をあぶつて熱湯を注いで飲むとよい（大田和）。

○腹くだしには、ゲンノショウコを煎じて飲むとよい（鳴沢）。

○胃腸には、ノコギリツバの根を煎じて飲むとよい（鳴沢）。

○熱さましには、ムクジョウをとつてきて、塩でもんでつけるとよい（鳴沢）。

- 熱さましには、ウマノオコワがきく（大田和）。
- 腹痛には、ゲンノショウコを煎じて飲むとよい（大田和）。
- 高血圧には、シヤクナゲの葉を煎じて飲むとよい。けれども、飲みすぎるとあぶない（鳴沢、大田和）。
- 百日ぜきには、野のヒルを煎じて飲むとよい（大田和）。
- 百日ぜきには、ニンニクがきく（鳴沢）。
- かんの虫封じには、カミホウズキを頭の中ズリ付近のピクピクするところへ貼るとよい（大田和）。
- はしかには、牛蒡の種を飲めばよい（鳴沢）。
- はしかには、牛蒡の種か椎茸のねっこを煎じて飲めばよい（大田和）。
- ものもらいができたときは、馬の尻尾の毛で涙の穴をつつつけばよい（大田和）。
- ものもらいには、自分の髪の毛をぬいて、目がしらの穴をつつくとよい（鳴沢）。
- やけどには、熊の脂をなすればよい（鳴沢、大田和）。
- あかぎれには、松脂をとって煮立て、蠟と油を加えてこね、それを火箸で割れ目に焼き込むとよい（鳴沢）。
- あかぎれには、杉の木の脂を火であたためて、割れ目へこそくると風が入らないから痛くない（大田和）。
- 乳ばれものには、水仙の根を掘って、すってはればよい（鳴沢、大田和）。
- チャンマイ（産後の肥立ちの悪いとき）には、川魚の汁を飲むとよい（鳴沢、大田和）。

第五節 口承文芸

1 昔話

伝承の実態

鳴沢村は、昔話伝承の希薄な郡内地方の中にあつては、比較的伝承度のよい地域といえよう。それは、鳴沢の小林もと氏、大田和の渡辺しまの氏をはじめとするすぐれた伝承者によるところが大きい。けれども、一般的には、この地でも、昔話はおとぎ話のイメージがつよく、口伝えによる昔話にはほとんど興味をもたれていない状況である。採集された話の多くは、実際に話した経験に乏しいため、あらずじを追いがちになり、形骸化しており、断片的なものが多く、話のまとまりは必ずしもいいとはいえない。

ここでは、昔話のことを、一般的には、「昔話」と呼んでいるが、五大昔話に代表されるような本格昔話のことは、「おとぎ話」ともいい、また、短く笑いをさそうような笑話については、「一口話」「おとし話」などとも呼ぶ。

昔話を話す機会は、夕食後ヒジロ（イロリ）にあたりながら、雨が降って農作業ができないとき、あるいは一年中で最も寒さのきびしい一月下旬から二月にかけての仕事のないときなどである。話の場としては、コタツ、ヒジロの周り、藁仕事の小屋などがあげられる。話し手は、おもに家の中の父母、祖父母であつて、その他、村の中においては、貰い風呂に來た近所の年寄りや、祖父母のツレ（友人）などであつた。

昔話を聞きたい場合には、「お爺じい、今夜も昔話よう教あかさっしやい」などとせがみ、「それじゃあ、ひとつ話はなすべえ」などと答えて話しはじめた。その語り出しは、「昔、あつとうよ」とか「昔、あるところ」などで、結句は、

「はい、これでおしまい」「市の栄えだ」等で結んだという。話し手が途中にはさむ言葉として、「……ちゅう」「……せった(とといった)」などがあり、聞き手は、鳴沢では、「ヘーン」「ヘーン」と相づちを打った。

採集方法

昔話は口伝えによって伝えられてきたものである。しかし、近年の都市化等によって、その伝承は失われつつある。

採集にあたっては、村内の話者の家を個別に訪問し、テープレコーダーで録音する方法をとった。録音テープからの翻字にあたっては、話そのものを文字化するようにつとめ、文意の通らない部分もあえてそのまま記した。

話型

昔話の調査は、鳴沢の男性一人、女性一人、大田和の男性一人、女性五人の合計八人を対象として行った(表1参照)。採集によって聞くことのできた昔話は、断片も含めて、七十五話である。それらを『日本昔話大成』の分類に

表1

- 註 (1) 同一部落は五十音順に記す。
 (2) 動は「動物昔話」、本は「本格昔話」、笑は「笑話」、形は「形式譚」、語は「語り物」を示す。
 (3) 昔話採集状況の数字は話数を示す。

部落名		氏名	性別	生年	昔話採集状況		計
動	本	笑	形	語	計		
大田	鳴沢	小渡	男	明治三三年	1	5	2
和	沢	林	女	明治三三年	4	13	
小	林	金	男	明治四四年	1	1	6
林	邊	睦	女	明治四四年	1	9	
ゑ	も	と				1	28
つ	と						
女							
明							
治							
三							
六							
年							

あてはめると、つぎのようになる(表2参照)。

表2

大田和				
渡	渡	渡	渡	渡
辺	辺	辺	辺	辺
長	しま	五	い	さ
子	の	清	路	子
女	女	男	女	女
明	明	明	明	明
治	治	治	治	治
四	四	四	四	三
一	一	〇	四	八
年	年	年	年	年
3	7	1		2
	5			
2	10	2	1	1
	2	1		
	2			
5	26	4	1	3

番号	題名	日本昔話大成	日本昔話名彙	話者	備考
1	〔動物昔話〕 十二支と猫 猿蟹合戦 カチカチ山 獅子狼より漏屋が恐い ホトトギスの鳴き声	一二 二七A 三二C 三三A 四六 四七A	十二支の由来 蟹の仇討 勝々山 古屋の漏り 時鳥と兄弟 雀孝行	鳴沢 大田和 渡 小林もと	断片
2	雀と燕	四七A	雀孝行	大田和 渡	
3	カッコウの話	〃	〃	大田和 渡 渡 渡	
4	カキトンとジュウイチ カキトンとジュウイチ カキトンとジュウイチ 十兵衛爺ホイホイホイ	五七	柿十と十一 〃 〃	鳴沢 大田和 渡 渡 渡 渡 渡 渡 渡 渡	

17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6			5
大蛇退治	文福茶釜 継子の釜茹で	笠地蔵 継子と笛	大歳の火 元中に引い	死人は金 貧乏神	弘法様の万年機 舌切り雀	鳥吞爺 チチンビヨドリ	産神問答 炭焼の男と女	子育て幽霊 狐女房	蛙報恩 狐女房	蛇蟬入 蛙報恩	〔本格昔話〕	鼠の話 〃 〃 〃	継子菜 〃 〃 〃	
本格新一A大蛇退治	二三七A 文福茶釜 継子の釜茹で	二〇三 笠地蔵 二一七 継子と笛 二一九 継子の釜茹で	二〇二 大歳の火 〃 〃	二〇一A 貧乏神 一九八B 弘法機 一九一 舌切り雀	一八八 鳥吞爺 〃 一五八 運定め話	一四九A 炭焼長者・初婚型 一四七A 子育て幽霊 一四一A 産神問答	一〇一A 蛇蟬入・芋環型 一〇四A 蛙報恩 一〇一A 狐女房・聴耳型 一〇六A 狐女房	一四七A 子育て幽霊 一四九A 炭焼長者・初婚型 一四一A 産神問答	一〇一A 蛇蟬入 〃 〃 〃	蛇蟬入 〃 〃 〃				
鳴沢小	鳴沢小 大田和渡 大田和渡	鳴沢小 大田和渡 大田和渡	鳴沢小 大田和渡 大田和渡	鳴沢小 大田和渡 大田和渡	鳴沢小 大田和渡 大田和渡	鳴沢小 大田和渡 大田和渡	鳴沢小 大田和渡 大田和渡	鳴沢小 大田和渡 大田和渡	鳴沢小 大田和渡 大田和渡	鳴沢小 大田和渡 大田和渡	鳴沢小 大田和渡 大田和渡	鳴沢小 大田和渡 大田和渡	鳴沢小 大田和渡 大田和渡	鳴沢小 大田和渡 大田和渡
小林もと	小林もと 大田和渡 大田和渡	小林もと 大田和渡 大田和渡	小林もと 大田和渡 大田和渡	小林もと 大田和渡 大田和渡	小林もと 大田和渡 大田和渡	小林もと 大田和渡 大田和渡	小林もと 大田和渡 大田和渡	小林もと 大田和渡 大田和渡	小林もと 大田和渡 大田和渡	小林もと 大田和渡 大田和渡	小林もと 大田和渡 大田和渡	小林もと 大田和渡 大田和渡	小林もと 大田和渡 大田和渡	小林もと 大田和渡 大田和渡
														事典「継子菜」
														断片
														イソツブ種

23	22	21	20	19	18
〃 〃 〃 姥捨山 姨捨山 姥捨山 〃	九折馬鹿 半殺しか手打か 嫁の餅切り 親孝行 橋渡るべからず 一休の虎退治 〃	尻つぶり嫁 ドッコイシ ^ヨ 首掛け素麵 茶栗柿麩	炬燵入 ボタ餅で洗面 日本はこの倍ある 〔笑話〕	油売りの金 〃	兎引き裁判 〃
五二二A 親棄山 〃 〃 〃 〃 〃	四一五 四二七 五一〇B 〃	三七七 三六二B 三五一 三三一 三一六 三一〇 三〇七	こども日本 牡丹餅で洗面 炬燵入 茶栗柿 首掛け素麵 買物の名 尻ひり嫁 〃	〃	本格新二八兎引き裁判 〃
〃 〃 〃 〃 〃 姥棄山 〃	祝ひ直し 和尚と小僧 〃	へやの起こり 団子掣 耳掛け素麵 茶栗柿	風呂場の餅	〃	〃
〃 〃 〃 大田和 鳴沢 〃	〃 〃 〃 鳴沢 大田和 〃	大田和 鳴沢 大田和 鳴沢 大田和 鳴沢 大田和	大田和 鳴沢 小 林 〃	〃 〃 〃 渡 小 林 〃	渡 小 林 〃
渡 辺 長 子	渡 辺 長 子	渡 辺 五十路 しまの	渡 辺 しまの	渡 辺 金 陸	渡 辺 金 陸

爺さんのこと、「婆汁たべろつて」そう言った。「名彙「かちかち山」大成・三三二C」（大田和 渡辺しまの）

雀と燕

雀は、その、釈迦様に、あの、いろいろ好かれただと。おお、燕じゃない雀。ほうゆう話を聞いただけんどね。お釈迦さんが、その死ぬか生きるかとき、雀やあ、ほれ下駄一方草履一方履いて飛んでつたと。ほつたら（そうしたら）、燕はお化粧して紅塗つて、ついたりいろいろ洒落て行つたから、「お前は一生泥を喰え」つて。それから燕は泥で菓うくうだつて。そういう話を聞いたよ。「名彙「雀孝行」大成・四七A」（鳴沢 小林もと）

雀と燕

お釈迦さんが言うでしょ。そのときに、お釈迦さんが亡くなつたら、その、みんなお釈迦さんが亡くなつたから、「さあ、お悔みに行こう」言つたら、雀はすぐ飛んでつたつて、その、着たあまんまで。ほしたら、燕はそういうじやあ、そいじやあちゃんと着物着替えて、お化粧して。そうしたら、「それじやあ、雀はすぐ来てくれたから、お前は羽毛で自分のうちを作れ、燕はそういうとき早く来なかつたから、泥でうちを作るように、土でうちを作るように。」そういうことを言われたつて話よう聞いた。「名彙「雀孝行」大成・四七A」（大田和 渡辺しまの）

カキトンとジュウイチ

弟に柿をむいてくれたら、兄さんに十くれたら。ほれから、その弟の柿をひとつ貰いたくて、弟の方が一個余分だからねえ。その弟を殺してそれを取つた。そしたら、それが鳥になつて。カキトンちゆう鳥とジュウイチちゆう鳥がある。「名彙「柿十と十一」大成・五七」（大田和 渡辺しまの）

継子菜

二粒三粒あるじゃん。そえがほれ、こう炒り鍋で炒つて、豆よう。そいで、継つ子に、「手を洗つてこう、豆ようく

れる」そう言つて、洗つてこうせつて。温めておいてその豆よう、子供は知らないどう、温めた手を突ん出いとう。そしたら、炒り鍋の中からくれて、ここ（手の平）に炒りつついたちゅうことを。そしたら、あのう、それが草んなつて出とうちゅうことを言うけど、本当だか嘘だかな。ほだけど葉っぱにあるな、葉っぱに粒が。ほど無理ようするもんじやないじようど。そうされたあ子が、草になつて皆に見せるどうと教いてるけんどな。「事典「継子菜」」（鳴沢 小林もと）

蛇掣入

男がな、毎晩毎晩通つて来たら、妹がしゃくまで（大人びていて）、「姉え、俺ん処へ来るのは人間じやないじよう。」「何よう言うどう、こつべいらしいこと（なまいきなこと）を言つちよ」つて。「ほどうが、下駄の音もしない戸の音もしないが、何の訳で音もしないで来るどう、きつと人間じやないじよう」そう言つたら、その、妹の方がはしつこくて。姉えははい（もう）それえ惚れこんでるどうで何とも思わない。そしたら、その、「人間のように着物を着てくるから、この、人間の着物の褌のところい知らないように糸を通して針よう刺してやれ、そうすればどこへ行かか分からあ」つて。ほうで、朝出見たら節穴から出ていって、この山奥の処へそれを追つたら山奥回りで、はい（もう）鉄よう通されとうで、その蛇は「うう」なんつて唸つてとう。はいから、姉えがびつくりして、「まあ、あんな者の子を俺あ孕んどうが、どうしたらよからず」つて言つたら、近所の人、誰てつとう（つて言つたか）、おお家のお嬢つてつとう、「蛇やあ大蛙を呑むどうが、蛙う持つて来て盥を跨げ」そうしれば盥の中へ半分蛇の子を産んどうつちゅう話を聞いとう。「名彙「蛇掣入」大成一〇一A」（鳴沢 小林もと）

蛙報恩

今のように（でなく）家数が軽い（少ない）から、藪があるら。藪の根で蛙う蛇が呑んで。蛙が逃げるやつ、また呑ん

であるやつ、そのお檀那様が見ただと。そしたら、「そんなに逃げるやつ呑むのもどっちも咎とがどう、お前はほかのものを食った方がいいわ。」冗談に、「俺ん娘をくれるそうで、蛙う放せ。」(そう言ったら)、放したと。ほしたら、蛇が来て、ほいで、「娘をどうしても貰いたい。」ほしたら、娘が三人あつただと。その家に三人あつて。ほして、そのいちばんしまいの(末の)娘が、「お父さんが、これじゃ困るそうで、わたしが行きましよう」ほういつて。「汝が行つてくれちゃあ嬉しい、ほれじゃ俺も、あの、蛇を騙だましてもよかつとう、蛇のおかつさん(蔵)になるように行つてくりよう」つて、ほいたら(そう言ったら)、「お父さん、穴のあいてない瓢ひょうを三本買つてきてくりよう。」「ほんくらのこととはわけない。」刳を買つてくるじゃ刳を買つてきて、娘にやつたら、「お前のオカタンなるから」(つて言つて)、瓢をかついで蛇の後を追つてつたと。ほいたら、池へ入つてな、池だか大海だか知らない水ん中へ入つて。「ここへ来てくよう」ほしたら、娘がその刳を投げてやつて、「こよういっぺんに沈めてしまえれば俺がお前の根へ行くから、俺の見てる前で沈める。」ふたつまじや沈めてもひとつは浮いて、なんぼ見てえても浮いてだめで、「これでお別れどう」せつて、「俺おまうは、はい(もう)思わなくてくよう」(と言つたら)、蛇が大涙あこぼいたちゆう話は聞いたよ。

「名彙「蛇髻入」大成・一〇四A」(鳴沢 小林もと)

狐女房

信太しんたの森の白狐かな。あのう、狩人に追われて、殺生人はそりよう撃ちいかかつとうと。ほしたら、あのうその人が袴あはいててな。その人の根へ白狐がとんでつとう。そういでずくんて白狐隠してくれたら、ほしたら、その、狩人が行つちまつとうから、「ほれ、殺生人はいないからどつちいでも行け」つたら、それが信太の森の白狐で。その人のいいなずけのお嬢かみに化けてきて。三年いて。そいで、手前の毛を抜いて機に織つて、その白狐が。そして、尾を織つて。その、夫に着せるが大名縞、葛の葉着るのがやたら縞、童子丸つちゆう、童子丸つちゆう名がつけて。そ

して、その、機あ織つて三人に着物を縫つて着せとう。そして、出て行くときやあ障子の組子へ手前が口でくわえて筆で、童子丸に言いごとを言つとて行つとうちゆうことを、話を聞いとうどうがな。その、「あたり近所の連友達と争いごとをしるじゃあない、お前は本当の人間の子じゃあない。本当は狐の子どう」そう言つて、障子の組子へ書き置きをしとて、三年経つたら出ちまつて。そして、その、葛の葉は来るのが三年目に来とうどう、ちゆうことを。「名彙「狐女房」大成・一一六A」(鳴沢 小林もと)

子育て幽霊

赤あ産んで。そのう産まないで、産みそつて(そこなつて)死んで。そしたら、腹ん中に赤ん生きてるだあと。そのう産ませてくれないで埋めてしまつたら。そうしたら、今度あ、あの、晩方な、店へ女の人が買物に来るどう。ふた晩もみ晩もひとつ時間(同じ時間)に来るから、この人の持つて来とうお金よう、まあ、よく見て、別に置くべえと思つて見たら墓場の土だと。それから、その、お産で埋めとう子があるそうで、掘じくつてみたら、棺の中で生まれて、飴を買つてつちやあ親が、死んどう親が、その子供の口へいっばいひつ付けて、くれてたつけ。「名彙「子育て幽霊」大成・一四七A」(鳴沢 小林もと)

産神問答

昔やあイチイつて、死んだあ人を呼び出す人が来たもんだ。イチイが二人寄つちやつて、あすこの家へ今度あ子供が生まれたから、あすこのその子供へはいく年の寿命を与えようかつう話を聞いた。隣りのお婆さん、隣りの家の子供が生まれたそうだけど、いく年の寿命を与えたらいいか、そういう話をしたあつて。「名彙「連定め話」大成・一五一A」(大田和 渡辺しまの)

鳥吞爺

昔なあ、お爺とお婆とあつて。ほいで、お爺が山へ行って鳥う掴まえて来て。そようお婆さんが、「うまく煮えとらう」つて。隣りの子も来とらうで、「さあ、お前も喰え。」そいで、隣りの子にもくれて。お婆とお爺と三人で食べて、「じゃあ、今夜は俺と寝ろ」つて（その子を）抱いて寝とらうつて。そしたら、お爺のへソを探つて。お爺のへソをこらうして引つとらう。ほしたら、お爺のへソが、「チチンチヨドリ、ゴヨノオンタカラ」つて鳴いとらうつて。お迦話どう。「名囊「鳥吞爺」大成・一八八」（鳴沢 小林もと）

弘法様の万年機

お坊さんになつて、人の心を見歩つただちゆうことを言うけんど。ほしたら、機あ織つてる処へ行つて。ほして、「こよう、機あ二尺ばかりがほしいけんどんくないか」つたら、その娘がええ心で。ほいで、「二尺でいいかな」つて、切つてやつたら。そしたら、それつからなんぼ織つてもその機が糸がつながつてとらう。弘法様の万年機。

〔名囊「弘法機」大成・一九八B〕（鳴沢 小林もと）

貧乏神

ある日、お嬢さんが奥の座敷を掃除に行つとらう。ほしたら、出くわしやう。髻の長いお爺さんが座つてて、どこのお爺だか知らない。「こんな処にいないで出て行つてくよう」ほう言つたら、「お前が前々つから貧乏神、貧乏神つて呼ばつてくれるそようで、この家の財産食つてしまわなけりや俺あ行かないよ。是非置いてくよう。」貧乏神つとらう悪態つくもんじゃないつて。〔大成・二〇一A〕（鳴沢 小林もと）

死人は金

居候つて言えば男ずら。ああ、居候が、今夜火を絶いしちよ。昔やこの村じゃオモツセエ（大晦日）に火を絶いればな、身上が絶いるつちゆう言いごとを言つてとらう。ほどうて、薪よううんとくべてよ、その夜間。夜中火を燃して、

夜中馬鹿ばかっ話はなをしてとうとうが、居候ゐこうが眠ねつただ。そうしたら、火が、火がなくなつて、困りもんだつちゆうとこで、常口じょうぐち先へ行つてみたら、「山の方で火が燃えてるからあすこへ行つて火の種たねよう貰つてこべえ」ついたら、そして、困つたもんだ、ここまで来とうじや仕方はない。こうゆう訳で俺おや困る、燠おきようひとつくられてくよう」ついたら、「燠おきようもくれるけど、この死人しびとを背負しよわしてやる。家うち、行つたら見ないで蹴込おきこめ。」そして、燠おきようも持たせたり、その、死人しびとう背負しよわせたり。その人ひとあ背負しよわせとうどうで、おつかなくて背負しよつて来とう。その人の言うように縁の下へ蹴込おきこんどいたら、金かねのニヨウになった。あとで見たら金かねのニヨウになつてとうゆうことを。お迦話おやだな、それも。「名彙「大歳の火」大成・二〇二〇（鳴沢 小林もと）

元中に吊い

すごく財産家だいまんかの家に女中おうちさんがいてね。「オモッセエ（大晦日）に火を絶やすもんじゃないよ」つて言つたら、その女中さんが不注意で火を絶やしちまつて。さあ、困つたよ、お元日になつても火が、何なにつか炊くことができない。それから、そこをお葬式おんげが通つた。それから、そのお葬式おんげの火を貰もらつてきて炊いて、その主人しゅじんにおこられて追い出されたちゆう話を、元中かんちゆうに吊と、えちゆうことをよく言うわな。

お葬式おんげを貰もらえはその火をくれるつて。しかたがないからお葬式おんげを貰もらつて、その家うちでお葬式おんげを出した。「名彙「大歳の火」大成・二〇二〇（大田和 渡辺しまの）

継子の釜茹かまじゆで

継つぎつ子を茹ゆでて。ほしたら、その、お前まへつち何なによう、お千箇寺せんがじをみとうような人が行つて。「はてこの家うちは変へんだなあ」と思つて。中へ入つて。火が釜かまで燃もえているから、「手を焙あらしてくよう、よく煮ねえるなあ何なによう煮ゆてるだあえ」ついたら、「味噌みそを煮る。」「じゃあ、味噌豆みそまめは七里しちり戻もつても食くべるもんだちゆうから、よんでくりよう」つて。

「まだ煮えないどう、蓋あ取らないでくよう」親がそう言つとう、お婆だかお嬢だか。それでもな、このくらい煮えりゃあ豆じゃあ食べられるから」ちつて、蓋あ取つたら子供が入つて。そこから、お千箇寺がその釜あ茹でるやつ皆に教し歩つたずら。その家じゃ味噌豆を煮て馬鹿をみた。「大成・二一九」（鳴沢 小林もと）

大蛇退治

一軒の家さい大蛇が金の幣を立てれば、どんな大食い娘でも、娘をお宮さんへ納めるだつちゆうことがあつて。そうして、幾回もそんなことしてたら、今度お宮さんへ武士だか何が昔泊つとうことがあるどう。「ワツンヨイワツンヨイ、ワツンヨイワツンヨイ」で、賑やかで来るで、どうゆうこんだかと思つていたら、お宮さんへ置いて、そのまんまみんな帰つちまうから、箱の蓋取つて見とうつて。そしたら、娘で。そして、娘ははい（もう）食あれるもんどうと思つて、「俺が今日へえ授かつとうで、何処からでも食べて下さい」つて寝てて、箱にいとうだつて。「どうゆうこんどう、俺あ宿に間違がつちまつて、お宮へこうして来とうどうが、俺あ人を食う人間じゃあないじよう、どうゆう訳どう」つて聞いたら、「村でこうゆう訳どうわ幾人もこういうことをされとう」つて。ほしたら、「よしよし、俺が今夜それを確かめてみらあ」つて。と、裏山からうなり声がして、でかい大蛇が来て、娘を飲みいかかった。その大蛇絶いしとうことを。泊つてとうお侍だか何が絶いしとうちゆうことを。金の幣を、それを屋根棟に刺す。大蛇がそんなことをしええないな。「大成・本格新一A」（鳴沢 小林もと）

児引き裁判

本当の親と、貰つとう育ての親で、「俺の子どう、われの子どう」で。「どつちが強い力いっぱい、その子を両方へ引つぱれ」つたら、本当の親が放して。ほれからその、継母ちゆうだか育ての親が勝つたら、「そやあ反対どうわ」せつて、手を放した方へ軍配をあげたつちゆう話をな。「大成・本格新一八」（鳴沢 渡辺金睦）

児引き裁判

育ての親と、育ての、貰もらつとう人の、「俺の子だ、俺の子だ」で引つ張りっこをして。引つ張りっこをしたら、手が痛いから、うっ放とう方が本当の親どうちゅううことを聞いと。〔大成・本格新二八〕（鳴沢 小林もと）

油売りの金

油を売って。何だか売った金を盗まれて。そしたら、誰ん盗んだか分からないで、「このお地藏様がそうじゃあ」とって、「お地藏様、引つたてろ。」お地藏様あ車へつけて、奉行屋敷へ持ち込んだら。さあ、そこにいと者が、みんな何をするちゅう訳で面白半分に続いて行つたら、門を閉められて。「これえ三文。」水甕だかをよこされて、「これえ三文入れない者は外へ出さん」ついたら。そしたら、盗んどう金を入れたら油が浮いたら、「おお、お前が盗った」ちゅうことをしとうなんて。（鳴沢 渡辺金睦）

日本はこの倍ある

お爺さん同士が二人でこう、高い山へ登ってねえ。ほしてこう、向こうながめたり、広いからねえ。「日本は広いなあ」ついたら、「おお、この倍もあらあやれ」ってそう言った。〔大成・三〇七〕（大田和 渡辺しまの）

炬燵入

馬鹿むどがこつから谷村んようん処とこへむどに行つとうどう。ほうしたら、イロリでばかいとうから、炬燵う知らないで、「さあ兄い、炬燵へ入つてくよう」せつたら、「はい、はい」せつて、こつちを開けて向こうを開けて、こつから向こうを開けて、「炬燵がでたあから誰か入つてくよう、炬燵が空きましたよ」そう言つとう。〔大成・三二六〕（鳴沢 小林もと）

首掛け素麺

その、素麵を初めて食べる人がな、うまそうに食べるらと思つて。根（そば）にいる人が、あの、「熱くしてくよう。」ほどうで、「素麵ちゆうもんはこうして食うもんどう。」自分のがぬるい湯で、その人のが熱い湯で。こうしていっぺんに口に入れないで、首い巻いちやあ、こうしちやあ取つて食うどよう。ほしたら、素麵食いたくて、その人の真似まにようしたら、首を火傷やけつつりようしどよう。意地悪い人があるもんどよう。「名彙「耳掛け素麵」大成・三五二」（鳴沢 小林もと）

姥捨山

お婆さんを負ぶつて、婆ばんばやき焼つちゆう処ところへ捨てえ行きながら、子供が負ぶつてうっちゃりい行きながら、行く道々を木の枝を折りながら、お婆さんを負ぶつて行つたつてね。負ぶさつているお婆さんがなあ、そして、姥捨山行つて。お婆さんは下ろされて。ほして、「お前の帰る道が分からなくなつたら木の枝が折れているから、あの、その通りに行けば道が間違わなくて家うちへ帰れるから、そう行けよ」つて。捨てられるお婆さんが息子の身を案じて、そうしたつちゆう話よう聞いた。

縁の下へお婆さん隠しとして、「捨てたあ、捨てたあ」ゆつて、捨ててしまわないで。そして、御飯どきになりやあ息子が持つてつちやあやり持つてつちやあやりして、お婆さんを縁の下でこもつてたちゆうことを聞いたつたよ。

「名彙「姥棄山」大成・五二三A」（大和田 小林まつ）

蕎麦のスネは赤い

天にいる誰かががををして落つこちて。蕎麦畑へ、血が出て赤くなつたなんちゆうことを言うなあ。（大田和 渡辺清）

短い話

話がはね返つて、昔がむっくりかえつた。「大成・六四〇」（大田和 渡辺しまの）

天竺から禪

天竺から古禪が吊さった。長^なあい長^なあい長^なあい古禪吊さったって、そういう話ある。「名彙「果無し話」大成・六四二C」(大田和 渡辺しまの)

2 世間話

ここでは、日常生活の中に起こった出来事として、おもしろおかしく、不思議な話として伝えられているものを扱う。世間話は、その場にふさわしく、自由に話されるという特性がある。鳴沢村の身近な話題として、狐やムジナに化かされた話、化けもの、幽霊に出会った話、神仏に助けられたり、祟られたりした話が、実際に経験したように話されている。このように、事実はともかくとして、聞き手を魅了してきた話柄を世間話として集めた。なお、それらの中には、昔話や伝説から素材をとった話もある。

表3 世間話一覧

物	分	類	番号	題	名	話	者(生年)	話の舞台	備	考
(狐のすみか)		狐火	8	狐の提灯	大田和	渡辺しまの(M41)	小林 糸つ(M36)	長塚、境野		
			7	〃	〃	〃	〃	境野		
			6	〃	〃	〃	〃	〃		
			5	〃	〃	〃	〃	〃		
			4	狐の火	鳴沢	渡辺 金睦(M44)	渡辺 長子(M41)	八幡社の森		
			3	狐っ火	大田和	渡辺しまの(M41)	小林 糸つ(M36)	境野		
			2	〃	〃	〃	〃	〃		
			1	〃	〃	〃	〃	〃		
				イチンクボの狐	大田和	渡辺しまの(M41)	小林 糸つ(M36)	イチンクボ		尻をふると火に見える 尾をこすると火に見える

妖	仏	神	村	相	世
	靈驗	崇り	米の力	飢饉	産
32	33	34	35	37	38
タクシーに乗る幽霊	匠様の靈驗	匠様のゴオリ	振り米	空水飲むよりいい	聾病み
〃	〃	〃	〃	〃	〃
渡辺しまの(M41)	小林 彗つ(M36)	鳴沢 小林 もと(M33)	大田和 渡辺 壹男(M41)	鳴沢 小林 もと(M33)	〃
〃	大田和の匠様	〃	ムラ	〃	〃
〃					江戸末期の飢饉

註 話者の生年はつぎの略号をもって示す。

M……明治

T……大正

狐の提灯

長塚の狐と境野の狐と結婚式をするときには提灯をつける。(大田和)

狐っ火

境野の西の方で、狐っ火が通った。通るとき、確かに後光よしみがささない。夜間十一時頃、数多く見えたこともあったりひとつに見えたときもあつたりした。(大田和)

狐の火

桑を取りに行つてお宮の前を通るとき、狐の火がポコポコ、ポコポコ見えた。狐の火が遠くに見えるときは、足もとに狐がいる。(大田和)

狐の火

狐が尻尾を振ると、火になってみえる。(鳴沢)

狐の火

狐が尻尾をこすると、それが火になってみえる。(大田和)

イチンクボの狐

イチンクボが女の狐。そこには、今でも石の地蔵が立っている。子供が泣いたりすると、そこに転ばすぞ、うっちゃりに行くぞといわれた。イチンクボが姫狐でオハル、サスが男の狐で、両方が出会ってだまし歩いた。(大田和)

オハルの寝床

イチンクボはオハルの寝床だという。(大田和)

境野の狐

境野は鳴沢と大田和の境で、そこで狐が結婚式をした。夜、人が寝静まってから、ガヤガヤ、ガヤガヤと賑やかな声があった。(大田和)

境野の狐

境野の東に一軒の家があるが、昔はよくその境野の沢へ狐が出た。境野の狐にだまされれば、朝まで家へ帰れないで、あつちへ歩き、こつちへ歩き、家に行きつくことができなかった。(大田和)

狐にだまされた男

吉田へ用足しに行つて、その帰りに京良原^{きょうらんぼら}辺りで、そこらへんが分からなくなつてしまった。蕎麦畑を歩いて、さんざん歩いて、少しも分からなかった。そして、どのくらい歩いたか、そのうちに気がついて、ようやく道を見つけて帰ってきた。(大田和)

狐にだまされた男

鳴沢の人だったが、狐にだまされて、朝まで家へ帰れなくて、山をあつちこつち歩き回っていた。(大田和)

狐にだまされた男

酒の銚子がたくさんあって、飲もうと思つて取れば消えてしまつて飲むことができなかつた。(大田和)

油げを盗る狐

油げを買つての帰りに、ずっと歩いて、気がついたら油げがなかつた。狐が盗つて、ずっとあちこち歩きまわつたが、どこをどう歩いたか分からなかつた。(大田和)

吉田道の狐

鳴沢の誰かがだまされて、大田和まで来てやつと気がついた。(大田和)

クダ狐

クダ狐が増えすぎて困つて、管へしまつておくという。それは法印で、拝むときには狐を使う。ちゃんと管へ入れて、ポッチをしておかないとこわい。狐に教わつて法印が祈禱をするという。(大田和)

クダ狐

クダ狐は、人の血管の中へ入るといふが、どこから人の身体へ入るか分からない。(大田和)

クダ狐

クダ狐は、人間の耳の中に入っているという話を聞いた。(大田和)

クダ狐

クダ狐というのは、小さいところへ入れる狐だといふ。(鳴沢)

狐使い

鳴沢の人が狐を使った。オオノ山の狐を使った。(大田和)

菊を呼ぶムジナ

ムジナがお菊さんの家へ来て、菊菊と呼ぶが、どうもその声が人間の声と違うので、それは野物のま(ムジナ)だといつた。(鳴沢)

狸和尚

その家では、昔、方丈様が輿に乗ってきた。それが狸で、その家には狸の書いた書物がしまつてある。それが鎌倉の建長寺の狸和尚。その狸和尚が長浜あたりで犬に喰われた。(大田和)

狸和尚

偉い坊さんが来て泊った。風呂に入っているとところを覗いたら、狸が尻尾で湯をビシヨビシヨかき回していた。

(大田和)

蛇に見込まれた女

女が山で昼寝をしていて蛇に入られた。引き出そうとしたが、コケラが逆さになって引き出すことができなかつた。(大田和)

鼠は縁起物

鼠は縁起のいい物だ。家を建てても、すぐに鼠が入らないとよくない。(大田和)

猫は魔物

猫は魔物だから、業をする。死んだ人が起きて三踊り踊ってたおれた。魔がさせばこわい。(鳴沢)

夕顔の化物

夕顔ゆづりをもぐとときに、小枝を刺すが、それは夕顔から化物が出ないように棒を刺した。(鳴沢)

ケツカイ

女が妊娠して、産んだらそれがケツカイで、ケツケツケツケツカイといって地下へ潜って亡くなった。(大田和)

神隠し

夕方、暗くなつてからカクレンボをすると神隠しにあう。隠れると、出てこれない。だから、夕方カクレンボをする。(鳴沢)

バスに乗る幽霊

終バスを走らせていると、女の人がバスを止めて乗せてもらいたいといって乗りこんでくるが、それは幽霊だという。(大田和)

タクシーに乗る幽霊

女の人が、車を止めて乗りこんできて、目的地につくといかなかった。その人の乗ったところをみれば、座席がぬれていた。(大田和)

匠様の霊験

ある家の子が、家出して何年も帰らなかつた。そのとき易をみたら、大工の神様でこの地へ埋められているものがあるが、供養がなされていない、祠を作つて祀ればその子が出てくる、と占いに出た。大工仲間がそろつて、その地主の家にあいさつに行き、祠を建てたら、まもなくその子が帰ってきた。(大田和)

匠様のゴオロ

匠様のゴオロ(頭蓋骨)を持ってきて、家の床の間に飾っておいたら、その家は絶えてしまった。(鳴沢)

振り米

鳴沢の通玄寺は吉田に田圃を持っていた。死にそうな病人がでると、寺へ行って米を貰ってきて、竹筒へ入れて耳もとでゆすった。そうすれば病気が治る。(大田和)

振り米

死にそうな人がいると、竹筒つぼへ米を入れて、耳のそばで米の音を聞かせた。(大田和)

空水を飲むよりいい

飢饉のとき、空水を飲むよりましなので、障子の組子の埃(ほじり)を掃きこんで飲んだ。埃は毒になっても、空水を飲むより腹ごたえがある。そうだから、道ばたに生えているオオバコなどは贅沢(ぜいたく)だった。みんながオオバコをとりに行つて、道にオオバコがなかった。(鳴沢)

犂病み

妻が出産のとき、夫に豎白(しよ)を背負わせれば力がいはいるといって背負わせ、夫が家の回りを背負(しよ)い歩いた。(鳴沢)

三 伝 説

伝説は、具体的な事物に直接結びついて、真実と信じられてきた伝えである。そのために、しばしば史実と混同して考えられがちである。

伝説に関して、鳴沢村では、十人の話者から話を採集することができた。ここでの特徴として、畑作農業と林業を生業としてきた村であるため、畑作に関する行事由来や山の伝説を数多く聞くことができた。畑作行事の伝承として、鳴沢では、春の社日に地神が天から降りて来る、秋の十日夜に蚕神様が天へ昇るといふ伝えがあつて、作神の去来伝承として注目される。

なお、伝説の分類については、『日本伝説名彙』に従ったが、その分類で処理できないものについては、新たに

「家・村」と「行事」を分類項目に加えた。
表4 伝説分類一覧

分	類	例話 番号	題	名	主	人	公	場	所	話	者	(生年)
	(木)	1	境野の松		弘法大師			境野		大田和	渡辺しまの	(M41)
	(芋)	2	弘法芋		〃					鳴沢	小林もと	(M33)
		3	〃		〃					〃	渡辺	金陸(M44)
	(丸尾)	4	赤足丸尾		善次郎		富士山			大田和	渡辺	壹男(M41)
	(岩)	5	善次郎岩		〃		山			〃	渡辺	長子(M41)
	(池)	6	春日様の池		弘法大師		春日社			〃	〃	〃
	(湧水)	7	テンゴウボウの湧水		〃		テンゴウボウ			鳴沢	渡辺	金陸(M44)
	(滝)	8	音止の滝		曾我五郎・十郎		音止の滝			大田和	渡辺しまの	(M41)
	(山)	9	ゴゼンバとサンジキ		源頼朝		富士山中			〃	〃	〃
		10	サンジキ		〃		〃			〃	渡辺	壹男(M41)
		11	マングイ		〃		〃			〃	〃	〃
		12	美人窪		美人の女		〃			〃	〃	〃
		13	婆焼		婆		山			〃	渡辺	長子(M41)
	(神社)	14	黒木権現の天狗		天狗		黒木権現・小御岳社			〃	渡辺	壹男(M41)
		15	小御岳の天狗		〃		小御岳社			〃	〃	〃
		16	八幡		小林一家衆の先祖		八幡社			〃	〃	〃
		17	〃		〃		〃			〃	〃	〃
		18	魔王		〃		下部、魔王社			鳴沢	渡辺しまの	(M41)
		19	蚕影		〃		蚕影			大田和	渡辺	壹男(M41)

行	事
34	蓬と菖蒲の湯
33	半夏
32	七夕の馬
31	お婆さん
30	七夕様
	お婆さん
	蠶神
	蠶神
	オシラガミサン
	神様
	燵
	燵
	鳴沢
	大田和
	渡辺
	百々(T1)
	鳴沢
	渡辺
	長子(M41)
	大田和
	渡辺
	金睦(M44)
	渡辺しまの(M41)
	鳴沢
	小林
	もと(M33)
	大田和
	渡辺
	長子(M41)
	渡辺しまの(M14)

註 話者の生年は、次の略号をもって示す。

M……明治 T……大正

境野の松

鳴沢と大田和の境にあつたから、境野の松という。(大田和)

弘法芋

お婆さんが芋を洗っていたら、弘法様が、その芋をふたつばかくなれないかとたのんだ。お婆さんは欲が深くくれない。すると、その家の芋がみんな石芋になってしまつて食べられなくなった。だから、ほしい人にはあげた方がよい。(鳴沢)

弘法芋

芋を洗つたら、弘法様が通つて、芋を一粒くれたのんだところ、これは石だと洗っている人が答えたので、本当に石になってしまつて、食べられなかった。(鳴沢)

赤足丸尾

アカガイシという所に、アカガイシ丸尾といつて、赤ん坊の足の跡があつた。赤の足、赤足丸尾といつた。(大田和)

善次郎岩

善次郎という男がそこへ行き、岩へのぼって転んだという。(大田和)

春日様の池

弘法様が来て、杖を突き刺したら、水が出た。春日様の水の湧くところ、そこに池ができた。どんな日照りでも水が湧いた。(大田和)

テンゴウボウの湧水

弘法様がこの村を通りかかって、テンゴウボウへ行つて拜んで、筆の軸を刺したら、水がジュクジュク湧いてきた。(鳴沢)

音止の滝

曾我の五郎と十郎が仇討の相談をしていたとき、滝の音が止まったという。(大田和)

ゴゼンバとサンジキ

富士の巻狩のときに、源頼朝が御飯を食べた。そこがゴゼンバ。おやつを食べたのがサンジキというところ。(大田和)

サンジキ

源頼朝が富士の巻狩のときに、さじき 棧敷を作つて相撲をみせたという。そこがサンジキ。(大田和)

マングイ

勝山村と鳴沢村の境が炭焼塚。その大田和の分にマングイという所がある。木の杭を道の両側へ立てて、正月になると注連縄を張つた。道は曲がり曲がって八の字になっていた。(大田和)

美人窪

宿屋にものすごい別嬪べつびんが泊って、一刻も早く駿河へ行きたいので、道案内をしてくれるよう宿の人に頼んだ。女は途中まで行って産気づき、そこで死んでしまった。その供養のために、そこに石塔を立てた。(大田和)

婆焼

大田和に婆焼ばんしょうというところがあって、そこへ婆ばばを連れてって燃やしたとか。まだ敷石も残っていて、そこで婆を焼いたという。(大田和)

黒木権現の天狗

黒木権現から小御岳まで、天狗が雲の橋を渡って行った。小御岳は鳴沢のもので、そうだから黒木権現から渡ったのだという。(大田和)

小御岳の天狗

小御岳の天狗は、荒っぼい天狗だという。荒神様あらかみだということになっている。(大田和)

八幡

この土地(大田和)で威勢のいい家の屋敷神に祀ったのがはじまりであって、その家の屋敷神だった。(大田和)

八幡

八幡は小林一家衆いっけしゅの先祖の畑守りであるという。(大田和)

魔王

魔王は、もともと下部の方に祀られていたものだが、こっちへ来たいと言って、こっちへ来たと聞いている。(鳴沢)

蚕影

桑が霜害でやられてしまった。それで蚕が育てられなくなったので、それを埋めた。そして、その供養のために、蚕影神社として祀った。(大田和)

大田和と鳴沢

富士山が噴火する前に、河口湖の方へ流れていた川を大田川といい、その川の跡だから、そこを大田和という。富士山が噴火して、山が鳴ったから、鳴沢という。(大田和)

新屋の大元

新屋は、徳川幕府へ材木を納める仲継ぎの場所であった。材木をそこに貯めておいて、その番をするために、鳴沢からしだいに人が移り住んだ。だから新屋の大元は鳴沢で、鳴沢の寺の檀家だったという。(大田和)

ダイブオオトノサマ

甲府の方から敵に追われて逃げて来た。それがダイブオオトノサマという人で、河口まで逃げて来たら、一人のお婆さんが洗濯をしていた。そのお婆さんに、私がこつちへ逃げたことを敵に教えないでもらいたいと頼んで、馬を後さがりに進まして逃げた。けれどもお婆さんが追ってきた敵に喋ったので、ダイブゴンノで追いつかれて、そこで敗れて亡くなった。そこに塚があるという。ダイブオオトノサマは、そのくやしきで、河口の宿をまっすぐな宿でおくのは許さない。長刀なりにしろといったので、今でも河口の宿は曲がっているという。(鳴沢)

ダイブオオトノカミ

落人が御坂を越して来て、河口で休んで腹ごしらえをした。そして、村の人に、追手に自分たちのことは決して話さないでくれと頼んで逃げたが、村人が追手に話してしまった。そして、村に災難がたいへんあって、村を長刀な

りにするから、その口止めを喋ったことを許してもらいたいといったという。(鳴沢)

匠様

匠様という人が、敵に追われて、河口の方から逃げて来た。河口でお婆さんが洗濯をしていて、ここを武士が通ったかと聞かれて、そのお婆さんは、あっちへ行つたよと答えた。その武士は馬の足へ蹄鉄を逆さに打った。行く方向と反対になるように打った。そしたら、そのとき河口の宿が焼けて、易をみたら、そういうことをしたからであつて、河口の宿は長刀なりに作らないといつてもこうなるといわれた。それ以来河口の宿は長刀なりになっているといふ。(大田和)

ヒトツマナク

ヒトツマナク(ひとつまなこ眼)は、オコトの神様といつて。それが来て、家の中の悪い事をみんな見て、帳面へ書くそうだ。その日、目籠を戸口に吊しておけば、覗かれないといった。こつちじゃ、もつとたくさんの目で見てるぞという意味だといふ。そして、十四日正月のドンドン焼きは、オコトの神様が悪い事のあら探しをして付けておいた帳面を、道祖神さんが燃やすために火を燃したのがドンドン焼きのはじまりだといふ。(鳴沢)

ヒトツマナコ

オヨウカにはヒトツマナコが帳面つけて歩く。篩ふるいを吊しておけばこわがつて来ないといふ。道祖神がヒトツマナコに、今年火事にあわないから、その帳面をあずけろといつて、道祖神が帳面をあずかる。それを十四日正月に燃やしてなくしてしまう。道祖神で火を燃さないといふ、その年は陽気が悪いといふ。(鳴沢)

ヒトツマナコ

外へ履物を置きっぱなしにしておくと、ヒトツマナコがそれに判子はんこを押して帰る。それを履いた人は病気になる

いう伝えがある。だから、日暮れになれば、家の中に履物を入れて、目のたくさんある物（目籠）を吊しておく、自分はヒトツマナコだから、大勢の目がいればこわくて逃げる。（大田和）

地神

地神様は天から降る。春の社日に天から降って、土地をあたたくくして、作をよくする。（鳴沢）

六日菖蒲

五月の節供の夜、戦があつて、すっかりした男たちはみんな出かけてしまつて、子供と年寄りだけが残つた。その翌日の六日に菖蒲をしたから、六日菖蒲という。（鳴沢）

半夏

その日に、自分の影がなくなるときお昼を持ってこいといわれて、お婆さんがお昼を遅く持つて行つた。遅く持つていたら、いくら待つてもお昼がこなかつた。暑いときだった。（大田和）

七夕の馬

七夕の馬は、七夕様が乗つて、耕地を見回るための供え馬だという。七夕様は馬に乗つて、ヤマ（畑）を見回る。

（鳴沢）

蚕神

蚕神様は、桑の葉を持って、日本に来てくれた人だという。女神様で、十月の十日夜とうかんやに天に昇るといふ。（鳴沢）

十日夜

十日夜には、饅頭をこしらえて、オシラガミサンへ進めた。十日夜はオシラガミサンの日で、親のところへも饅頭を持って行く。（大田和）

神無月

十月は神無月といって、神様がみんな出雲の国へ旅立ってしまうので、暦などで日をみないで仕事をしている。日がいい、日が悪いは関係なく、仕事をしている。(大田和)

(堀内 真)

第六節 方言

概観

本村は鳴沢と大田和と呼ばれる二つの集落から成り立っているが、両集落がいつごろ一村となったかは定かではない。『甲斐国志』によつて本村の記述を見ると、

成沢村 大田和

一 高六十五石八斗四升九合 戸二百三十八

口 九百七十二 男 四百八十二 馬八十

女 四百九十

南ハ富士山ノ薬師岳ヨリ無間谷・三俣、夫レヨリ長山ノ尾崎又三水夫レヨリ孤水・裂石ツギシ並ニ駿州富士郡根原村ト境裂石ヨリ南ハ大コツハヨリ西北ハ山ノ神夫レヨリ八代郡精進村ト境ヒ山ノ神ヨリ北ハ壇山マデ西ノ海村ト境ヲ又東ハ炭焼塚ヲ限り大嵐村ト境フ此ヨリ南ハ富士ノ裾野舟津村ヨリ本村マテ五ヶ村入会山ニシテ定限ナシ本村ヨリ駿州境破石マデ六里東ハ大嵐村ノ境マデ一里余南ハ富士ノ裾野渺々トシテ分界ナシ本村ヨリ富士ノ北麓コンノウ路ヲ経テ駿州富士郡上井出村へ出ヅ又道ヲ右ニ取レバ穴村へ出ヅ此間七里人家ナク又水ナシ往来スル者水穀ノ用意ナケレバ必ズ飢渴ニ及ベリ(後略)

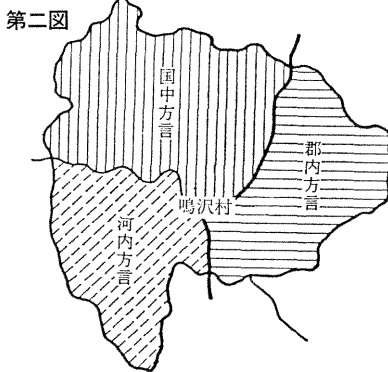
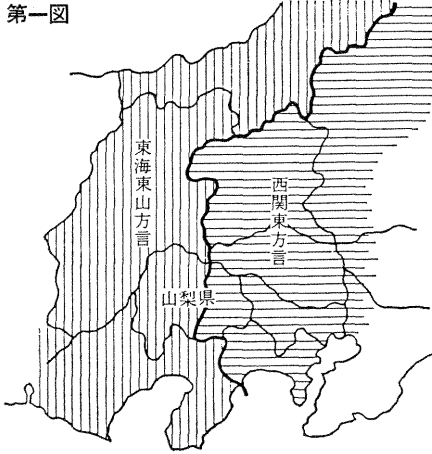
とあり、この付近の、大嵐村、勝山村、木立村、長浜村などより大村であつたことがうかがわれるが、記述でもわかるとおり、文化十二年の年代においても偏境の地であつたことは事実である。また、天正十九年辛卯十月吉日の「成沢村大田和村御検地帳」が存していたことから、このころからすでに両村は一つの行政区画に位置づけられていたようである。

しかしながら、この両集落の言語差は極めて大きく、山梨県の方言区画の境界線をはっきりと引くことができるので、それは今日も十分に観察できるところである。

さて、本村の方言を述べる前に、山梨県の方言の概要を述べておこう。

山梨県の方言は、全国各地の方言の中でも比較的荒い言葉だとされている。「ものうちいふすこしだみたるやうにて……」(源氏物語)などと書かれている関東語の系統であり、その中でも特に敬語の数の貧しさ、あるいは接頭語を多用するなどの要因が、他郷の人々に荒く聞こえるのであろう。

山梨方言は日本方言区画の中では、本州東部方言に属している。さらにそれを細分すると、笹子峠——御坂峠とを



通過する御坂山地を境にして、東地域と西地域に分けることができる。金田一春彦氏が作図した「日本方言区画図」(第一図)によると、その東側を本州東部方言のうち西関東方言とし、西側を東海東山方言としている。山梨方言を二区分した場合の両者の特徴を簡単にいうならば、東部方言は「ベエーベエーことば」であり、東海東山方言

に属する西地域は「ズラことば」で代表される。このように二区分された山梨方言は、さらに第二図のように細分される。つまり、東地域の郡内方言と、西地域の国中方言、河内方言とである。

さて、本村の方言をこの方言地図上に位置づける場合、第二図に示すように、郡内方言、国中方言、河内方言の接点に置かなければならず、さらにいえば鳴沢集落は国中方言と河内方言側に、大田和集落は、国中方言と郡内方言側にということになる。しかし、大田和については、非常に国中方言の特徴を示しているが、鳴沢集落の方は、特に国中方言的でもなく、河内方言的でもないものを有しており、南巨摩郡早川町奈良田ほどではないにしても方言区画の中では孤立した語の特徴を示している。もつといえ、鳴沢集落の場合は、他所の人々にあまり影響を受けないで、かなり古い時代の言語形体を残しているといえる。

本稿は、後に掲げる方々の発音提供、ならびに鳴沢村教育委員会が発行した『鳴沢村のことば』（改訂版・昭和六十二年）によっているが、調査をするたびに、調査者すべてが鳴沢と大田和の言葉の違いを口にするのは非常に驚くとともに、また、その差も歴然としている。前述の『鳴沢のことば』に現村長小林美知氏が「最も古い日本を、外国で書き留めた『魏志倭人伝』に△対応の声を噫あひという、比するに然諾の如し▽とありますが、この村の△あひ▽という対応のことばは、全くこのとおりの意味で使われています。人形浄瑠璃傾城阿波の鳴門で巡礼お鶴のいう△あひい……▽も鳴沢村の私たちには何の抵抗もなしに受けとれます」と述べており、さらに小林孝重前教育長は「昭和二〇年ごろまでは、ほとんど村内での結婚が多く、他村との結婚による転出入は極めて少なく米のアラ位で鳴沢から大田和に、大田和から鳴沢にと嫁入りがおこなわれておりましたが、奇妙な事には大田和から鳴沢に来た嫁さんは鳴沢ことばをつかい、鳴沢から大田和に嫁いだ人は大田和言葉で話しかつていたので、鳴沢の言葉や大田和の言葉は昔からの特殊な発音がくずれることなく現在まで続いてまいりました」と、言語感をいっている。前者は、鳴沢の言葉の

古さを語るものであり、後者は村民の言葉に対する感覚を述べたものである。

歴史的にみて、中世以降から行政区画的には一村とみなされてきた両集落の言語差は何か、地形的には両集落の間に交通を防げる大きな山脈や川があるわけではない、産業構造もほぼ同じであった。とすれば近世以降にその差があらわれはじめたのではないか。それは他地域との交流を活発にする道路の発達である。富士山の裾野に広がる樹海は道路の発達を著しく遅らせたが、大田和の方は大石峠を越えて、芦川村や甲府へ、もちろん吉田方面へ出るのも比較的楽であった。さらに駿州への道も鳴沢を通らずに大田和のみの通過でおわっていたようだ。したがって物売りなどの行商人が泊まるのは大田和であり、大石峠を越えて出稼ぎに行ったのも大田和の人の方が多かった。文化の流入では八幡神社の回り舞台にもみられるように大田和の方に先に入ってきた、というように考えると次の言葉の変化は容易に解釈できよう。

特徴的なものでは母音の融合変化である。鳴沢でハイ(灰)は大田和ではヘーである。テノゴイ(手拭い)はテノゲーとなる。もとの日本語の発音はハイでありテヌグイであるから、鳴沢の方が古い発音で大田和は変化した発音といえよう。単語の変化では、御飯を器に山盛することを、大田和ではテンコモリというが、鳴沢ではテッコモリという。(国中方言〔甲府〕ではテンコモリという。)今回の調査でこれも鳴沢村のテッコモリが古いと判断できた。つまり語源は「鉄甲盛り」であると考えられるからだ。鉄カブトのように盛り上げた御飯と解釈できよう。だとすればテッコモリ→テンコモリ→テンコモリと変化する過程がうかがえよう。一説には、テンコは天骨の下略で頂上の意とあるが、この説ではテッコウが導きだせない。さらに鳴沢の老人層では「山道が険しい」という意味でサガシーを使うが、大田和では知っている人は少ない。この言葉は、源氏物語などにも出てくる古語で、今日、山梨県では早川町奈良田や六郷町の老人層からその使用が確認されただけである。また、夕方のあいさつのことばを、ていね

いにいうと大田和では「オバンデゴザンス」、鳴沢では「オバンデゴザリマス」と言う。つまり鳴沢の方が比較的古い言語形体を有しており、大田和は他地方の影響を受けて変化してしまったといえるのである。さらに細かい分析については後日に待ちたいが、大田和の分析をしたかぎりでは、タキヤー（高い）、キヤール（帰る）といった拗音の発音の特徴がないので、鳴沢村全体を東海東山方言に位置づけておきたい。

発音提供者

鳴沢地区

渡辺徳雄（明治三十四年生） 渡辺大知（明治三十六年生） 三浦金重（明治三十九年生） 三浦富作（明治四十年生）

三浦さな（明治三十二年生） 清水みつる（明治三十二年生） 小林もと（明治三十三年生）

梶原そめこ（明治三十五年生） 渡辺千代子（明治三十五年生）

大田和地区

小林初作（明治三十五年生） 渡辺清（明治四十年生） 渡辺孝一（明治三十七年生） 渡辺壹男（明治四十一年生）

渡辺茂（明治四十四年生） 小林多つ（明治三十六年生） 渡辺しまの（明治四十一年生） 渡辺長子（明治四十一年生）

渡辺五十路（明治四十四年生）

音韻

本村の方言の音韻は、鳴沢と大田和で大きな差異をみせている母音の融合現象のほかは、ほぼ東海東山方言（東京式）と同様である。

一 大田和において、二重母音の単母音長音化現象が顕著である。

二 鳴沢においてエ〔e〕がイ〔i〕となる母音転換が多い。

母韻	ア a	イ i	ウ u	エ e	オ o
子韻					
k	カ ka	キ ki	ク ku	ケ ke	コ ko
g	ガ ga	ギ gi	グ gu	ゲ ge	ゴ go
ŋ	カ ^o ŋa	キ ^o ŋi	ク ^o ŋu	ケ ^o ŋe	コ ^o ŋo
kj	キ ^ャ kja		キ ^ュ kju		キ ^ョ kjo
gj	ギ ^ャ gja		ギ ^ュ gju		ギ ^ョ gjo
ŋj	キ ^ョ ɲja		キ ^ョ ɲju		キ ^ョ ɲo
s	サ sa		ス su	セ se	ソ so
z	ザ za		ズ zu	ゼ ze	ゾ zo
f	シャ fa	シ fi	シュ fu		シ ^ョ fo
ʒ	ジャ ʒa	ジ ʒi	ジュ ʒu		ジ ^ョ ʒo
t	タ ta			テ te	ト to
d	ダ da	ヂ dji		デ de	ド do
tʃ	チャ tʃa	チ tʃi	チュ tʃu	チュ tʃe	チョ tʃo
ts	(ツア)(tsa)		ツ tsu		(ツオ)(tso)
n	ナ na	ニ ni	ヌ nu	ネ ne	ノ no
ɲ	ニ ^ャ ɲa		ニ ^ュ ɲu		ニ ^ョ ɲo
h	ハ ha			ヘ he	ホ ho
(H)		ヒ Hi			
F			フ Fu		
P	パ Pa	ピ Pi	プ Pu	ペ Pe	ポ Po
b	バ ba	ビ bi	ブ bu	ベ be	ボ bo
ɕj	ピ ^ャ ɕja		ピ ^ュ ɕju		ピ ^ョ ɕjo
bj	ビ ^ャ bja		ビ ^ュ bju		ビ ^ョ bjo
m	マ ma	ミ mi	ム mu	メ me	モ mo
mj	ミ ^ャ mja		ミ ^ュ mju		ミ ^ョ mjo
j	ヤ ja	イ ^ェ je	ユ ju		ヨ jo
r	ラ ra	リ ri	ル ru	レ re	ロ ro
rj	リ ^ャ rja		リ ^ュ rju		リ ^ョ rju
w	ワ wa				(ウオ)(wo)
	促音 Q				
	撥音 N				

三 両地域とも接頭語を多用するため、促音化（つまる音）、撥音化（はねる音）の現象が多い。

四 合拗音、クワ、グワ、クワ [kua gua ŋua] は、老人層でわずかに聴きとれる。

五 郡内方言の特徴である拗音、キヤー、シヤー [kia:ɕia:] は、老人層においてもほとんどない。

六 ウォ [wo] は、語頭、語中にはほとんど出てこないが、語末において渡り音として、塩を [Siwo]、臭う [niwo:] のように出てくることがある。

七 四つがなの区別 いわゆるジ [ʒi] チ [tʃi] ズ [zu] ヅ [dʒu] のことであるが、[ʒi] > [tʃi] の差がわずかながら聴きとれる。

八 フ [ɸ] ヒ [ɸi] は共通語と同じく硬口蓋音で [ɸ] という音声記号であらわされる音で、つは両唇音 [ɸu] であらわされる。

九 鳴沢にイ [i] に近い半母音、イェ [je] の残存が認められる。

音韻変化

山梨県の方言の特色として、二重母音の単母音長音化現象と、促音化、撥音化の現象をあげることが普通であるが、本村では、この現象が、鳴沢地区と大田和地区で両者を異質な言葉と思わせるほど大きな差異をみせている。東に接する足和田村大嵐、西に接する足和田村根場、あるいは上九一色村精進などでは、この二重母音の単母音長音化現象が、他の山梨県の方言と同様顕著であることから、鳴沢地区だけが他からとりのこされた現象とみてよからう。これは近世以降に急速に発達した交通事情が影響し、大田和の方が鳴沢よりはるかに他との交流が多かった証左といえる。さらに今日においてもなお、その変化が鳴沢にあらわれてこないのは、灰をへー [he:] と言うよりもハイ [hai] と発音した方が共通語的だからへーに同化する必要がないことを村民が無意識のうちに気づいているからであろう。

「この変化を私たちの村の人々は感覚的に知っているので、鳴沢の人の灰(はい)は、大田和ではへへえ、一枚二枚はへいちめえ、にめえ、と言ふ事は、すぐわかる。それで大田和の人は、へ塀(へい)のことを鳴沢では、はい、というのかえ、などと言つては、ことばについての駄ジャレのいい合が始まる」と『鳴沢村のことば』で述べているが、事実大田和で、打ち壊すことをブッコース [bu:kko: su] というのに対し、鳴沢ではブッカイス [bu:kaisu] と発音する。[bu:kowasu] > [bu:kko: su] の変化が普通だから [bu:kaisu] は母音の融合を意識的に避け [ai]

と変化したとも考えられる。

次に母音の連続の異りによる変化をみてみよう。

(1) アイ [ai]

大田和では、アイ [ai] はエー [e:] となる。これはごく普通の変化で [a] [i] の中間の母音 [e] となり長音化する。

例 高い タカイ → タケー [takai > take:]

入る ハイル → ヘル [hairu > he: ru]

一枚 イチマイ → イチメー [itjimai > itjime:]

ところが、鳴沢ではこの変化が見られず、すべて共通語と同じである。

(2) アエ [ae]

大田和では、後に続く母音エが、前の母音アと同化して長音化する。

例 お前 オマエ → オメー [omae > ome:]

考える カンガエル → カンゲール [kangaeru > kanpe: ru]

帰る カエル → ケール [kaeru > ke: ru]

ところが、鳴沢では本来オマエ (お前) であるべきところをオマイ [omai:] といふ。このイエ [i:] は、ヤ行音のイエで平安時代後期までは日本語の音韻としてあったが今日ではほとんど消えてしまっている発音である。したがって目的の所在の方向を示す助詞「へ」も、大田和では例えば「山へ行く」[yamaeiku] はヤメーク [yame: ku] となるが、鳴沢ではヤマイエイク [yamajieiku] となる。また、どのどの「家へ」と言うとき

(3) に、大田和ではエセー [ese:] となるが、鳴沢ではエサイ [esai:] となる。
イエ [ie]

大田和では、後の母音エ [e] が前の母音イ [i] に同化して長音化する。

例 家 イエ → エー [ie > e:]

見える シエル → メール [mieru > me:ru]

鳴沢でも、家はエー [e:] となる。「家の前」エーノママ [e:noma:] 「家見舞」エーミ [e:mi]。

(4) オイ [oi]

大田和では、非常に多くあらわれるが、鳴沢ではない。

例 一昨日 オトトイ → オトター [ototoi > otote:]

面白い オモシロイ → オモシレー [omoshiroi > omosire:]

鳴沢では「手拭い」(てぬぐい)を、テノゴイといい、大田和でテノゲーという。温い(ぬくい)をノコイとい
い、ノケーという、[oi] > [e:] の変化の方則を考慮して考察すれば、ここでも鳴沢の言葉の方が古い言葉だと
断定できる。

なぜなら、

テノグイ テノゴイ テノゲー

tenugui > tenogoi > tenoge:

という変化をたどることができるからだ。つまり、ウイ [ui] がオイ [oi] に母音転換をし、さらにエー [e:] と長音化したものであるからだ。鳴沢での「こしらえる」をコシヤイル [kofhajiru] も、独自の表現である。

(5) エイ [ei]

日本語すべてに共通していえる長音化現象で、前の母音が後に続く狭い母音を同化し長音化する現象である。大田和も鳴沢もこの現象については同様である。

例 警察 ケイサツ → ケーサツ [keisatu] > ke : satsu]

(6) ウイ [ui]

前の母音ウを後の母音イが同化吸収して長音化する現象。

「ひだるい」は、鳴沢ではヒダルイ [Hidarui] 大田和では [Hidari:]、「かつたるう」はカッターイ [kaQa ru:]、カッターリー [kaQatari:] となる。

(7) オエ [oe]

前の母音オを後の母音エが同化吸収して長音化する現象。

例 此処へ ココエ → コケー [kokoe] > koke :]

覚える オボエル → オベール [oboeru] > obe : ru]

鳴沢では、ココイ [kokoji]、オボイル [obojiru] となり、古い形をのこす。

単物(ヒトエモノ)も大田和ではヒテモノ、鳴沢ではヒトイモノ [Hitojimonono] である。

(8) ウェ [we]

母音の同化現象はあまり語例はないが、大田和、鳴沢とも、「食べ」をケー [ke:] という。食べなさいを、

大田和ではケンヤレ [ke : N'yare]、鳴沢ではケーエヤレ [ke : yare] という。

母音転換

母音が他の母音に置きかえられる現象で鳴沢ではさきに見た「手拭い」[tenugui]が、テノゴイ[tenogoi]「温い」ヌクイ[nukui]がヌコイ[nukoi]となり、オがウに変換している。また、鳴沢ではアがオになる現象が多い。「来た」キター[kita]がキトー[kito:]に、「待っていたのだ」が、鳴沢ではマッテトードー[maQeto::do:]、大田和ではマッテターダー[maQeta::da:]となる。この現象からみると、大田和が国中系、鳴沢が河内系の特徴を示している。このように、音韻体系からみても、やはり鳴沢を古い形とみたい。

子韻転換

大田和、鳴沢ともこの現象は少なく、わずかに、「寒い」をサビー、「紐」ヒモをヒボという[ɛ] [ɔ]現象があるのみである。甲府で代表される死グ[sinu]は、死ヌ[sinu]である。

音韻脱落

この脱落の現象には、子音の脱落と、音節の脱落がある。子音の脱落する理由は、その音を発音しないことよって、発音しやすくする働きがあるからである。大田和では

何だ ナンダ→アンダ [nanda] > [anda]

何分にも ナンチヨ→ニモ→アンチヨニモ [nantjono] > [antjo::nimo]

「賑やか」はニギヤカ[nigiyaka]だが、リ音が脱落してニイヤカ[ni::yaka]となる。これは、大田和、鳴沢とも同様で、音節脱落には、台所、ダイドコロ[daidokoro]が、ダイドコロ[daidoko]「ぶとろ」がヒトコ[Hitoko]になり、ロ[ro]が脱落している。大田和の「下さい」の意味のクヨヤーはクリョヤーのリが脱落したもので特徴的である[kurjo::ya] > [kujo::ya]。

撥音化

ラ行音の撥音化と、音韻N音の挿入によるものがある。

ラ行音の撥音化には、次の音にナ行かダ行が来る場合が多い。

けれども ケンドモ [kɛndomɔ] > [kɛndomɔ]

取り出す トンダス [tondasn]

まぶしい ヒドロシー → ヒンドロシー [Hindorosɕ:]

尖らす トガラス → トンガラカス [tonɕarakaɕu]

など、鳴沢にも大田和にもある現象である。

促音化

接頭語などがつくことよっておこる現象と、意味を強めるために音韻を挿入する例とがある。

突き通す ツキトース → ツットース [tsukito : su] > [tsuɕto : su]

取りかえる トツカエル [toɕkaeru] [toɕke : ru] となる。

仲間はずれ ナカマハズレ → ナカマツンズレ [nakamahazure] > [nakamaɕPazure]

打ち壊す ウチコワス → ブッコワス、 → ブッコース [utɕikowasu] > [buɕkowasu] [buɕko : su] と変化する。

口蓋化現象

郡内方言に多い特徴であるか、本町でもいくつか聞くことができる。

あれは アレハ → アリヤー [arewa] > [arja :]

昨日 キノウ → キニョー [kino] > [kinjo :]

これは口の前の方の歯茎のあたりで調音される摩擦音や破裂音が、硬口蓋の方で発音されるためである。

音節		1拍語	2拍語	3拍語	4拍語	5拍語	6拍語
型	平板(尾高平)型	○▶	○●▶	○●●▶	○●●●▶	○●●●●▶	○●●●●●▶
起 伏	尾高下型		○●▶	○●●▶	○●●●▶	○●●●●▶	○●●●●●▶
	頭高型	●▶	●○▶	●○○▶	●○○○▶	●○○○○▶	●○○○○○▶
	中一高型		●○▶	○●○▶	○●○○▶	○●○○○▶	○●○○○○▶
	中二高型			○●●▶	○●●○▶	○●●○○▶	○●●○○○▶
	中三高型				○●●●▶	○●●●○▶	○●●●○○▶
	中四高型					○●●●●▶	○●●●●○▶

アクセント

語彙、語法において差異のある本村の方言であるが、アクセントにおいては大差はない。各音節におけるアクセント体系は別表のとおりで、東京式に準ずるものである。(●▼は高い拍を、○▽は低い拍をあらわす。▼▽は単語に接続する助詞を示している。)

本村において、東京式と異なるところは、三音節の名詞のうち、朝日、命、胡瓜、心姿、涙、錦、火箸、眼鏡などで、東京式に発音すると、第一拍目を高く発音する頭高型であるが、本村では中高に発音する。つまり、アサヒならアを、イノチならイを、メガネならメを、高く発音するのが東京式、語中のサ、ノ、ガを高く発音するのが鳴沢式ということになる。実はこれらの語は、古い時代には東京においても本村と同じように発音されていたものらしい。それは、明治二十五年刊行の山田美妙著の『日本大辞書』にこれらの語が中一高型のアクセント記号で記されていることからもうかがえる。つまり、本村のアクセントの方が古い型を有しているといえるのである。

形容詞の「白い」「高い」などの語は終止形では東京式と同じく、シロイ タカイであるが、連用形になると、シロク タカクと発音される。

動詞では、東京式で平板型に発音される「語る」「漬ける」を本村では、老人層においてカタル、ツケルと中一高型に発音される。また「帰る」「入る」「参る」の類

は、東京式ではカエル、ハイル、マイルと頭高に発音するのに対し、本村ではカエル、ハイル、マイルと中一高型で発音する。

二音節で、底(そこ)は、東京式ではソコ、国中方言ではソコであるが、本村では東京式のソコである。

なお、大田和では、「そうですよ」の意味で、ソーダジオ、ソーダジョを使用するが、このうち、目上の人に対する敬意を示す場合にソーダジオと語末のジオにアクセントを置く発音をするが、なんとも味のある表現となっている。

語法

本村の方言を文法的に分析すると次のようになる。いわゆる共通語と比較対象しながら名詞、代名詞、動詞、形容詞、形容動詞、助動詞、助詞、副詞、接属詞の順に、その特徴について述べてみよう。

名詞

本村の名詞については、語彙の項で多く述べるが、ここではいくつかの古語が、現在、方言として立派に残存している例を示す。

アラク||開墾地

オカタ||花よめ、もとは「お方」

オコーシヤ||生意気、もとの語は巧者

サガシイー||険しい

サイデー||小さい布

パンジョウウ大工、もとの語は番匠
 タカジョー地下足袋

代名詞

代名詞には、ウラー ウララー オマイなどの人称代名詞と、コケー コケーラ ダゲーなどの指示代名詞とがある。本村において一般的に使用されている代名詞をあげると左表のようになる。()内は鳴沢のことば

人 称 代 名 詞		指 示 代 名 詞	
自 称	対 称	他 称	近 称
おれ おん八にー▽ うらん うらー	おめー(おま い) おめーさま (おまいさま) わん わいらー てめーら うぬらー うえーら	こいつ ほいつ あいつ どいつ こいつら あいつら	こいつ ここんとこ こけーら こっち
わしやー うららー うらいら		ほれ ほいつ ほこ ほけーら ほっち	あいつ あこ あけーら
			どいつ だげー

ウラ、ワイラに「家」が接続すると独得のいいまわしとなり、ウランゲー、ワンゲーとなる。ダゲーも、「どこ」という意味よりも、「どこの家」という意味が強い。過去においては、自分の名前を名乗るよりも、家を名乗ることの方が多かったから、この代名詞はかなり変化して発達したものであろう。

相手を呼ぶ場合、目上の人にはオメー、オマイ（鳴沢）を用い、目下にはワイラー、テメーラ、馬鹿にした場合はウヌラーを使う。

動詞

「書く」で、その様例をみると、「ウラカケイエネー」（私は書けないわ）、「オレンケーテクレラー」（私が書いてあげる）、「オレガカカー」（私が書きます）、「ワガカケー」（あなたが書きなさい）という活用になる。

この活用は、共通語の五段活用に対して四段活用である。つまり「書コウ」のようはオ段は使用せず、未然形にはダー（大田和）ドー（鳴沢）を接続させて、書かダー、書くドウとなる。

意志を表わす表現として、「行こう」を例にすると、イカネーカ、イクベージャーネーカ、イクベー、イカザー、イクベーワ、エベー、イジャーなどとなり相手が目上目下、同僚などによりいくらか表現が異なってくる。

連用形には、過去の推量を表わす助動詞「ツラ」「ズラ」が接続する。

例 飛ンズラ、書くズラ

終止形には推量のラが接続する。ラは文語体の助動詞ラムであうか、ラは打消、可能、受身などの助動詞の終止形にも接続する。

例 わいらも知ってるラ

例 雨が降るラ

サ行変格活用は上一段化しており、活用形はシ・シ・シル・シレ（シリヤー）、シロと活用する。

例 シゴト（仕事）シルトキヤー

例 アンニシルダエー（何にするのか）

カ行変格活用 of 動詞の命令形は「コー」である。

例 ハゲデエンサイトンデコー（はやく縁側へ走って来い）

形容詞 形容動詞

形容詞と形容動詞には未然形がない。つまり、形容詞の終止形にラがつき、連体形にズラがついて推量を表わし、形容動詞の場合は終止形にラがつき、語幹にズラが接続して推量を表わすからである。

例 シロイズラ（白いだらう）

シズカズラ（静かだらう）

ウレシーラ（嬉しいでしよう）

なお、郡内方言の特徴である意志、推量を表わすベーは、形容詞につくことは少ない。

助動詞

共通語でいえば、……レル、……ラレル、……ヨウ、……ラシイなどで、一語では意味をなさないが、他の品詞に接続して、話し手の意志、推量等を表わす言葉である。

共通語の完了の助動詞タ、断定の助動詞ダに、トーダーが、対応する。鳴沢はトー、大田和はダーに発音されることが多い。

例 流れて来たのだというは

ナガレテキトードツチューワ（鳴沢）

ナガレテキターダツチューワ（大田和）

例 待っていましたよ

マツテトードジョ (鳴沢)

マツテターダジョ (大田和)

遠い過去を表わすのに、タツタ、トードーが使われるのだが、鳴沢のトードーの表現の方が古い形で、大田和のター、タツタの方が新しい表現といえる。早川町奈良田と鳴沢の表現が似ており、大田和は国中方言の特徴を有している。このダ・ドーには未然形はなく仮定の形として鳴沢ではソイデが、大田和ではセーデが接続する。

例 眠たいようだから

ネブツタイヨードーソイデ (鳴沢)

ネブツタイヨードーセーデ (大田和)

意志・推量の助動詞に、郡内方言の特徴を有するペーがあるが、国中方言のズラ、ラ、ツラの方が優勢である。鳴沢においては、意志を表現する場合はペーを、推量の場合はズラを用いる傾向にある。

例 ミペー (見よう)

イクペー (行こう)

ミルズラ (見るでしょう)

イクズラ (行くでしょう)

特異な例として、イカズヨ (行きましょう) ミズヨー (みましよう) のズがある。また、国中方言の特徴である。イカザー (行こう) ミラザー (みよう) もある。

敬讓の意を表わす助動詞にサツシヤルの命令形のサツシヤイがある。

例 マットハナサツシヤイ (もっと話してください)

ソーシラツシャイ(そうしてください) 大田和では、ソーシラツシエー。

同じく敬讓の表現で「……オケル」「……オケチャー」がある。なお、オケルは「もらう」の意味もある。

例 キテオケチャー(来てもらってくださいよ)

国中方言にはない味のある表現といえる。

打ち消しの助動詞はナイ・ネーで音便形のンはない。

例 ご馳走もないけれど

オソツペーモネーケンド(大田和)

オソツバイモナイケンド(鳴沢)

丁寧な表現として、ゴザリマス(鳴沢)、ゴザンス(大田和)があるクダサイ(鳴沢)、クダイ(大田和)もある。

例 「こんばんわ」の意で、

オバンゴザリマス(鳴沢)

オバンデゴザンス(大田和)

「そうしてください」

ホーシテクダサイ(鳴沢)

ホーシテクダイ(大田和)

なお「ください」の意味で「クリョウ」の音便形「クヨ」が文末によく表わされる。

例 イワツテイツテクヨオンヤ(祝ってやってください)

助詞

本村の文末助詞で、もつとも多く表現されるのが、ジョ・ジョである。意味は「……よ」「……だよ」「……でしょ」の意であるが、この響は非常に美しい。特に相手に敬意を払って言うときには「……ジョ」と最後のオにアクセントを置き強調し、普通の場合は「……ジョ」と一音節で発音しているところは言語表現の豊かさを感ずる。

副詞

主語にも述語にもならないもので、用言を含む文節を修飾する単語を副詞というが、本村の方言の中で特殊なものをあげてみると、次のようなものがある。

アノクニ(あんなに) (例) アノクニしてやったに

オーケン・オーナト(わざと) オーナトしやーがった。

ズデーコデー(全く) ズデーコデー駄目なもんだ。(鳴沢ではズダイユダイ)

ソンゲーニ(そんなに) ソンゲーニするジョ

ヤタラクタラ(なんでもかんでも) ヤタラクタラつつこんで

アンチヨーニモ(なにとぞ、いくらでも) アンチヨーニモお願いします。

ハゲデ(精を出して、はやく) ハゲテ飛んで来オー。

ヒンガラヒンジュー(一日中) ヒンガラヒンジュー仕事をする。

ワザット(心ばかり) ワザットのものだけんど。

接続詞

シカシ、ケレドモなどのような文と文を継ぐ単語のことをいう。本村においては、共通語の音便形、あるいは子音の転換したものが多い。

ホージャー（それでは）

ホーダケンド（そうだけれど）

ホンジャー（それでは）

ケンド（けれど）

ホレトモ（それとも）

ソードーケンド・ソーダーケンド（そうだけれども）

ソージャー（それでは）

ソイデ（それで）（…だから）

（小林是綱）

会話と語彙

ここでは、鳴沢・大田和両地区で採録した自由会話と語彙（ここでは俚言のみ）とを記述する。

会話

場面設定（あいさつ）

○具体的な例示

① 天気の良い場合 朝、昼、夕方（夜）

② 天気の悪い場合 朝、昼、夕方（夜）

③ 夕食時の訪問―訪問した家が夕食時で訪ねた人物があ
いにくと不在だったが、「夕食でもどうですか」と家の

者が勧める

④ 祝儀（出産祝い）

⑤ 不祝儀（隣人の肉親の死を悔む）

⑥ 病氣見舞い

一 鳴沢地区

① 天気の良い場合 話者A三浦富作（明治四十年十月十二

(日生) B 梶原そめこ (明治三十五年三月九日生)

朝

A ワレモ ハイイナ。

お前も 早いなめ。

B アー ハイイナ。

ああ 早いなあ。

A キョーモ イイ テンキジャナ。

今日も 良い天気だなあ。

B テンキモヨクテナ イイナ。

天気も良くて いいなあ。

昼

A コンチワ ヒルクッタガナ。

こんにちわ 昼(飯)食ったか。

B アンノコトネー マダ コレカラダヨ。

なんのことはない。まだこれからだよ。

A オテンキワヨシ。

お天気は良いし。

B エーテンキデ ヨカッタネー。

良い天気で良かったねえ。

夕方

A キョウワ クタビレタナ。

今日はくたびれたなあ。

B イイテンキデ ハタライタカラ ヨワッタデシヨウネ。

良い天気で 働いたから弱ったでしようね。

A クタビレテ クタビレテ ショウナイワ。

くたびれてくたびれて しょうがないよ。

B ダカラ コレカラ ユックリ ヤスンデクダサイ。

だからこれからゆっくり休んで下さい。

A ユックリヤスンデ ヨーメシデモ クーバーナ。

ゆっくり休んで 夕飯でも食べよう。

B アー ソウダネ。

ああ そうだね。

夜

A クラクナッタナ。

暗くなったなあ。

B ハイ キョウモ ヒートイガオエタナ。

はい 今日一日が終わったなあ。

A コレジャー ユックリヤスメルナ。

これでは ゆっくり休むことができるな。

B ユックリヤスンデ オヨーハンデモタベテ ヤスンデク

ゆっくり休んで 夕ごはんでも食べて 休んで下さい。

ダサイ。

②悪い天気の場合 話者は①と同じ。

朝

A キョウワ アメツプリデ ヨタオテンキダナ。

今日は 雨降りて 悪い天気だなあ。

- B
ホーダナ コレジャ ナニモデキナイデ ドーショウナ
どうだな これでは 何もできないで どうしようもな
イネ。コンナニフタジャ―。
いね。こんなに降ったのでは。
- A
イエデデモ ネコロンデモイルドーワ。^{註2}
家にも居て 寝ころんで居るだ。
ネコロンデ ユックリヤスンデ マタハタライテクダサ
寝ころんで ゆっくり休んで また働いて下さい。
イ。
- A
オー ソウシラー。^{註3}
ああ そうしよう。
昼
- A
キョウワ ヒルマツカラ アメンフツテナンデモ デキ
今日は 昼間から 雨が降って 何にもできないで困る
ナイデユマルナー。
なあ。
- B
コンナニ ヤスンデバカイタジャ― シゴトンオクレテ
こんなに 休んでばかりいたでは 仕事が遅れてね
ネツギニコマツテクルヨウナルネ。
次に困ってくるようになるね。^{註4}
- A
ホレデモ マタ オテンキナルラベヤ―。^{註4}
それでも また お天気になるだろう。
- B
ホーサ テンキダツテ フツテバカイナイトモウガナ
そうさ 天気だって 降ってばかりいないと思うがね。
1。
- A
キョウモ ヒートイ アメブリデ アンドーニモ ドー
今日も 一日 雨降りで 何分にも どうし
ショモナイナー。
夕方
- B
コンナニ アメバカ フツテトージャキレド タツチャ
こんなに 雨ばかり 降っていたのでは 暮していけな
1イカナイヨウニナツチモウガナー テンキノコンダカ
いようになつてしまふだろうな 天気のことだから
ラ ドウスルコトモデキナイ。
どうすることもできない。^{註5}
- A
マタ ソノブニ オテンキニ ハタラカダーヤ。^{註5}
また その分 お天気に 働こう。
- B
アー ソウダナー ホンキンナツテ テンキンナツタラ
ああ そうだね 本気になつて 天気になったら
イッショケンメイ ハタラクマシヨウ。
一所懸命 働きましょう。
- ③夕食時の訪問 話者A 渡辺大知(明治三十六年十二月十
四日生) B 渡辺千代子(明治三十五年十月十日生)

A オバンデゴザイマス。

おぼんでございます。

B ハイ コンバンワ。

はい こんばんわ。

A フノー ワカイシユワ イルカエ。

あのう 若い人たちは いますか。

B フー イマチヨット ヨウガアッテ ドッカデカケトー^{註6}

ああ 今ちよつと 用事があつて どこかへ出かけたけ
ケンドナ。

れども。

A ヤー ソレワ ザンネンダナー ジキニクルラカナ。

やあ それは 残念だなあ すぐにもどつて来るだろう

かな。

B ジキニクルヨウナ キモシルケンドナー。

すぐに来るような 気もするけれどなあ。

A ソレジャー マタ エサー イッテ マタ モドッテコ

それでは また 家へ 行つて また 戻つてこよう。

^{註7}ザー。

B ソウデモナイナ。オマエ コレデ タマニキトーニ ユ

そうでもないよ お前 これでも たまに來たのだから

ツクリ ヤスマッシャイナ。^{註8}

ゆつくり 休みなさいな。

A ホレジャー ヤスマシテモロウカ。

それでは 休ませてもらうか。

B ヤスマッシャイナ。

お休みなさい。

A ホレジャー イップクスツテ マツテミザー

それでは 一服吸つて 待つてみよう。

B ソウシテナ ソノウチニ クルラソイデ。^{註9}

そうしてな そのうちに 戻つて来るだろうから。

(少し間をおいて)

B オマエモナー タマニキトーニ ユツクリ ヨーメシガ

お前も たまに來たのだから ゆつくり 夕飯がまずく

マズクモナンデモ ヨーメシデモ クツテイカッシイ。

てもなんでも 夕飯でも 食べて行きなさい。

A ワリーワヤー ソンナニ ヨーメシモナニヤ マタ エ

悪いよ そんなに 夕飯なんて また 家へ

サーイッテ クツテクラ。

行つて 食べて(出なおして)来よう。

B ソーデモナイナ オマエモ タマニキトードニモノ マ

そうでもないよ お前も たまに來たんだから まあ

アー ユツクリシラッシャイ。ソノウチニヤー コドモ

ゆつくりしていきなさい。 そのうちには 子供も戻つ

モクルラソイデ。

て来るだろうから。

A ソウカナ ナ ソレジャ マツテテ オチャノ イッパイ

- そうかなあ それでは 待っていて お茶の 一杯も
モ ヨバテルカ。
ご馳走になってようか。
- B
ソウシテ ユックリシテ ヨーメシノイッパイモ クッ
そうして ゆっくりして 夕飯の一杯も 食べてよ。
テッテナー。
- ④祝儀(出産祝い)初孫が誕生したといふのであいさつに
出掛ける) 話者A渡辺千代子(明治三十五年十月十日
生) 話者B小林もと(明治三十三年三月二十二日生)
- A
コンニチワー オモトアネー オマンノエーデモ ヨカ
こんにちは おもと姉さん お前の家でも 良かったで
ットーナー アノ マンゴウマレトツチュ^{註10}。
すね あの 孫が生まれたそうですな。
- B
ナー ワヤー マテマデトー キテクレトー
なあ あんた ご丁寧に 来てくれたですか。
マア コレッキリバカノモンデモ キハココロデモツテ
まあ これだけの物でも 気は心で持って来たか
キトーソイデ
- B
モツタイナイコンドー。
もつたない事で。
モツテキトーソイデ。
持って来たから。

- B
オゴッソウナリマス。
ご馳走になります。
- A
アンノコト アンノコトニ。
なんの なんの。
- B
オカーチャン アノ チヨコサンガキテクレトー^{註11}。
お母ちゃん あの 千代子さんが来てくれたよ
ハツマゴノイワイニ オイワイヨ コンナニタイヘンク
初孫の祝いに 祝儀を こんなに沢山持ってきてくれた
イトージョヨ。
- A
コレッキリバカリデナア ヒトメンワルイクライドーケ
こればかりでなあ 人目が悪いくらいだけれど
ンド コレデモナー オレノキモチデ モツテキトーソ
これでもなあ 俺の気持ちで持ってきたから。
イデ
- B
マタ ウラゲジャヤー ナニヲオレイスルダカ マダジキ
また 私の家では 何を御礼するのか まだすぐ には
ニハカンガエラレンラケレド ダンダン ワカイヒトラ
考えられないだろうけれども 次第に 若い人たちがそ
ガソウコウスルソイデ。
うこうするだろうから。
- A
オレーナンチューコトワ オモワナイデヨ
御礼なんてことは 思わないでよ。

⑤不祝儀(隣人の肉親の死を悔む) 話者A三浦富作(明治四十年十月十二日生) 話者B渡辺徳雄(明治三十四年三月十二日生)

A コンバンワ。

こんばんわ。

B ハイ コンバンワ

はい こんばんわ。

A オマンノエーデモ トンデモナイコンダットーチュー。

お前の家でも 大変なことだったなあ。

B コレモ ビョウキノタメデ ションナイワ

これも 病氣のためで しょうがないよ。

A ジュメヨウナイキヤー ナンポーミテクレテモシヨンナ

寿命が無ければ いくら看病しても助からないよ

イワー アキラメトイテマエノカラダダイジニスル

諦めて自分の体を大事にするだよ。

ドーナ。

B イキテイッショー ゲンキデイナキヤーナー。

生きて一生 元気でいなければなあ。

A アー ソーンナ ソーンナ デ イクツダッタエ。

ああ そうだよ、そうだよ。それで 何歳だった。

B ポツポツ シチジュウナルトキダッタエ。

そろそろ 七十になる時だった。

A マダマダ コレツカラノワケドーナ。

B まだまだ これからという時だね。

ムカシャーナア マズイモノクツテテ ゲンキニハタラ

昔はなあ まずい物を食っていて 元気に働いたものだい

トーモンドーケンド イマ ヨノナカ トテモスンけ

れど 今 世の中 とても進歩していて

デーテ ナガイキンデキルドーケンドナー

A コレツカラ ラクンデルトキ モツタイナイ。ゴツチ

これから 楽ができるという時に もつたない。苦労

ヨーキットーキーデ コレモジュメヨウジャ シカタナ

しっぱなしで これも寿命では 仕方ないな。

イナ。

⑥病氣見舞い 話者A小林もと(明治三十三年三月二日生) 話者B清水みつる(明治三十二年十一月七日生)

A コンニチワ。

こんにちわ。

B ハイ コンチワ。

はい こんにちわ。

A ミツルバア ワゲーノオトー ブッカットーチャー。

みつる婆さん あなたの家のだんなが 倒れたそらで。

B ソードー。

そらだよ。

A コマットー。

- 困ったことだね。
ナア
なあ
A アンノワケドーチュー。
どういう訳だつて。
B コレマデノヤクソクデズロウレ。
これまでの約束でだろう。
A ヤクソクッテッテモ マタオキルラヤレ。
約束と言つても また起きるだろう。
B ダンダン イイチユウジョ。
だんだん 良くなつてきたよ。
A オーホウカ ソリヤヨカッター。ホレデモ スコシバカ
ああそうですか。それは良かった。それでも 少しばか
リデ ワリイケンデ コリヨウヲ ヤツテクリヨウ。
りで 悪いけれど これを やつて下さい。
B モーシワキヤーナイナー タオスッキリデーテ
申し訳けないなあ 損をさせるばかりで。
A アンダリ モツテクルホドノモンデモナイケド スコシ
なんのことに 持つてくるほどの物でもないけれど 少
キモチヲモツテキースイデ。
し気持ちを持つてきたから。
B トンデモナイヤー。
とんでもないよ。
- A ヨクナレバ オトー マタダイジニシロ。
良くなつたら だんなをまた大事にしなさい。
B オー ソウドーナー。
ああ そうだね。
A オトーモナケレバ アノ サミシカッター エーノフツ
夫もいなければ 寂しかったり 家の不都合で困る
ゴウデコマルワ。
よ。
B ホードーヤ。ジュメヨウガナクチャー コノシャバー
そうだね。寿命が無ければ この世間はダメだ
ダメドーソイデ。
から。
A ホーヨー。オトーハ ナンボーデモナガイキヲシトケタ
そうだよ。夫は いつまでも長生きをさせておきたいけ
イケンド コノゴロモンドナー オトコノホウガ ジュ
れど このごろは 男の方が寿命が短いものだよ。
メヨウガミジカイモンドー。
B ソードーナ。オンナガノコルッキリデーテコマルケンド
そうだね。女が残るばかりで困るけれど仕方がない。
シヨウガナイ。
A アンダラ マアー ダイジニシテクリヨウ。
それなら まあ 大事にして下さい。
B オーオー。モウシワキヤーナイ。ゴクロウサマ。

はいはい。申し訳けない。御苦労さま。

註1 「くう」または「くよう」に相当し、意志を表す。国中地方では、「ズ」または「ザー」を用いる。郡内と国中との言語差の一つで、郡内が西関東方言に属し、国中が東海東山方言のいわゆるナヤシ方言に属すとしているゆえんはここにある。

註2 「イルドー」(居るどー)の「ドー」に「くだ」という断定の意味がある。

註3 「シラー」は「しょう」という意志。鳴沢村では、国中地方と同じ用法で「ラ」「ズラ」「ツラ」が使われている。田中清昭「話しことばの文末部―明見町方言の場合―」(『教育研究』富士吉田市立教育研修所 昭和三十年)、清水茂夫「山梨県郡内方言について―西湖方言を中心に―」(『研究紀要』第四集 山梨国語教育連合会 昭和四十年)等の論文、「4 山梨県大月市大月町真木」(『山梨県方言緊急調査報告書』山梨県教育委員会 昭和五八年一七四頁―二一六頁)には、これら郡内の各地でも、「ラ」「ズラ」「ツラ」が用いられているという報告がある。これらのいわゆる文末詞は、郡内でも国中でも顕著な存在であるが、「ベー」は、国中では全く聞くことができない。註4 本村の「べ」は推量「くだろう」。本村の例のように、「ベー」などには「ヤ」「ナ」と言う別の文末詞が下接することが、日常会話ではまま聞くことができる。

註5 「くザー」又は「くダー」は、意志勧誘の意味を持つ。国中地方でも使われる。

註6 「トー」は「けた」という完了を表す。国中でも使う。

註7 註5を参照。

註8 丁寧な言い方。大月市真木では「サッシャー」(前掲の報告書 一七八頁)というのを用いている。

註9 「ソイデ」ということはよく文末部に出てくる。ここでは、「くソイデ」と推量の「ラ」を伴って、「くだら

うから」という意味。このほか、例えば「行ットソーデ」という用い方もあり、この場合は「行ったそうで」という意味になると言う。

註10

「トツチュー」は「トイウ(ユイ)」(「〜と云う」が訛(なま)ったもの。意味は「したそうですね。」

註11

ここでは丁寧な言い方。禁止の意味で用いられるのは「遊んジョ」「呼んジョ」などごく限られた例で、ここではほとんど丁寧な意味を添える形で用いられている。待遇表現の一つ。国中ではこのような形で用いられた例は報告されていない。しかし、次のような報告はある。石川緑泥「山梨県河内方言」(『方言と土俗』第四巻九号 昭和九年)に、

22:デョ 何々しよう(自分に呼びかけて)(例)俺は早く行かんデョ……私は早く行きませう 三九頁

また、『山梨県総合郷土研究』(昭和十一年)民俗5方言の項(八二八頁—八四〇頁 篠原誠執筆)の方言分布図第六 凶行こう(未来)の所に △いかんじよ があり、主に東郡を中心に分布していることがわかる。(しかも、この分布図によると「いかんじよ」は河内地方に存在しないとされている。)

他県にも鳴沢村の「ジョ」に似た文末詞がある。藤原与一『方言文末詞(文末助詞)の研究』(中)に、徳島県(三一五頁)兵庫県(三二九—三三〇頁)、和歌山県(三三三頁)、三重県(三三五—三三六頁)、奈良県(三三七頁)、京都府(三二九頁)等の例が報告されている。終助詞「ぞ」の訛ったものだろうといういくつかの見解が記されている。

二 大田和

大田和地区では、音声、音韻、アクセント語法について、入念な聞き取り調査を行ったため、会話の収録に十分な時間をとることができる。ここでは、その会話の一部を記述してみる。

B ミノーモッタカエ。

A オラー キョー サカナツリーイッテクラー。
俺は 今日 釣りに行ってこよう。

①釣りに出かける夫を送り出す場面と釣りから帰った夫を迎え入れる場面。

みのを持ちましたか。

A オー モットーワ。

ああ 持ったよ。

B ウマイベントウツクッタカラ。コノフロシキヅツミダ

美味い弁当作ったので。 この風呂敷包みだよ。

ヨ。モッテツテクダサイ。

持って行って下さい。

A ホレジャー イッテクラーナ。

それでは 行ってこよう。

B タクサンツツテコザッシエーヨ。

沢山釣って下さいよ。

A ウントツツテクルカラナー。オゴッソウシトケヨ。

たつぷりと釣ってくるからな。御馳走を用意しておけよ。

(間をおいて)

A キョウワ ウントツツテキタゾー。

今日は たつぷりと釣ってきたぞ。

B ヨカッタナ。ホレジャーウマクニテヤルヨ。

良かったなあ。それでは、上手に煮てやるよ。

A ウマク リョウリシテナー。ホイディッペーノムベーフ。

上手に料理してくれよ。それで一杯飲もう。

―同じ場面設定でのもう一つの会話―

A キョウワ オテンキガワルイヨッテ サカナツツリデーモ

今日は お天気が悪いので、 魚釣りでも行ってこよう

イッテコベーフ。

つと。

B イッテクルカエ。アメドウグモッタカエ。

出かけてきますか。雨具は持ちましたか。

A ミノー モッタ

みのを持ったよ。

B ホレジャー ベントウモツテクズラ。ニギリメンシガフタ

それでは弁当を持っていくだろう。にぎり飯が二つもあ

ツモアレバイイカエ。

ればいいだろか。

A アアイーヨ

ああいいですよ。

B ホレジャー ウント ツツテゴザッシャイヨ。

それでは、沢山釣ってきて下さい。

(間をおいて)

A アー クタビレタケンド ウントツツテキタゾ。

ああ 疲れたけれども たくさん釣ってきたぞ。

B ドレミセラッシエー。

どこ見せなさい。

A ヤー ゲーニアルナ。イロイロノサカナガアラパーバ

やあ 沢山あるな。 いろいろな魚があるね。

ヤ。ホージャー ジョーズーニペーナ。

それでは、上手に煮るとしよう。

②朝のあいさつの例。

A ハイ ハエーナ。

はい 早いなあ。

B オメー ソンナニシヤレテ ドケーイクダエ。

お前さん、そんなにおしやれをして、どこへ行くの。

A キョー ヨシダエカイモンニイクベートオモツテデカケ

今日、吉田へ買物に行こうと思っ出て出かけてきた。

テキトー。

B アー ウレーマシー ホーシテ、オンニー ナンデモ

ああ うらやましい。そして 私に 何でも(良いから)

ミヤゲヲカッテキテクリョー。

土産を買ってきて下さい。

A アンニョー ホシイ。

何を欲しい。

B アンデモ イイニ。

何でも良いです。

A ダイフクヒトツカフタツカエタラカッテクルナ。

大福一つか二つ買えたら買ってくるな。

B ウレシイドージョ。タノムヨ。ユックリイッテゴザッ

嬉しいよ。 頼むよ。 ゆっくり行ってきて下

さいよ。

語彙

ここでは、方言語彙の全般について言及するのではなく、いわゆる俚言について記してみる。俚言とは、鳴沢村特有のことは、他の地域(ここでは特に国中地方)では見ることができない鳴沢村のことばということになる。先に記してある会話中からもいくつかの俚言を列挙することができる。例えばヒートイ(一日を意味する)、エサー(家、家へを意味する)、ソイデ(文末に付いて くから)などである。

さて、鳴沢村では、既に『鳴沢村のことば』(鳴沢村教育委員会編)という方言集を出しており、鳴沢村言語の語彙が、大田和と鳴沢という二つの地区の地域差をみることができる形でまとめられている。ここでは、その方言集を参考にして、鳴沢村特有のことばのいくつかを抜き出して記すことにする。それらのことは、時に、郡内地方特有のものである場合もある。

凡例

○語、意味とも、『鳴沢村のことば』より引用させて頂いた。

○鳴沢での言い方を先に記し、大田和での言い方が違っている場合は△内△に記した。

○△印以後の解説は、執筆者のものである。

(ア)

アイバセマシテ△アイバセマシテ▽(動) 良くいらつしやいました。アイバツシヤイ△エーバツシエ▽(動) 行きましよう。△アイバはアイブ、エーバはエーブという動詞で、ともに、アユブが変化したものである。行く、歩くという意味で、アイブなどは、江戸時代安永天明年間(一七七二〜一七八九)頃に流行した言葉であつたという。

アイベ又はエーベ△エベ▽(動) 行こう あゆめ △前項参照。エベというのは、河内方言(峽南地方)にも見られる。

アカブキ(名) 肺臓 アダジャーナイ△アダジャーネエ▽(形) 仲々大変 アチャ(名) さようなら。人に別れるときにいう。「アチャ」又は「アチャよ」 △明治二十七年の『山梨鑑』の方言の項、「郡内領南北都留郡」の条に

アチャ然ラとある。また、三田村玄龍「甲斐方言考(下の九)」(『風俗画報』352号 明治三十九年)に ハチャとして

「甲府附近両山梨両八代等にては大人が罷らむ時にハチャといへり」とある。
アツラアサル(動) 頼まれる アデ又はナデ△アデ▽(副) なぜ △ナニ(何)がアニと訛ることが多い。その例をまとめて記してみる。ナニポツシモナイ△アニポツシモネエ▽ 何程もない。いくらもない。アンノコトニ又はナンノコトニ△アンタラコトニ▽ なんのことに。どういたしまして。ナンノコターケ△アンノコターケ▽ どういたしまして。ナンノコトニ又はアンノ いいえ。なんの。ナンチョーニモ△アンチョーニモ▽ 何分に

も。ぜひと。などがある。

アナゴ(名) 夏蚕。蚕の種を風穴に入れてふ化を抑制する。アラト(名) 手前。近くに。

(イ)

イーコロス又はユイコロス△イーコロス▽ (動) 悪口を言う。かげで悪口をいう。イカメー(形) 少しばかり。

けちな。イキヤリ(名) 体を休めること。慰勞。休養をとること。イグスリ(名) いびき。インキ(名)

きこりの尻あて。イジャ(動) 行こう。イチイ(名) 巫女(みこ) イッケシュ(名) 一統一門。△真宗

の一門一家の人々の名称の一つに一家衆というのがある。もとは、室町後期の本願寺八世の蓮如以後の、真宗本願

寺法主と同じ家系の一族をさしていた。一族とか一門という意味で方言として残存している。新潟県北蒲原郡、徳

島県祖谷、高知県幡多地方にも見られる。イボクイムシ(名) かまきり△物類称呼に、かまきりの事を「相模

にて、いぼしり又いぼくい」と言うところある(東條操校訂『物類称呼』岩波文庫 一九四一年七一頁)。

(ウ)

ウキル(動) 浮く ウツツカッツ(名) 同じ。同等の意。似たりよつたり。ウデッキリ(名) 精一杯。ウデ

ツコキ(名) 腕のかぎり。力のかぎり。ウムシユ(名) 風呂の湯を入れ替えないで沸かしなおした湯。ウ

ムス(動) 蒸す。醗酵させる。△新撰字鏡に「饜可志久又宇牟須」と見える。方言としては、北は青森、秋田、

南は大分、宮崎と全国に分布している。山梨では、明治に書かれた岩瀬文庫蔵『甲斐国方言集』(稿本)に例が見ら

れる。なおこの稿本の作者は未詳、西山梨郡役所の野紙に記されている。

ウラツポ(名) 先端。梢。末。ウラツポーともいう。△茨城、埼玉、東京、神奈川などでも使われている。

(エ)

エードウジョ \blacktriangle エーダージョ ∇ 了解。良い。 \triangle 他にもエードウジョ \blacktriangle イージョ ∇ いいですよ。ジョについての説明は、1会話の註に記してある。大田和の老女の話によると、目上の人に対しては「そうだジョ」と「ヨ」をはつきり発音し、目下の人に対しては「そうだジョ」となる。

エチョー(名) ぜいたく。おごり。「そんなものを買ってエチョーどお」

(オ)

オーケン(副) おおよそ。大体。 オーナト(副) わざと。故意に。 オーフ(名) きまえよし。物惜しみしない。「あの人はオーフどお」。 オカマヤ(名) 昔不浄のために使用した部屋。 オキノデー \blacktriangle オクノデー ∇ (名)

奥の間。△昭和十一年の『山梨県綜合郷土研究』の民俗5方言項を見ると、方言に表れた地方生活 一住居及び燃料、照明の所に、「板の間の奥を『でゐ』『でーさ』『おくのでー』(奥座敷といふ意にも用ゑ)等の語は郡内地方に残存してゐる。」とある。 オシラ \blacktriangle オケーク ∇ 又はオシラ ∇ (名) 蚕 △蚕の方言としてのオシラあるいはオシラサマは、神奈川県津久井郡、埼玉県秩父、静岡県駿東郡などに見られる。都留文科大言方研究会編『山梨県郡内地方方言分布図』(一九八七年七月)No.63 「蚕」を参照するとオシラ(サマ、サン)は郡内全域に広く分布していることがわかる。 オケル(動) いただく。もらう。 オコッペー(名) ませた態度。 オジル(動) おどろく。おじける。「馬がオジケル」など。△新撰字鏡に「愕然 驚愕也 於豆又於比由 又於上呂久」とある「於豆」おづ。方言として残存しているのは、山梨県奈良田、伊豆三宅島、佐渡島などである。 オチャバ(名) 多弁家。おしゃべりをして歩く人。 オチューバイ \blacktriangle オチューベ ∇ (名) よけいなお世話。お世辞。 オトボネ(名) 大きな声。 オマイ \blacktriangle オメ ∇ (名) 目上の人をいう。敬語につかう。△大田和の老人の話によると、目上にはオメー、同僚にはオマイ、目下にはワヤーと使い分けるといふ。 オンカ(名) 内々におさめること。「オンカにしてくよーん

や(下さい)「 オンコージ△オンコージョ▽ (動) 思案がる。恩着せがましい。もつたいぶる。「オンコージョしやがって」オンモリ(副) おっとりしている。△方言として、長野県諏訪、名古屋などにある。

(カ)

カーカーシイ(形) ずうずうしい。「カーカーシイ野郎だ」 ガーツレル(動) 腹がへって、飯などを早く食べあせるさま。欲しくて欲しくてたまらないさま。カガビ(名) 囲炉裏などに素足のまま暖を取り、すねに生ずる火斑。カケー(名) 頼り。あてにすること。ガカイ△ガケー▽ (名) 外見。図体。かまえ。体格。カシメル(動) しめつける。「板をくぎでカシメル。」

カスカス いっぱいいっぱい。△かろうじて足りるか足りないかのさま。「八合がかすかすじゃ」という言い方で、淡路島をはじめ、徳島、香川県高松からの報告もある。

ガッソー(名) 男子の髪がのびているさま。「ガッソーになつてるじゃあーねえーか、かっっておける」 △ガッソーアタマ(元僧頭) という言葉がある。江戸時代、茶坊主、医者、山伏たちの髪形。あるいは、七、八歳の子供の髪形。方言としては、山梨では奈良田でも鳴沢と同じ意味で使われている。

カタイニ△カテーニ▽ (副) 無理に。わざと。カミキリムシ△ガマンマリー▽ (名) くわがた虫。

カンジョ△カンジ▽ (名) 便所。△甲陽軍鑑一品三三に「信玄公、御用心の御ためやらん御閑所(かんじょ)を京間六帖敷になされ、畳を敷、御風呂屋、縁の下よりとひをかけ、御風呂屋のげすいにて不浄を流様に遊」とある。日葡辞書にも、便所の意を持つ語としてCanjo(カンジョ)とある。古い言葉で、現在も、全国各地に方言として残存している。山梨では、奈良田でも使っている。前掲の都留文大の分布図№28「便所(ベンジョ)」を見ると、鳴沢ではチョーズバあるいはカンジ、大田和ではカンジと記されていて、郡内地方で、カンジはこの二ヶ所のみとなつて

いる。

ガンタクロー又はガンタクレ \blacktriangleleft ガンタクレ \blacktriangledown (名) わんぱく者。頑固者。暴れ者。

(キ)

キモツキレ (名) 短気。「あの人はキモツキレだあー。」ギョーサ (名) 行儀。行儀作法。キョクル (動) かわらかう。愚弄する。「人をキョクツちよ。」あてこすりをいう。キリコミ (名) (切り込みの意) ほうとう。都留文大の分布図 (以後略して分布図と言うことにする) No. 7 「煮込みうどん」の項を見ると、郡内のほとんどでは、「ニコミ」と言うのであるが、鳴沢、大田和、河口湖町船津の三ヶ所で「キリコミ」と言うたと報告されている。

(ク)

クジル (動) 穴のまわりをかきまわす。

クスガル (動) かがむ (体力がつきて)。

クライソバイル \blacktriangleleft クライソベル \blacktriangledown (動) 悪ふざけをする。「クレーソベヤーがって。」クレジガル (動) 呉れ

おしむ。

クロブキ (名) 肝臓。

(ケ)

ケチドナー \blacktriangleleft ケチダーナー \blacktriangledown けちなあ。大田和では残念だ、がっかりしたなあ の意もある。ケツークライ \blacktriangleleft ケ

ツウクレ \blacktriangledown いやだ。馬鹿をいうな。尻をくらえ。

ケドサガシ (名) こそこそ探す。主に子供がかくれてさがすこと。「ケドサガシをしやーがって。」

ケラド \blacktriangleleft ケラ \blacktriangledown (名) きつつき。△日葡辞書に *Qerantugi* (ケラツキ) とあり、物類称呼に「てらつゝき 又けらつゝき」といふ

。江戸にて。きつつきと称す又東国にて。をげらと呼」とある。ケラという呼名の報告は多い。『山梨鑑』の郡内の項を見ると「ケラホッキ啄木鳥」とある。

ケラバ△ケラマ▽(名) 余分者。「お前のようなケラバはどこえでもいけ。」

(ユ)

ゴーサラシ(名) 恥さらしな事又は人。「ゴーサラシヤあがつて。」ゴータラ(名) 強情。「ゴータラをこねる。」鳴沢では「ゴターコネル」という。コータイモナイ△コーターモネー▽(名) 立派。たいしたもの。広大なる。ゴートク(名) 繁茂しすぎる事。「肥料をくれすぎてゴートクしとお。」ゴノーガカナーナイ△ゴノーガカナーネー▽ 体がよくきかない。

コケノカー(形) つまらない。能もない。ばくさくして話にならないこと。「そんな事したらコケノカーだ。」

コッペー(名) いらぬおせわ。生意気。

コデル(動) もつれる。「会がコデて」

コビリー(名) 午前10時頃の間食。△分布図№2「間食(カンシヨク)」によるとコビリーは、鳴沢、足和田村、勝山村小海、河口湖町河口にみられる。

ゴブリ△シンキラブリ▽(名) しとしと降る雨。ゴミル(動) ごたごたする。入りまじる。濁る。「湯がゴミた。」

ゴランマク(名) 大変に物をちらかした。收拾がつかない。△分布図№37「散らかっている状態」を見ると、鳴沢では「ゴランマク、ランゴク」、大田和では「ケンマクゴランマク」とあり、富士吉田市内でも「ケンマク」「ゴランマク」の双方を用いているところが多いようだ。

(サ)

サーラバ(名) 機会ごとに。「サーラバ人の悪口をいいやがって。」サキヤマ(名) 柚人(八やまびと)√。 サシクル
(動) 都合をつけること。くりあわせる。

サス(名) 焼畑。大田和では家上河原(いえがみかわら、字名)をこう呼ぶ。△焼畑をサスといったのは、東京、埼玉などの地域で、郡内にも焼畑の名残りの地名として栗指(クリサズ、オオムサザ)などがある。鳴沢村内の字で、水木(ミズキ)草里(クサリ)、犬の子草里(イヌコソウリ)とある草里も焼畑を指す。南巨摩郡には、草里とつく地名が多い。

ザツカケ(名) 粗雑。無遠慮。体裁をつくらない。サンヨ(名) 家などを建築する場合、基礎をかためる地づき。三嫁(さんよめ)√の意だという。

(シ)

シカツメラシイ(形) しかくばった。あらたまった。「あの人の話は、シカツメラシイ。」シキセ(名) 盆正月に使用する着物。仕着。オシキセは晩酌。

シジ(名) 男根。△経尊が書いた『名語記』(一二七五年)に「小童が被皮をしじとなづく、如何。さきそぎの反。さきのほそぎ義」、節用集の一つ『伊京集』(室町末)に「似指シジ 小兒男根」とある。山梨では、奈良田にも残っている。

シズネー(形) つけ物の重石が多すぎて、こわくなった意。「押しがききすぎてシズネー。」シセキ(名) 家の周囲のへだ。屋敷林。シタム又はヒタム(シタム)√(動) 水気をとること。液をしたたらせること。ジチャーナイ(シチャーネー)√ 非常に。つめよる時に使う。「ジチャーナク古い。」シャーケレル(名) 生意気。出しやばり。シャクゴ(名) 物指し。

ジユクダレル(動) あばれる。

ジョー(名) 道筋。「沖村のジョウ」「長ジョウの家」などと使う。

ジョナジョナ(名) 男のくせに女らしいしぐさをする。「男がジョナジョナしちよ。」

シンナリクンナリ(名) ひょうたんなまず。とりとめもないさま。要領を得ないさま。「男のくせにシンナリクンナリするな。」

(ス)

ズイ(名) 芯 \wedge しん \vee 。我がまま勝手。「ズイに育ててしまつて困る」などと使う。

スイオコグル(動) 邪推する。「スイクグリ」ともいう。「あまりスイオコグつちよ。」

スイヒロ(名) 風呂。△スエフロ(据風呂居風呂)の訛つたもの。

ズナイ \wedge ズネー \vee (形) 強力な。あばれん坊の。強い。

スルス(名) 粟などの外皮をとるすり臼(木製)

スラギ \wedge スワ \vee (名) 急斜面から荷を降ろす時の下木。

(セ)

セセクル(動) いじる。もてあそぶ。大田和では畑の境を少しづつ侵害する時つかう。「畑の境をセセクリやがつて。」

セツチョー(名) もてあそぶこと。「セツチョーしちよ。」

センド(名) 先日。

センドー \wedge センド \vee (名) 千六本(大根の千切り)。「センドー蕎麦」は大根が入つたソバ。ソバだけのものは「蕎

「表ぞつき」という。

(ソ)

ソーケル(名) 寒そうな様子。「ソーケツツラ」で、寒そうな顔のこと。

ゾロツペー(副) いいかげんに。あつさり。

(タ)

ター▲エーカエーカ▼(名) 石けり遊び。チンジリをしてまたぐ石けり遊び。鳴沢では、石や棒などを蹴って遊ぶ

こと。

ダイドー▲タイコ▼(名) 太鼓。

タカジョウ(名) (鷹匠の意?) 地下たび。

ダチンバ▲カトーマ▼(名) 肩馬。肩車。

タテコーズイ(名) 大雨。豪雨の降るさま。「タテコーズイにあつて。」

タナモト(名) 台所。△分布図№25「台所(ダイドコロ)」によると、鳴沢のみタナモトを用い、大田和では(オ)

カッテあるいは(オ)カッテバを用いている。郡内では(オ)カッテ系の語がほとんどで、デードコが数ヶ所。タナ

モトは、鳴沢地区のみ。県内では、奈良田で使っている。

チギリコミ又はオツケダング▲チチンピョ▼(名) 汁の中に小麦粉の練ったものを少しずつ分けて入れて、煮込んだ

もの。

チャラ(名) 口から出まかせに無責任なことを言う。△『江戸語の辞典』(講談社学術文庫)を見ると、「深川の岡場

所語」であったと記されている。

チューラニ(副) 簡単に。ちよつとには。

チョンポリ(名) 少しのかたまり(そば、うどんなどのひとたまをひとチョンポリという)

チワル△チワル又はワケル▽(動) 分ける。大きな竿秤へさおばかり▽。分配する。「それをチワツて皆にやれ。」
チンギリ又はチンジリ△チンチンコ▽(名) 片足とび。

(ツ)

ツギ又はサイデ△ツッキ▽(名) 布。布きれ。

ツクガタタナイ△ツクガタタネー▽(連語) 手も足も出ないこと。意地がたたない。「年がよつてツクガタタネー。」

ヅヅ(名) 水の小児語。

ツッコイル△ツツケール▽(動) 入れる。ひたす。つつ込む。「オケにヒシヤクをツッコイル。」

ツビ(名) 陰門。△色葉字類抄「陰ツヒ玉茎玉門通称也。開同。」、又、名語記に「女人の陰をつびとなづく、如何。

つびは間の字也。」とある。方言としても全国各地に残っている。

ツルム(動) 交尾する。△奈良田でも使う。

(テ)

デー(名) 奥の座敷。大田和では、主に寝室につかつた。

テーノー(名) 頭頂部。

テグラ(名) 手で大きさに所作をとること。「テグラをしながら話す。」手をくんでする子供の遊び。

テダル△コタガ▽(名) 小桶。湯水を入れる木製小樽。

テッコミンジョウ(名) 人をいじめること。「テッコミンジョウにされた。」

デデッポイ△デデッポ▽(名)鳩。△『物類称呼』に「斑鳩つちくればと古俗の称也。東国にて。きじばとと称す…:東

国にててっほうく
△アほうく△と鳴くと」とある。

テッコーモリ△テンコーモリ▽(名)茶碗にご飯を山盛りにもること。

テンズラマイ△テンズラメー▽ 手をつなぐ。

デンヅコー△ヅコー▽(名)丘の小高いところ。「ヅコー」だけでもよい。

テンモク△チャンカケラ▽(名)せとものの破片。△テンモクには瀬戸物の意味もある。『物類称呼』に「茶碗ちやわん。北国及中国西国四国或は常陸にて。てんもくと云肥前の鍋嶋奥州二本松にて。いしごき…:。」とある。

(ト)

トコロトツパジ(名)中途半端な。途中を抜かしたりすること。「あいつの話はトコロトツパジでわからねえ。」

トトジル(動)ボロを縫う。

ドブンジリ(名)腹にきめたこと。

トッパイス△トッペース▽(動)相手になつて遊んでやる。「犬をトッペース。」

トトロバシル(動)つまづいてよろける状態をいう。「けつまづいてトトロバシった。」

ドラブチ(名)かけおち。(相思の男女が相伴ってひそかに他郷に逃亡すること)。又は、有力者のもとに身を寄せること。「ツレダシ」ともいう。

ドロPPER(形)雑な。投げやり。

トンポーラ△トポクラ▽(名)てっぺん。主として木のでっぺんを言う。「木のトンポクラ。」

(ナ)

ナンゴ△ナゴ▽(名) 濃霧。「今日は、ナゴが深い。」「山からナンゴがおりてきた。」

ナニッポシモナイ△ナニボッシモネー▽ 少ない。「ナニボッシモネーから呉れることがでねえ。」

(二)

ニダイ△ニチュー▽(名) 少したりない人。未熟。半ば者。

ニドル(動) 背負子△しよいこ▽などに、荷をきちんとつけること。「さあニドッテ帰るべーわ。」

(ネ)

ネーツバリ(ネ) 寝小便。

ネツイ(形) 丁寧。熱心。辛抱強い。

ネメル(動) 取ろうと一生懸命にしている。目をつける。ねらう。△名語記に「人にむかひて、いきどおる詞を

ねむといへり如何。答、ねむはねけまくの反、根気也。ねりあげる詞づかひ也。ねまるともいへり。まるを反せばむ也。」とある。

(ノ)

ノコイ△ノケー▽(形) 小さい。「ノッケー」「ノッコイ」ともいう。

ノジル(動) 焼く。こがす。「(つけ火をされて) 軒をノジられて。」

ノヅキアメ(名) 降ったり止んだりの雨。

ノメクル(動) 遊んで仕事をしない。「ノメクリモン」でろくに仕事をしない人。

(ハ)

バース(名) 小枝の多くついた枯れ枝。生きてる木でも小枝が多いものをいう時もあった。「いいバースになった

あ。」

ハイコミ△ヘーコミ▽（動） 損をする。「もろこしが値がいいつちゅーから作ったけど、どうも今年はヘーコミだあ。」

ハゲデ△ハイデ▽（副） 早く。「おこられるから、ハイデその位のこたあしろ。」

ハギル（動） 枝などをなたや鎌などで切りおとす。「枝をハギッテ、もし木にする。」

バソク（名） 即死。「交通事故で、バソクだ。」

バチズナ（名） 富士噴火砂。

ハッチャーゲル（動） 寒さで土が凍つてもちあがる。

バンドー△バドー▽ 仲介人。「あの畑をくみっこするけど、バドーしてくよーや。」

（ヒ）

ヒイキジリ△ヒーキ又はヒーキジリ▽（名） 燃えさし。大田和では「ヒーク」ともいった。「ヒーキジリをしよわせるぞ。」

ヒートイ△ヒーター▽（名） 一日中。一日がかり。「でかい畑で、ヒーターじゅうかかった。」

ピヨソコ△ピーヒヨロ▽（名） オカタグサ。やぶかんぞう。

ヒズイ△ヒジー▽（形） いやな味「味がヒジー」というような使い方をする。物が腐りかけ、すっぱみの出たときの味。青くなつたジャガイモの味。

ヒドール（動） 板などが湿気をおびてたるみ乾いた方にそること。

ヒトマクジリ（名） 一目散。「ヒトマクジリに逃げる。」「ヒョーマクジリ」とも言う。

ヒナル(動) 騒ぐ。高い声を出す。「あのおじいが、ヒナリあがつて。」

ヒネ 古い。「ヒネの種だから発芽具合が悪い。」

ヒナイ△ヒネー▽ わからない。「考えにヒナイ」のように使う。

ヒネジイサン△ヒネジイサン又はヒネジイ▽ 曾祖父。

ヒヤーズイ△ヒヤージイ▽ (形) 年の割に未熟な感じで青一才という意味。弱々しい。「ヒヤーズイ顔。」

ヒヤーモデナイ△ヒヤーモデネー▽ 全然できない。一銭も出ない。「おまつりの費用をヒヤーもクレネーで。」

ヒョーグル(動) ほとぼしる。はじく。「(子供に)子供に小便をヒョーグラかせ。」

ヒョーゲル(動) 脱線する。横つ躍びをする。「ヒョーゲテ、物にあたらなかった。」

ヒラ(名) 傾斜地。「せどのヒラ」のようにつかう。

ヒンガラヒンジュ(名) 終日。一日中。「ヒンガラヒンジュよく精が出るなあ。」

ピンギ(名) 便り。伝言。△ピンギ(便宜)で、たより、音信の意味がある。奈良田にもこの言葉は残っている。

ブス(名) すねること。「ブスをこく」という使い方をする。

フッキ けちけちしない。多い。豊富。「あの人はフッキな人どお。」呉れ好き。

ブスコキムシ△ブリコキムシ▽ (名) おこりん坊。

(へ)

へオクライ△へオクレー▽ (形) いやだ。そんな事を誰がするか。

へス(動) 押す。△色葉字類抄に「庄へス」とある。奈良田にも残存している古語である。

へんがる△へんゲル▽ (動) 変化する。かわる。「約束してたーに、へんゲーチャ困らあ。」

ホウジモナイ△ホージモネー▽(形) ともでもない。法外な。(大宝令の四至勝示△しいしほうじ▽のほうじ。(境のしるし)の意か。) △日本国語大辞典をみると、ほうじ(勝示)は、「町村の小区画。地域。地方。」を意味する方言として、鳥取県や徳島県に残っているとある。また、『俚言集覧』に「勝示なし 際限のなきを云又海魚の名」とある。羽田一成『山梨県方言辞典』には「ほーづもない(形) 滅法界に」という語があるが、こちらの「ほーづ」は、日葡辞書に「Fozzu (ハッツ) △訳▽量または際限」とある所のもので、「限りがない途方もない。」という意味の「ほうづがない」という方言が各地に残っている。奈良田にもある。

ホーヅケ(名) 破産。整理。「あの家ではホーヅケをしとおー。」

ホキキョン又はホケキョン△ホキキョー又はホケキョー▽(名) ふぎのとう。

ボサユキ(名) ボタン雪。しめつてめかたが大きくなった雪。

ボサ△ボシヤ▽(名) 小さい木の群生藪△やぶ▽。

ボシヤクレル やせた姿。期待ほどの仕事ができない事。

ホジレ(動) 毛がクシヤクシヤになってしまったこと。「毛がホジレた。」

ホッテモ 決して。「そんな事ホッテモない。」

ホラ(名) 山あいの入り込んだ所。

ホロクレタ(動) 年老いて丁度のことを言ったり行ったりしない。「あのおじいも、ひゃーホロクレテやあ。」

ボンゴザカブリ(名) 酒席の最後に残る者。

ボンボラ△ゴンボーラ▽(名) いたどりの小さいうち。

(4)

マキメ(名) つむじ。

マケル(動) こぼす。(お茶を)いれる。「お茶マケテくよー。負ける。」

マジッカー 暗くなった。「マジャッカーしてきてよく見えない。」△マジマジは、黄昏時を意味する。「マジマジ

△どき▽」

マテー△マテ▽(名) 丁寧。「仕事がマテー人。」「あのおはしんはマテだ。」

ママイ△ママー▽ もういいです。何卒。「ママイそうして下さい。」むしろ。「ママイあきらめましょう。」

マンパチ(名) 偽り。でたらめ。「うそのマンパチ」(万八の字をあてる。)

(ム)

ムカエヅキ△ムカーリヅキ又はムケーヅキ▽(名) 子供が生まれて満一年になる月。子供の生まれ月が来ること。

ムクレル(動) 皮がむける。大田和では「怒る」意。

ムシャツク(動) いかる。腹が立つ。

ムルイ又はムリー△ムリー▽(形) もろい。弱い。長もちがしない。思ったより早く悪くなってしまう。

(モ)

モジャクル(動) 洗濯をするに両手でごしごしする。

モジャクレル(動) 糸が乱れたさま。「話がモジャクレたあ。」

(ヤ)

ヤクダメ(名) 意気地なし。のろま。しかる時に用いる。

ヤニル(動) ねちねちする。

(ユ)

ユウウチ(副) 特に。とりわけ。

ユワイ(名) ヌウエー(名) 祝い。

ユリカワ(名) 廊下。(奥座敷の縁側) 「ユリカワへ物を置いちゃあだめだぞ。」

(ヨ)

ヨーガイ(名) ヨーゲー(名) 用心。心がまえ。「夕立があるぞー、ヨーゲーしとけ。」

ヨーセー(名) ヨーシー(形) か細い、ひ弱い。「ヨーセー子で、困らあ。」

ヨール(動) 鳥獣の解体。料理する。「おまつりがくるよって、鳥でもヨールか。」

ヨジケル(動) よろめく。よろける。「(石につまづいて) ヨジケた。」

ヨッチャーサリ(名) ヨッチェー(名) 仲間どうしで集まったグループ。寄り合い。

ヨテ(名) 得手。得意。

ヨドーサレ 常識をはずれて、気ままに迷惑をかける人、その行為。「あのヨドーサレめが。」

ヨニコク(副) ろくに。程度の低いさま。「(作物が)陽気が悪く、ヨニコク取れねえーわ。」

ヨリイル(動) ヨリイル(動) ふてくさって行動をおこさない。「座ってヨリイル。」「体が悪くねーに、寝てばか

ヨリイらあ。」

(ラ)

ラッピランゴク とりちらかした形容。「話をもめて、ラッピランゴクだあ。」

ランガーシー(形) 乱暴じみた。そうぞうしい。「ランガーしくて困らあ。」

(ワ)

ワガ(名) お前が。「ワガ、わりどーわ。」

ワンゲー(名) ワゲー(名) お前の家。「ワゲーじゃあ、餅をついたか。」

ワザ又はワザノイドコ(名) ワザイドコ(名) いろりの上席。

ワタクシ(名) 小使いかせぎ。またそれで得た金銭。「馬借すよつて、ワタクシに行つてこー。」

ワダマーリ(名) 主人以外の者が主人の座にすわること。「猫ほか坊主のワダマーリ(親爺の席へすわるのは猫と、わからずやの子供だけだ)」

ワヤー(名) お前。お前は。

(笠井 充)

第七節 民謡

1 はしがき

近世民謡は、近世期農山漁村に生きた人々が、苛烈な生活の中で、同村や隣村の人、旅の人などから聞き覚えては、つきつぎと伝えて来た生活の唄である。その伝承の間に、ふし曲節を工夫したり、新しい歌詞を作ったり、よその気のきいた曲節や歌詞を取り入れたりして、絶えず磨きをかけて来たので、民謡は常に生き生きとして、人々の心を捉えていたのである。それというのも、肉体の酷使によつてのみ生活を維持し得たような時代に、特に若者たちにとつて、民謡だけは体制の干渉の及ばない手近の娯楽であり、民謡だけが自己表現の満足を与えてくれるものであったからである。

明治から大正、昭和と近代化の波が行き渡つた結果、人力万能、機械拒否の社会を基盤とした近世民謡は、その役割を終えて、多少の例外を除いて消滅したといえよう。さらに戦後の経済成長期を経て、日本人の音楽的嗜好は多様化するとともに都市、農村間の格差は縮少し、全体として洋楽系が優位を占めるようになった。

こうした状況の中で、都市を中心に「民謡歌手」の歌う「民謡」と呼ばれる歌謡が、一部の人たちの支持を受けている。民謡という言葉は現在乱用されていて、人それぞれの立場からその内容、限界が違っているが、筆者は民俗音楽の立場から、民謡歌手の「民謡」は本来の民謡とは異なるものであると考えている。その理由の詳細は長くなるので省略し、要点を項目として掲げると、都市型芸能であること、郷土性や民俗性に欠けていること、個々の歌手が流派を形成していること、固定した唄を強制すること、営利本位であることなど、本来の民謡の世界では考えられない

ことである。

近世民謡を含む本来の民謡は、部落限りの自然物のような存在であって、唄自体は開放的で自由なものであった。どんな歌詞をどんな曲節で歌おうと勝手に、へたなものも誰も相手にしないが、上手なものも人がまねをして段々に広まっていった。こうした自然の選別作用によつて、民謡は磨かれて伝わっていったのである。ただし部落という枠の中にあるために、民謡は生産活動や民俗行事と関連して歌われるという、音楽外の制約が付随していたのである。鳴沢村には、青春の日の情熱を民謡に打ち込んだ最後の世代の人たちが多数健在で、成長力は失ったが部落的制約から解放された正統の近世民謡を歌い伝えてくれている。しかも、歌詞史的に貴重な唄を含めて、他地に例の少ない多数の唄が、明確な音階とリズムを持って歌われているのである、本稿においては、鳴沢村の民謡をできるだけ正確に記録するとともに、先人たちの生活の一端をも紹介したいと考えている。

2 概 況

ここでは、鳴沢村の民謡を通じて見られる特殊性について、項目を立てて概説することとする。

第一に、数多くの民謡が伝えられていることである。現在知られている限りでは、山梨県内の市町村の中で最も多い方に属すると思われる。その理由として、自然的、行政的に辺境に位置し、かつては村外との交渉が少なかったため、文化の吹きだまり傾向があったこと、その結果として、村人、特に女性が民謡を大切に保存して来たことなどが考えられる。

第二に、古いものから新しいものまで、各種の型の民謡が共存していることである。現存する歌詞はその形から、五句型（七五七七四音）、四句型（七七七五音）、くどき型（七七七音を繰り返し最後を七五音で終わる）、その他の型（前記の各型に属しないもの）の四種に分けることができる。五句型は、四音の存在や用語の古さから、江戸時代前期あるいはそ

れ以前のものと考えられる。四句型は、江戸元禄時代前後に完成した都市のはやり唄と同型である。くどぎ型は、四句型の真ん中へ七七音を重ねてはめ込んだもので四句型より新しいものである。その他の型は、明治時代以後のいろいろな形のはやり唄を取り入れたものである。

第三に、メロディーもリズムも明快であることである。日本の民謡の曲調を八木節型と追分型に大別する説（小泉文夫『日本伝統音楽の研究』）に従えば、鳴沢村の民謡はすべて八木節型で追分型は一つもない。どちらかというと陽性で唱和に適するが、情緒性に乏しい感がないではない。水田のない高燥な畑作地帯という風土が反映したものと考へることができよう。

第四に、大概の唄に多数の歌詞が付属していることである。これは、宴席で歌われることが多いため、多数の歌詞を必要としたということ、物もちのよさによると思われる。歌詞の中には、全国共通の洗練されたものが多いが、地元手作りと思われる素朴なものがある。先人の豊かな創作力に感心させられるとともに、往時の生活の一端をうかがうことができ、興味深いものがある。

第五に、盆踊り唄などの踊り専用の唄がないことでもある。ただしこのことは富士山周辺一帯の民俗で、鳴沢村だけのことではない。なお昭和初期、山梨県下全体が木曾節を中心とした盆踊りの熱狂に席卷されたことがあり、鳴沢村も例外ではなかったが、一、二年で興奮は去り、現在その痕跡もないようである。

第六に、鳴沢と大田和の間で唄や曲節に差異があることである。一方でしか歌わない唄があり、同じ唄を一方は陽旋、一方は陰旋で歌ったりする。方言にも両部落間に違いがあるということであるが、江戸時代から一村を構成してきた二部落間に、こうした違いが見られるのは興味あることである。

以下、鳴沢村の民謡を種類別に分けて配列し、それぞれの唄について、解説、歌詞、楽譜を掲げる。歌詞、楽譜に

ついでには、次のような方式で採録した。

歌詞

- (一) 第一首は囃子言葉を含めた全体を揚げ、第二首以下は歌詞本文だけとした。
- (二) 囃子言葉のうち、囃子手のはやす分は括弧で囲んだ。
- (三) 方言はなるべくそのままに記載し、明らかに誤りと思われる言葉は訂正した。訂正不可能でそのままとしたものもある。
- (四) 歌詞の数が特に多い場合は、重要と思われるものから割愛した。

楽譜

- (一) 多数の演唱者の特長ある演唱の中で、代表的と思われるものを採譜した。
- (二) 音高は演唱の実音によらず、一般の歌いやすい音高に移調した。
- (三) 唱えごとのような旋律の変化の少ない唄は、楽譜を省略した。

本稿作成については、鳴沢村教育委員会による録音テープ及び調査報告書『鳴沢村の民謡とわらべ唄』ならびに数次にわたる代表的演唱者との対話記録を基本資料とし、一般文献を参照して取りまとめた。関係の方々への御協力を感謝する。

3 労作唄

労作唄は労働作業をする際に歌う唄の総称である。明治前期までわが国では産業への機械力の導入は少なく、ほとんどの作業は人の労力を注ぎこむことで行われた。人々の作業を統一するためまたは労苦をまぎらわすために歌われたのが労作唄で、農村では農耕のために歌われた唄が主になるのである。

鳴沢村では水田がないので水田耕作や稲作儀礼のための唄がないのは当然として、とうもろこし、麦、粟、稗、桑などの畑作とそれに関連する労作唄が全く採集されなかった。演唱の一老女が、「女は歌を歌ったが、男はいそがし過ぎて唄なんか歌えなかった」と述懐してくれた。標高千メートルの高冷地で、一戸当たり国中地方の倍になる耕作面積を、夏の短期間に耕作し収穫をあげる、という労苦はなみなみならぬものであったろうが、村の人たちはただ黙

々と働いていたのであろうか。

とにかく、畑作業の末端処理としての女性の白挽唄と承取唄のほか、村の共同的作業のための祝唄化した地搦唄、木遣唄が、現在のところ鳴沢村の労作唄のすべてである。

○地搦唄

往昔、家を新築するときには、カメ石（又はサンヨ石）という大きな石を、多人数の力で釣り上げては落として、柱の立つ場所を搦き固めた。これにはそうした物理的な効果のほかに、悪霊を土中へ封じ込めるといふ民俗信仰上の意味があったといわれる。その動作の拍子を合わせるために歌うのが地搦唄で、音頭取りが歌詞を歌い、手伝いの人たちが囃子を唱和して動作した。唄の目的からして、目出たい内容の歌詞が多い。地搦きのあとの上棟式の祝宴でも歌われ、やがて一般の宴席でも歌われるようになった。

河口湖周辺一帯で同じ唄が歌われている。本村では、鳴沢で陽旋で、大田和で陰旋で歌われているのが面白い。楽譜では両者を対照譜とした。

ㄇめでためだの この家の地搦ぎ一ナ

（ア ヨーイヨイ）

鶴と亀とが 舞い遊ぶ

サリトハ ヨーツク サンヨエー

（ヨイサノ サーノ サンヨエー

アーサンヨメ アーサンヨメ）

ㄇ差いた盃よ 中見てあがれ

中は鶴亀 五葉の松

ㄇ富士の裾野で 扇をひろた

扇やめでたい 末広で

ㄇお前百まで わしや九十九まで

ともに白髪の手 生えるまで

ㄇ富士のお山に 振袖着せて

奈良の大仏 婿にとる

○木遣唄

大木や大石を大勢で引き運ぶとき歌う唄で、指揮する音頭取が歌詞を歌い、大勢の引き手が囃子を唱和しながら引っぱるのである。神社仏閣などの大工事に行われ、目出たい決まり文句や即興の歌詞を歌うが、煩繁にあることではないので、祝い唄として伝わっている。鳴沢の木遣唄は、魔王神社の鳥居や萬霊等などの木石を村中総がかりで運んだときの唄と伝えられている。唄といってもメロディーはなく、七五の文句をリズムを刻んで強く唱えるだけであるか、楽譜は省略する。

ㄇウンヤラヤット 運んだ

今夜の荷物は 重たいが

そろたん引きで やっとくれ

(アー ソーロタイヤ ソーロータ アー ヨーイヨイ)

ㄇ木遣りの爺さん 祝い酒

大声かけ声 引っぱった

ㄇ家の隣の 婆さんは

心の細かな こまものを

おうしやれしやれと 引っ込んだ

村の有志の 焚き出しで

満腹ばらで 引っぱった

○白挽唄(アイヨード)

昔は、もろこし、そば、ひえ、からつびえなどを石臼で挽いて粉にして団子を作り、常食にしていた。白挽きは娘や嫁の夕食後の仕事とされ、昼働いたあとなので、眠くてつらい作業であった。白回しの調子をとって眠げさましに歌ったのが白挽唄である。若い娘のいる家へは若い衆が聞きつけて、からかい半分に手伝って夜遅くまで唄と作業が続いた。このアイヨードの囃子を持つ白挽唄は、船津、小立、勝山、長浜から精進でも採集されている。各地で多少の曲節の違いがあり、鳴沢村の中でも人により違いがある。楽譜には違いの目立つ二種の歌い方を採譜した。

ㄇ臼を挽きゃこそ この衆のそばよ

(アイヨード)

あいにや遠くで 拜むばか

拜むばか (アイヨード)

今宵会うとは 神々様の

お引きあわせか ありがたい

来るか来るかと 待つは夜は来ない

待たぬ夜は来て 門に立つ

富士のお山を 根こぎに欲しゆい

かわい男の つぼ山に

おれといじややれ ジラゴンノ丸尾

芋のこやし の 芝刈りに

○ 糸取唄

明治末年、鳴沢の清水みつる氏が実家の座繰製糸工場で、船津から来た女工が歌っていたのを聞き覚えて伝えたもの。恐らくこの女工が信州などの製糸工場で覚えて来たものであろう。仕事をしながら口ずさむ、小じんまりとした美しい唄である。

恋にこがれて 鳴く鹿の毛がヨ

恋の文よ書く 筆となる

機械工場は 愛鷹山の

馬じゃなけれど 飼い放し

歌いたくての 唄ではないが

辛苦忘れの ヤケの唄

あのや境野に 豆とそば蒔いて

まめでおそばで 暮らしたい

思うけれども 手が届かない

川の向うの さくら花

富士の裾野の茅野の中に

あやめ咲くとは しおらしゆい

そうと言われちや 眼鏡の紐で

かけるお耳が 痛ござる

どこでうぐいす 鳴くかと聞けば

かわい主さんの 唄の声

おれも行ききたや 甲府の機械

天下晴れての 糸とり

いやでござんす 新糸とりは

きれるきれるで 気もめる

4 祝唄

つい最近まで、言葉には「言霊」が宿っていて、古い言葉を唱えると吉い事が実現するという信仰が生きていた。そのため新築、婚札、誕生祝いなど慶事の際はもちろん、多人数の集まる席では、目出たい文句を連ねた祝唄を歌うことが、欠かせない習慣であった。現在でも、そうした考えが尾を引いていることは否めない。ただ大事をとるためか、祝唄の歌詞は全国共通で類型的なもので占め、奇抜な発想のものは見られない。

○ ナーヨイ

歌詞は五句型で、古風な構想、用語、語法で目出たい内容を述べている。極めて古いものであり、関東南部、甲信地方の五句型の唄と共通するものがある。ところが、曲節はまったく独特のもので、近県にも類似のものは見当らない。日本民謡のメロディーは音階上をなだらかに進行して切れ目を生じないのが特長であるのに、ナーヨイでは要所に跳躍的進行が現われ、非民謡的な感じを与える。こうした唄がどうして孤立的に鳴沢村に伝わって来たのか、ただ不思議というよりしかない。

唄そのものは純然たる祝唄であるが、後に座興唄や白挽唄に転用されて、そのための面白い歌詞が補充され、現在三十に余る歌詞が記録されている。『山梨の民謡』（山梨県教育委員会発行）には白挽唄として収められている。

ㄇめでたや家の ナーヨイ(ソレ)

家の棟に 咲いて候 ナーヨイ(ソレ)

黄金の枝が七枝

(黄金の枝が七枝)

ㄇめでたや家のお納戸に はえ藤で

丸けた銭が七丸

ㄇめでたや家の 縁げたに つばくるが

長者になれと さよする

ㄇめでたや家の お座敷に 朝日さし

夕日がさして 輝く

ㄇめでたいものは 芋のつる すねながで

葉広で 子供 繁盛で

〽めでたいことが 重なりて 嫁はとり

娘はよそに 嫁ごに

〽毎晩曰も いやなもの おかみさま

しんくるまやに つけ出せ

〽曰にきとめて 出てみれば 天竺の

星さえ 二人寝をする

〽お山にや石が いくつある 千五百

また千五百 ここのつ

〽お山にや弓が 五百丁 その中で

強い弓よ引くが わが殿

〽思いもよらぬ 伊勢みやげ 姉にや帯

妹にや 五尺手拭

〽さいじよに行かば 笠持ちちやれ おかねやま

もみその露は 身の毒

〇 餅搗唄

上棟式など祝いごとがあると、勝手の庭先などで餅搗唄を大勢で歌う中で、力自慢が餅を搗いて祝いの気分を盛りあげた。その意味で労作唄でなく祝唄の分類へ入れた。この唄は河口湖周辺で古くから歌われており、河口、大石、船津などで餅搗唄や地搗唄として採集の記録がある。鳴沢村では大田和だけに伝わり、鳴沢では歌わない。歌詞は五句型で目出たい文句が多い。曲節は陽旋と陰旋とが並行して歌われているので、楽譜には両者を掲げた。

〽めでたいものは 芋のつる
すねながで

〽おいろこやんの 馬だやら 上組に

桔梗橋の あぶとり

〽かんざしよ 三本 橋にかけ お若い衆

なかつたよと 渡らしよ

〽庚申さまに しのび込み 手を合わせ

御家内無病息災

〽西山ひらで 屋寝して 松茸に

さされて腰が たよたよ

〽曰挽き番の お夜食にや とじり豆

煎るとか娘を 貸すとか

〽お前とならば どこでも 今ここで

回りし曰の 蔭でも

葉広で 子供繁盛はんじよで

(アーホッチョレ ホッチョレ)

めでたい家いへのお屋敷に 朝日さし

夕日がさして 輝く

十五夜さまの 出どころは しますすき

三蓋松の かげから

5 座興唄

民俗学の教えるところでは、生活に余裕がなく酒の生産が少なかった時代、酒を飲む機会は年数回の祭りの日に限られ、人々が集まって飲むものとされていた。大きな杯を順に回して飲んだといわれる。当時から「さかな」という言葉は酒席の食物のほか、興をそえるための唄や踊りを指したというから、唄は昔から酒席のつきものであったのである。生活に余裕が生じ酒の生産がふえて飲酒の機会は次第に多くなって来た。当然座興唄の需要が増加し、旧来の祝唄の転用やその歌詞の増補だけでは物足りなくなり、都市から流れて来る技巧的、刺激的なやはり唄が歓迎されたのである。鳴沢村にも、そうした外来の面白い唄が、大量に大切に歌い継がれている。

○ ドッコイ (こちやかまやせぬ)

天保三年(一八三二)江戸で「こちやえ節」がはやり、全国へ広まったが、明治二年(一八六九)に再生し流行した。しかし、天保から六、七十年前の明和年間(一七六四〜一七七二)にもこちやえ節がはやった形跡がある(藤田徳太郎『近代歌謡の研究』)。明治二年に流行したこちやえ節は「お江戸日本橋」の別名で現在も歌われているので、歌詞、曲節とも確実であるが、天保の流行は歌詞の記録があるだけで、曲節はお江戸日本橋と同じと推定されているだけで確

証はない。全国各地に残るこちやえ節系の民謡の中で鳴沢村のドッコイは、天保流行以前の形を引き継いでいる可能性がある。

とにかく鳴沢では江戸時代から歌われていたことは確実で、演唱者の一人は天保生まれの祖母から習ったと話してくれた。歌詞は五句型で、ドッコイという唄の名称は「ドッコイ」というはやし言葉からきたものである。古風な歌詞が元唄として愛好されてきたようである。

ㄣどっこいしよと締めて 寝た夜にや

夜も更けちよ(コラ ドッコイ)

諸国の鳥も 静かに コチャ

諸国の鳥も 静かに

(コチャ かまやせぬ

かまやせぬ ドッコイ)

ㄣお前も見たか おれも見た お御嶽の

お神楽殿は 八ツ棟

ㄣお身延様は ありがたい おみやげに

榎たんぎりの 安売り

ㄣお江戸を通る お商人 梅すもも

御所柿ぶどう 青梨

○ 酒呑み座敷唄

手拍子で歌える調子のよい酒盛唄で、四句型の甚句だから歌詞は無数にあるし新作も簡単である。同じ曲節の唄は近辺では、河口の河口囃子、道志の道志甚句、秋山の秋山甚句があり、都留の機織唄にもこれから変化したものがあ

ㄣお前を待ちて 蚊屋の外 蚊に喰われ

七つの鐘の 鳴るまで

ㄣお坊の夜這い 闇がよい 月夜では

衣の袖が ちらちら

ㄣ身延の者は 声がよい よいはずだ

南天山の 水飲む

ㄣお前と色の はじまりは おだいやの

四つだて門の 石垣

ㄣお前かゆんべ 裏の戸を 踏みはずし

家内のお目を 覚まいた

ㄣ家内のお目は まだおろか お隣の

お目まで覚まし 気の毒

る。この唄の元は江戸の花街の三味線唄で、現在でも俗曲の二上り甚句、相撲甚句として歌い継がれている。これが街道筋へ流れて宿場宿場の女の騒ぎ唄となり、中山道筋の長久保甚句、塩尻甚句、甲州街道の吉野（神奈川県津久井郡藤野町）の甚句などが今も残っている。吉野から秋山へ入り各地へ散って行ったという経路が一応考えられる。

ㄣアー 思うけれども 手が届かない

(アイ ヨット)

川の向うの さくら花

(コラサツサー ヨイサツサー)

ㄣお前そのよに 酒ばかり飲んで

末の書きだしよ どうなさる

ㄣ惚れて通えば 千里も一里

いやで通えば また千里

ㄣいきな声して 人あし止めて

人が手を出しや 草のかげ

○ 伊勢音頭

何種類かある伊勢音頭の中の参詣節と称せられるもので、長い離子言葉のついたにぎやかな唄である。伊勢参宮をした村人がみやげに持ち帰ったものが、古くから宴席で歌われて来たようである。

ㄣ伊勢はナー 津でもつ

津は伊勢でもつ

尾張名古屋は ヤンレ 城でもつ

(ヤートコセ ヨーイヤナ

ㄣお酒飲まして 酔わせておいて

胸にあること 言わせたい

ㄣ酒の座敷に 踊り子のないは

寺に住職の ないごとく

ㄣ酒はもとより 好きでは飲まぬ

金の辛さで やけで飲む

ㄣ酒はよいもの 気を勇ませて

顔へもみじの 色を出す

アリヤリヤ コレワイナ

コノ ヨイトコセー)

〽伊勢へ七度 熊野へ三度

愛宕様へは 月詣り

〽お伊勢もどりに この子ができて

お名をつけましょ 伊勢松と

〇 ソレソレ

四句型の調子のよい唄で、宴席で歌うにうってつけの唄である。元は駿河の茶摘唄だったと伝えられている。資料によると、富士市と沼津市に「ソレソレ」の囃子言葉の茶摘唄が伝わっているが、同じ唄かどうか不明である。

〽昔思えば 今つまらない(ソレソレ)

ならぬかほちやに 手をくれて(ヤレヤレ)

〽お前今日いきや いつ頃帰る

二十日ごろ来る 来月の

〽好いた恋だが 来るわきゃないよ

確かわたしの 気のまよい

〽ござれこの町に 小間物売りに

来れば見もする 買いもする

〇 いちばもしんじょ

広い意味の数え唄で、明治時代から流行し全国で今も歌われているが、曲節は同じでも歌詞、歌材が各地で違っている。それに語路が主で歌意が一貫しない不思議な歌詞で、初めの「いちばもしんじょ」も何の意味かわからない。

〽お前どこ行く 北風吹くに

かわいよし女の 帯よ買いに

〽お茶のてんぐりもみゃ こうでがおきる

揉ませたくない わがつまに

〽おれといじややれ 駿河の国へ

行けば楽する 楽させる

〽どこでうぐいす 鳴くかと聞けば

かわいお前の 唄の声

各地の記録でも、「一山新上、一やもしんじよ、一わたしんじゆう、一羽も進上、一番もしんじよう、一はもせんじゆ」などと、筆録者によつてまちまちである。

鳴沢村の宴席では踊り手が座敷箒を持って、庭を掃くまね、三味線をひくまねなどして会衆を笑わせる人気の唄である。

ㄐ一ばもしんじよ わしや石よ持たねど

石やなりやこそ 石よ持つてまわる

わしや石よ持たねど

チャンコロリンと かんがいた

かんがいたの まんなかだ

ㄐ二ばもしんじよ わしや庭掃かねど

番頭なりやこそ 庭掃いてまわる

わしや庭掃かねど

ㄐ三ばもしんじよ わしや三味よ弾かねど

芸者なりやこそ 三味よ弾いてまわる

わしや三味弾かねど

ㄐ四ばもしんじよ わしや皺よらねど

年寄りなりやこそ 皺よつてまわる

わしや皺よらねど

ㄐ五ばもしんじよ わしや碁は打たねど

碁打ちなりやこそ 碁を打つてまわる

わしや碁は打たねど

ㄐ六ばもしんじよ わしや櫓は漕がねど

船頭なりやこそ 櫓を漕いでまわる

わしや櫓は漕がねど

ㄐ七ばもしんじよ わしや質よ置かねど

貧乏なりやこそ 質よ置いてまわる

わしや質よ置かねど

ㄐ八ばもしんじよ わしや鉢よ持たねど

植木屋なりやこそ 鉢よ持つてまわる

わしや鉢よ持たねど

ㄐ九ばもしんじよ わしや鍬持たねど

百姓なりやこそ 鍬持つてまわる

わしや鍬持たねど

ㄐ十ばもしんじよ わし銃持たねど

兵隊なりやこそ 銃持つてまわる

わしや銃持たねど

○ 安来節、その他

江戸時代地方の民謡が江戸などで三味線の手をつけはやり唄に作りかえられて流行し、地方へも広まったことがあった。明治に入ってからこの傾向が激しくなり、全国の有名な民謡はほとんどはやり唄化され全国へ広まった。東京では寄席の色物として人気を博し、花柳界でも芸妓が競って歌い、やや後になるが安来節などは専門の芸人と踊り子で劇場公演を行った。しかし、このはやり唄の民謡は、現代の民謡歌手の歌う民謡とはやや異質のものである。

鳴沢村には、このはやり唄の民謡が座興唄としていろいろ伝えられており、そのほか明治、大正期の新作のはやり唄も民謡化して残っている。これらは旅芸人、旅職人の往来や村人の交流圏の拡大によって持ち込まれたものである。ここには主要な唄の名称を挙げるに止め、歌詞、楽譜は省略することとする。

(民謡) 安来節、八木節、磯節、草津節、木曾節、おいとこ節
(はやり唄) 青島節

6 祭唄

祭唄は神事に歌う唄で、労作唄とともに日本民謡の源泉をなしている。鳴沢村の祭唄としてはまず太々神楽の中の音楽であるが、詳細は別節「民俗芸能」及び鳴沢村教育委員会編『鳴沢の太々神楽』に譲る。その他獅子舞の唄もあるようだが採集できなかった。次に雨乞唄を掲げる。

○ 雨乞唄

早魃のとき降雨を祈願するのは自然の気持ちである。鳴沢では、六斎講の人たちが中心になり、魔王天神社に百万遍の数珠をひろげ、数珠を繰ったり、笛、太鼓に合わせて雨乞唄を歌い降雨を願った。大田和では神楽講の人たちを中心に、組の代表者などが笛、太鼓を先頭に、雨乞唄を歌いながら村中をねり歩いた。

㊦アーメマンダラ ユンゴンヤイ

ゴーンゴーンと 降つとくれ

ここで降れば 豊年だ

三百年の豊年だ

天に雨は 絶えとうか

龍辰りゅうたつどんは 死んだーか

ここで降れば 豊年だ

ジャンジャコ ジャンジャコ

ジャンジャコジャン

デルンデー デルンデー

㊦アーメマンダラ ユンゴイヤイ

ゴーンゴン 降つとくれ

ここで降れば 豊年だ

三百年の 豊年だ

天に雨は ないどーか

胡瓜こりかぼちゃも南瓜なんかも カーラカラ

うらー死んでも ええどろが

かかあや がきや どうしるどろ

天に水あ 絶いとうか

なーぜ雨よ 降らかさない

上の山まで 降ってきた

これで命が つながるどー

7 語り唄

飴屋という商売は江戸末期に一般化し、明治から大正まで関東地方を中心に存在した旅の遊芸人である。もともと唄で人を集めて飴を売る大道商人であったが、後には唄の門付けが本業となり、飴は売らなくなったが飴屋の名称は残った。昔飴を売った痕跡として小旗を飾った盤台を頭に載せ、柄のついた薄い太鼓を打ちながら歌った。

鳴沢村へは吉田方面から来て、本栖方面へ抜けて行くのが多かった。人数は一人その他不定で、回って来る季節も不定であった。昼間は家々の軒先を歌って回り、夜は広い家へ泊めてもらい唄を聞かせた。娯楽の少ない時代だから当夜は部落中の老若男女が集まり、都会風の新しい唄や踊りをたん能した。唄好きの若者たちは一語一句も聞き洩らさじと耳をそばだて、中には筆記する者もあった。そして後日覚えて唄を歌いあうのが、何よりの楽しみであった。

たという。

飴屋が昼間門付けするとき歌うのは道中唄と呼ばれ、やはり唄や民謡などの短いものであった。夜の興行では長短さまざまの唄を聞かせたが、人々が期待したのはくどき節であった。くどき節は七七七音を単位とした曲節を何回でも繰り返して、「ヤンレー」という囃子言葉で結んで一段を終る。一段だけで完結する唄は単に「くどき節」と称し、長い唄は何段かに分けて語るので「段物だんぶつ」と称した。

前述のとおり、くどき節は音楽的には同じ曲節を繰り返すだけの単調なものである。重点は語られる話の筋と表現法にあった。くどき節の歌詞は文字化してみると拙劣極まる悪文であるが、昔時、会場を埋めた人々の耳には魅力溢れる名文句であった。さらに巧妙な語り口は人々を完全に陶醉させ紅涙を絞らせたのである。

当時、好評を博した段物として、俊徳丸、石童丸などの伝承物、鈴木主水もんど、お糸左伝次などの心中物、八百屋お七、佐倉宗五郎などの世話物が記憶されている。

○道中節

詞型は七五七五七五の七句型（五句型の変型）で、中間に「コチャ」という囃子言葉が入っており、正にこちゃえ節の一種である。明治二（一八六九）年頃流行し、現在も「お江戸日本橋」として歌われているこちゃえ節と全く同型で、ただ最後の囃子言葉が違っているだけである。従って、お江戸日本橋の二、三番の歌詞が次掲の四、五番目の歌詞として示すように、そのままに使われている。しかし、曲節は全然違ったもので、お江戸日本橋の陰旋に対し陽旋で、繊細な旋律とリズムからなる江戸の唄である。

道中節という名称は、飴屋が街道沿いに門付けする際に用いる唄の呼称のようであるが、その際にこちゃえ節のような道中唄（東海道などの宿駅の情景を順に詠み込んだ唄）が主に歌われたことから出た名称かも知れない。三田村鳶魚

は『瓦版の流行唄』の中で、お江戸日本橋とは別の「東海道こちやえぶし」を紹介したうえ、「だがコチャエーは幾種にも唄われた、我々が幼時の記憶にも二、三種あつたように残つて居る」と記しているが、この道中節もその一つであろう。今となつては、まことに貴重な唄である。

ㄨ石川ナー 五右衛門は 釜の中

五郎市や 火の中水の中 いとやせぬ

ハ コチャ いま一度

かちやんの 顔見たや

(アライ ヨイトナー コライヨー)

ㄨ京の飴屋さんは よい男 よい飴屋

麻裏草履に めくの足袋

唐棧の着物で 飴屋する

ㄨ黒の小袖に 腕まくり 定九郎

縞の財布に 五十両

「ありがたし かたじけのう

この金持つて 島原へ」

そうじゃよう そうじゃと 定九郎は

いただく途端の 二つ玉

忠臣蔵の 五段目よ

ㄨ恋の品川 お女郎衆に 袖ひかれ

乗りかけお馬の 鈴が森

大森細工の 松茸を

ㄨ六郷渡れば 川崎の 万年屋

鶴と亀との 米饅頭

神奈川急いで 保土が谷へ

〇くどき節

狭義のくどき節は広義のくどき節の中で、一段で完結する短いものである。くどき節の歌詞の内容は滑稽なもの、風刺の利いたものなどである。継子いじめや心中話など深刻な段物の間に、趣向の異なつたピリッとしたくどき節を挟むことで、語り全体の効果を高めたに違いない。なお、餌刺と百古もず(鳴沢では「むど」という)の話は人気のある題材で、関東の殿さ節や飛驒の古代神などの代表的歌詞となつている。

「うらが隣じや よい婿もらつて

医者で番匠ばんじよで 大工で左官しやかん

人が頼めば 白の目も切るし

それで足りないといふ 餌刺えしをならう

餌刺えしよ習なうにや 元手がかかる

白の脚絆きゃはんに よつじの草鞋わらじ

腰こしに弁当箱べんたうばこ 手に竿ささげて

裏うらの細道こまぢ 忍しのんで行きやる

裏うらの山椒さんしょうの木に 小鳥こどりめが一羽

それを刺すとて 竿さ取りなおす

竿さは三間さんかん 小鳥こどりめは高い

そこで小鳥こどりめの ゆいぐさ聞きけば

おまい餌刺えしか わしやむどの鳥

御縁ごゑんあるなら また来てお刺さし

○おくめさせんじ

段物は口説節の精髓で、中でも心中物は人気があった。おくめさせんじはその心中物の一つである。この長い口説は小林もとさん（明治三十三年生まれ）の演唱であるが、もとさんはおとぎさんから習い、おとぎさんは館屋から覚えたとのことである。ただ残念なことに、語り始めの部分（主人公の紹介の部分）を忘失している。そこで他地の同じ口説きを調べると、次のようになっていた。

①山梨県南都留郡道志村の臼挽唄（もとは「館屋口説」と考えられる）では、大阪道頓堀の豪商瓦屋与右衛門の世継で左伝次十七歳（伊藤堅吉『道志七里』）

②新潟県新発田市の「替女かひめ口説」では、甲州甲府の豪商かわ屋の与右エ門の世とりの左伝次十六歳（新発田市文化財調査審議会『阿賀北と替女替女唄集』）

③富山県東砺波郡上平村の「盆踊口説」では、甲州甲府の豪商佐原与右衛門の総領の左伝次十五歳（黒坂富治『富山県の

民謡』）

となつてゐる（こうした相違はそのほかいたるところに見られる）。

これで知られるように、口承文芸と称せられる、文字に書かれることなく口から口へと伝えられて来た民謡などの伝承の過程における変化変容のすさまじさは驚くべきものがある。しかしその一方で変化を許さない枠が存在し、それは結局聴衆が支配していることを思い知らされるのである。なお、この口説の素材となつた事実の有無の探索も甲府が舞台という口説もあるので今後の課題である。

（不明）

㄀月の八日が お薬師まつり

薬師まつりに おくめを見初め

どうか落として 女房にやせんと

家へ歸りて 文よしたためし

文の文句が 三十と二分で

これを封じて おくめに送る

おくめ その文よ 手にとり見れば

さぜん方より 恋路の文よ

いくら私が 養女だとても

舟の中では 大舟小舟

小舟なりとも のまればしない

石のうちでは 大石小石

小石なりとも 腹立ちやしない

返事やらずに そのままおけば やんべー

㄀待てど暮らせど 返事が来ない

文で落ちなきや 忍んで落とす

さらば今宵は 忍びの姿

おくめ屋形は 大家の暮らし

夜となりたら 大門締めまり

裏へまわりて 玉垣よ越して

つぼの庭から 書院とよんの座敷

書院座敷の 番頭を頼み

番頭手引きで 一間へ忍ぶ

一間忍べば 七間も八間も

八間も忍べば すかしの障子

すかし障子で すかして見れば

右と左が 両親さまよ

あいに寝たのが おくめと見ゆる

そこもそろそろ 忍んで参る

おくめお寝間と はやなりければ

おくめおくめと 小声ここいに呼べば

おくめやはいとて はや目をさます

鳥も通わぬ わたしの寝間へ

迷いまへんか 悪事じゃないか

文をつくした さぜんでござる

返事やらずに おいでは無用と

ここでさぜんじ 男であれば

これさよく聞け よく聞かしらんせ

あまた栗の木 くるみの木でも

人が見込めば 落とさにおかぬ

人が落とさにおかぬ ひとりで落ちる

それに續いて 川端柳

水の流れを それ見てまねく

親も許さぬ この下帯を

今宵あなたと 解ときますからにや

二世も三世も その末までも

妻と定めて 互いの契り

親の耳へも そろそろ入る

すぐに隣の みなと屋さんへ

嫁にもらわれ 嫁入びたく

どうかこのこと さぜんじさんに

一目話して 聞きたいものと

門の外ぎいと 忍んで出来て

向う眺めりや さぜんが参る

一目見るより 手まねきいたす

いそぎ走りと さぜんが参る

堅い手おうわ かけられました

そこでおくめの 申することに

すぐに隣の みなと屋さんに

嫁にもらわれ 嫁入りびたく

それを聞くより さぜんじさんは

それじゃこれから 心中がよかる

家へ歸りて 心中びたく

そこでおくめの 家へと入られました やんべー

〽もはやその夜も 夜中の時とき分

おくめお寝間を そろりと抜けて

祝儀びたくを そろりと出して

下にめすのが 白縮びやくしゆく細こよ

間にめすのが 緋の縮ひのしゆく細こよ

上にめすのが 納入れの小袖

帯ははやりの 献上博多けんじょうはかた

八重とまわして きりりと締めて

足袋は白足袋 麻裏草履

いでていくのが あじまや河原

あじま河原の 真中どこで

さぜん遅しと 待ちうけしやんす

待てば間もなく さぜんも参り

おくめはやしと 一礼述べれいぶる

そこでさぜんじ 羽織りをぬいで

八重とたたんで 畳みといたし

鹿の巻き筆 巻き紙よ出して

思うことは 皆書きおいて

おくめどうだと 声張りあげりや

わたしや今年で 十六才よ

花のつぼみも 開かで終る

あたら近所の つれ友達に

茶湯香花 水向よ頼むちやとうかうはな みずむきよたのむ

(以下不明)

花のおくめを ひとさし？

かえず刃で 我が身の自害 やんべー

〴〵もはやその夜も 明け方なれば

明けの烏が 西から東

これを見る人 けんしゅへ願う

けんしゅ願えば けんしゅや役人

けんしゅ役人 傷あらためて

これはところの おくめとさぜん

親の手許に お渡し申す

これら二人を 夫婦となして

ひとつところに 葬りまする

死出の山をも 三途の河原

ともに手を引き 小唄で急ぐ やんべー

地 塙 唄

(鳴沢)
めでたーめでたーのこのやーのじぶきナ(アヨイヨイ)

(大田和)
めでたーめでたーのこのやーのじぶきナ(アヨイヨイ)

つとーかめーとーがまーあいあそぶサリトハヨツク
つとーかめとーがまーいあそぶサリトハヨツ

ーサンヨエ (ヨイササーノサンヨエ アーサンヨメアサンヨメ)
ーサイヨエ (アヨイサノサーノサイヨエ アーサンヨメアサンヨメ)

白 挽 唄 (アイヨグ)

(A)
うすをひきゃこそーこのしーのそーーばで(アイヨグ)
あいにやとおくでーおがむばーかーおがむばか(アイヨグ)

(B)
くるかくるかーとまつよーはこーーない(アイヨグ)
またぬよはきてーかどにたーつーかどにたつ(アイヨグ)

糸 取 唄

ハア こい に— こが れ て—なく—し か
—の けが—よ— こいの—ふみよ—かく—ふでと なる

The musical notation is in 2/4 time. The melody consists of eighth and quarter notes. The lyrics are written below the notes, with hyphens indicating long notes or breath marks.

ナ — ヨ イ

めでたや うちのナ — ヨイ(ソト)や—の むね にさいてそろ
ナ — ヨイ(ソト) こが ね の えだが ななえだ (こが
ね の えだが ななえだ

The musical notation is in 2/4 time. The melody features a mix of eighth and quarter notes. The lyrics are written below the notes, with hyphens indicating long notes or breath marks.

餅 搗 唄

(A)

めでた — いも の — — は いも — の — — つ
 る — すね な が — で は び — ろ — で こ
 ど — — も は — ん — — と — — で — (ア— ホッショレ ホッショレ)

(B)

めでた — い う ち — — の お ざ — し — — — き —
 に — あ さ び さ — し ゆ う — ひ — が き
 し — — — て か — — が — — — や — く — (ア— ホッショレ ホッショレ)

ドッコイ (こちやかまやせぬ)

どっこいよと — し め て ね た — よ る に や — — — よ も ふ け
 ちよ(コラドッコイ) しよくの一 と り も し — ず に に コチャ
 しよこ一くの一 と り も し — ず — か に (コチャ
 か ま や せ ぬ か ま — や — せ ぬ — ドッコイ) .

酒 呑 み 座 敷 唄

ア おもひけれ ど も てが とび か な い
 (アイヨッ) かわの むこうの さくら は な (コブサッサアロイサッサト)
 ア おおれその よ に さげ ば か の ルーで
 (アイヨッ) すえの かきだしょ どうな さ ー る (ウツササー ヨイサッサト)

伊 勢 音 頭

いせ は ナア つで も つ は
 ーい せ ーでも ーつ ナ (アコリヤコリヤ) おわり ーナ ー なごー
 ーや ー は ー ヤンレ ーし ろ ーでも ーつ ナ アコレカラ
 ーヤ ー ト コ ーセ ーノ ーヨ ー イヤ ナアリヤ ー
 コレワイ ーセ ササ ヤレサ ノ セ ーエ ー

ソ レ ソ レ

Two staves of music in 2/4 time. The melody is simple and rhythmic, with lyrics written below the notes.

むかしおもえ—ば—いまつ—まら—ない—ソレソレ
ならぬ—かば—あ—に—てをく—れ—てヤレヤレ

いちばも しんじょ

Two staves of music in 2/4 time. The melody is more complex, featuring eighth and sixteenth notes. Lyrics are written below the notes.

いちばもしんじょわしいしやもたねど—いしやなりやこそいしよってまわる
わしいしやもたねど チャンコロリンとかんがいたかんがいたのまんなかだ

雨 乞 唄

Five staves of music in 4/4 time. The melody is simple and rhythmic, with lyrics written below the notes.

あめマンガラ ユンゴン ヤイ ゴーンゴン と ふっとくれ
ここでふれば ほうねんだ さんびやくねんの ほうねんだ
てんにあめは たえとう か りゅうたつ どもは しん どう か
ここでふれば ほうねんだ ジャンジャコジャンジャコ ジャンジャコジャン
テ ルン デーン テ ルン デーン

道 中 節

いしかわな ーごえーもん は ーかまーのーな か ー ーころ
 いーちやーひのな かーみずの な か ーいとやーせぬハコチャー
 アイまい ちーどーかあーか ちゃんの ー ーか おみーた や ア
 ラ イ ヨ イト ナ ーコライ ヨ ー

く ど き 節

(1) う ら が い と な し り じゃ よ い わ に も の と っ り こ い し ゃ
 (7) お ま い と な し り じゃ よ い わ に も の と っ り こ い し ゃ
 ば ん じょ だ いた く に で し ゃ か ん お さ し ゃ ん べー

お く め さ ぜ ん じ

(1) つ き の な お り が も お ば く し ま つ り ね や く し
 (7) こ い し の な お り が も お ば く し ま つ り ね や く し
 ま つ り に お こ の め を ま み そ め お け ば や ん レ

第八節 わらべ唄

1 はしがき

「わらべ唄」という言葉は、原意としてはわらべの唄であつて、子供たちが日常の生活の中で歌っているすべての唄を指す言葉であるべきである。しかし現在では「わらべ唄」に特別の意味を持たせており、子供たちが歌っている唄の中で昔から伝えられて来た唄——伝承的な唄だけを指すことになっている。

ここに収めた約五十編の鳴沢村のわらべ唄は、十数名の女性の方々の演唱テープから採録したものである。演唱者は現在すべて七十五歳を超えていられるので、その幼少時に当たる明治末から大正初期の子供たちの唄ということになる。その大部分は江戸時代以降の伝承的な唄であるが、当時としてまだ伝承的な唄といえないような新しい唄も含まれているようである。しかし、時はすべてをわらべ唄にとり込んで、淘汰や改変の流れに任せただけである。

これらのわらべ唄が、特に戦時、戦後の激変の時代を経て、現在の子供たちにとどの程度に歌い継がれているか、明らかにしておきたいことである。しかし、そのためには組織的な現地調査が必要で、外来の一筆者のできることはない。別の機会を得たい。

わらべ唄の一つ一つは、江戸、東京その他の地で歌い出されたものが伝えられたことは明らかで、小さな相違点があつても地域内の村々で共通して歌われている。一つの村だけの独自のわらべ唄はないといつてよい。むしろ、広い地域で共通して歌われていることが、わらべ唄であることの要件であるといえるようである。

鳴沢村のわらべ唄の集録の方針は次のとおりである。

- 一、この集録は、鳴沢村教育委員会による録音テープ及び報告書『鳴沢村の民謡とわらべ唄』（昭和六十年三月発行）を基本とし、一部演唱者との対話や一般資料で、補充した。
- 二、唄を十三に分類して配属し、各唄につき名称、歌詞、楽譜、解説を記した。
- 三、分類は、一般の分類に従った。子守唄はわらべ唄ではないという考え方もあるが、分類の一つとした。
- 四、名称は、歌詞の歌い出しの言葉とした。
- 五、歌詞は、

- (1) 村内に異なる歌詞があるときは、標準的のものを掲げ、他は〔類歌〕として後に掲げた。他地で参考になるものは、解説でふれた。

- (2) 歌詞の中の方言はそのまま掲げたが意味のとりにくいものは、共通語で記した右側にふり仮名として方言を掲げた。

- (3) 毬つき唄などで覚え違いで歌意が不明になっているものは、できるだけ正確な形に復元した。

六、楽譜は

- (1) 演唱の音高によることなく、歌いやすい単純な調号の譜面に統一した。

- (2) 大多数の唄はわらべ唄音階で、音楽的に特長のないものである。従って一部の短い唄は、楽譜を省略した。

七、解説は、唄の来歴、歌われ方や遊び方、他の唄との関係など、興味のある事項を簡単に記した。

2 鬼あそび唄

鬼あそびは、多勢の子供と威力を持つ一人の鬼とで成立する。もともと神社仏閣などの鬼追い行事に少年を参加させたのに始まるといわれるが、時代とともに新たな工夫が加えられていろいろな鬼あそびが成立した。

中国的、仏教的な死、悪などを象徴する「鬼」という漢字と習合する以前の「おに」は、人々の身近に出没するものと親近感のある存在であった。鬼あそびは他の民俗的行事の場合と同様、この古いおにとの交渉の演劇である。とにかく、鬼あそびは子供の遊びの中で最も古い来歴をもつものである。

○鬼ごっこするもの

ㄱ鬼ごっこするものよっといで

鬼ごっこ仲間をつるとき、一人が人指し指を立てて歌う。「鬼ごっこ」を「かくれんぼ」などと替えると、ほかの遊びにも使える。全国共通の唄である。

○ジャンケンポンよ

ㄱジャンケンポンよあいこでしようよ

〔類歌〕チツチチーよ あいこでしようよ」チツチクチーよ あいこでどんよ

鬼ごめのための神聖な方式であり、一種の占いである。後に物事の決着を決める方法となり、さらにこれだけで単独の遊びとなつた。この行為を「ジャンケン」あるいは「ジャンケンポン」といい、大田和では「チツチク」と称した。

○なゝかのなかの

ㄱなゝかの中の おんぼあは

なぜ背が ちっくいな

菜種に もまれて

それから背が ちっくいな

うしろの正面 だれ

〔類歌〕中の中の 弘法大師、なで背が ちっくいな、運動せぬから ちっくいな、うしろの正面だ れ」おぼーづっこ

こうづっこ、なぜ背が ちっくいな、運動せぬから ちっくいな、菜種に もまれて、それで背が ちっくいな

両手で目をふさいでしゃがんでいる鬼の回りを、手をつないで回りながら歌い、歌い終わつたところで止まってしやがむと、鬼はうしろの正面の子供の名をあてる。あたるとその子供が代わつて鬼になる。江戸時代には広く歌われ

ていた。「おんばあば」のところは、類歌や他地の唄で「弘法大師、小仏、小坊さん、地藏さん」などと歌われており、背の低い理由は「仏の飯よ食って、親の逮夜たいやに魚食とって、一杯飯よ三度食って、菜種にもまれて、運動せぬから」などとなつている。もとは大人の宗教的行事の物まねであつたのが、だんだんと合理化、近代化されて来たことがわかる。

○かごめかごめ

ㄨかごめ かごめ

籠の中の 鳥は

いついつ 出やる

夜あけの 晩に

鶴と亀が すべった

うしろの正面 だあれ

遊び方は「中の中の」と同じである。これも江戸時代から歌われ、全国に類歌がある。もとは二人の子供が向かいあつて手で作つた門をくぐる遊びで、「かがめかがめ」と歌つたのが「かごめかごめ」に転訛したという説がある。

○坊さん坊さん

ㄨ坊さん坊さん どこへ行く

鬼わたしは田んぼの稲かりに

わたしも一しょに 連れてって

鬼お前が行くと 邪魔になる

カンカン坊主の くそ坊主

うしろの正面 だあれ

遊び方は「中の中の」と同じだが、一同と鬼と問答するところに特長がある。全国に類歌がある。

○世界の唄

△世界の形は いかなるものぞ

丸きものにて このとおり

そして世界は まわるものにて

一日一夜に ひとまわり

またそのうちに

大きくまわれれば 一か年

年をわかちて 四季という

春 夏 秋 冬

春はこずえに 花咲きみちて
しかはあれども ここにひとの
憂いとなるは 東より来る山嵐
さつと一吹き 吹き来るときは
花をさそって 散りうせぬ

遊び方は「中の中の」と同じである。この唄はもともと明治開化期の学校唱歌であることは明らかである。

○ひとりふたり

△ひとりふたり かんめの子

なかでとって どうぐそ

梯子の下の 糞しゃらい

とってなめる 千次郎

菜葉ちぢばへつけて かいでみろ

〔類歌〕ひとりふたり かんめの子、中でとったら 千次郎、梯子の下の 糞しゃらい、とってなめる どうぐそ、箸につけてなめてみろ、茶碗へ盛って 食ってみろ、うまくてうまくて 馬のけつ

「たけっこ」といって、たけ鬼になった子供はこの唄を歌って、他の子供にたけるために追いまわした。また列を作って並んでこの唄を順に歌い、最後にあたった子供が列から抜けていく遊びもあった。全国にこの類歌があつて、人に悪態をつくときにも歌われた。

○いっちくたっちく

いっちく たっちく

たのやま いそせに

あのねに このねに

ばんちょ

一同の草履じょうろを脱いで並べておき、唄にあわせて触れていき、終わりに当たった草履を抜かしていった。「いっちく たっちく」という意味不明の言葉で始まるこの唄は、江戸時代からあり、各地で鬼きめのもととして歌われている。なお、多分この唄の後に続く唄だろうということで、次のように歌っていた。

はたけの中の 桜は

つぼんだか 開いたか

ようようよまの カラスが

しずくを手に持ち 行列

さむらいとつて みようぬける

3 子とり唄子もらい唄

子とりはいろいろある鬼あそびの一種で、子もらいは子買いともいい、子とりからの変形と考えられている。子とりは激しい動きが必要で、主として男子向きとなっているが、子もらいは対話本位で女子向きである。

○しりからとつたら

ㄱしりからとつたら くーれんじょ (くり返し)

一人が鬼になり大きい子供が親になり、他の子供は親から順に帯を握って縦に列になる。鬼はまわりこんだり、はずしたりして、列の最後の子供をつかまえようとする。親は鬼の前に手を広げて立ちほだかり子をかばい、子はしつかりつかまりながら右に左に逃げまわる。古くからある遊びである。

○大かん小かん

ㄱ大かん小かん どの子を欲しい

ちよいと見て あの子

あの子じゃ わからん

この子を欲しい

この子じゃ わからん 名は何と申す

○○と申す

何よくれて 育つ

砂糖に饅頭

そりや虫の毒よ

〔類歌〕(1)以下を次のように歌う。「櫛と手箱を買ってやる、まだまだやらぬ、天竺二本買いまして、まだまだやらぬ、富士の山ほど金をかけてやりまして、そんならやりまして」(2)以下を次のように歌う。「そんならあげまして、筆筒長持針小箱、それだけ添えてやるからにや 二度と再び帰るなよ

二組に分かれ横一列になって手をつなぎ、互いに向かい合う。各組の代表がジャンケンをして、負けた方から先に歌いながら前進する。相手組は同時に後退し、貰いたい子供を指定して、歌問答をつづけてその子供を貰い、次に立場を交代する。子もらい遊びは全国にあるが、大かん小かんという歌詞は中部地方だけのようである。

一の膳で買いましたよ

まだまだ やらぬ

二の膳で買いましたよ

まだまだ やらぬ

三(1)の膳で買いましたよ

まだまだ やらぬ

富士の山ほど 金をかけてやりまして

そんなら やりまして

4 縄とび唄

縄とびには、ひとりとびと大勢とびがある。ひとりとびは、止まるとんだり、走るとんだりしながら、いろいろな技巧的なとび方をする。大勢とびは、二人が長い縄の両端を持って動かし、大勢の子供を一人づつか、大勢一諸にとばせる。縄は半円に揺するか、円形に回すかする。大勢とびの場合は縄とび唄が歌われる。

○大波小波

ㄨ おおなみ こなみ

くるりとまわって まーたいだ

〔類歌〕 おおなみこなみ、くるりとまわってねーこの眼

大勢とびの唄である。縄の持ち手は「大波小波」で波のように左右に揺り、「ぐるりとまわって」丸く回して波にもどす。

○郵便ホイ

ㄨ 郵便ホイ 走らんかい

もうかれこれ 十二時だ

お上の御用で エッサッサ

〔類歌〕 郵便ホイ 走らんかい、もうかれこれ 十二時だ、学校の生徒らが、お上の御用で エッサッサ エッサとお家へ帰るところ

5 体あそび唄

からだ
体だけで遊ぶ激しい遊びの唄である。

○鯉の滝のぼり

ㄨ 鯉の滝のぼり

鯉の滝のぼり（くり返し）

二列になって向かい合って手をつないだ上を、一方の端から一人が腹ばいになって上がり、唄に合わせて揺りながら他方の端へ送っていく。終わった者は二人で手をつないで続き、順にこれを続ける。全国的に行われる男子向きの遊びである。

○おしくらまんじゅう

△おしくらまんじゅう

むされて 泣くな

泣く子は できる

寒い日は日だまりの校舎や壁によりかかって並び、横に押しっこすることで体が暖まった。昔からあった唄で、「押しくら申そ」がなまって「おしくらまんじゅう」になったという。

6 手あそび唄

遊び道具の少ない時代、指や手も遊具であった。家々に子女の数が多く、室内で過ごすようなときは、指遊び、手合わせ遊びなどは自然に行われた。

○子供と子供と

△子供と子供と けんかして

子供のけんかに 親が出て

なかなかすまぬと おっしゃって

ひとさんとひとさんと たちあつて

そこで薬屋が とめました

〔類歌〕子供と子供とけんかして、親さん親さんよっちゃって、なかなかすまぬとおっしゃった、薬屋さんがとんできて ちょ

いととめた」子供と子供とけんかして、子供のけんかに親が出て、なかなかすまぬとおっしゃって、ひとさまひとさまよっちゃって、くすりや二人でばいとすまいた

左右の手のひらきを向かい合わせ、「子供と子供」で小指を合わせ、以下、親指、中指、人さし指、薬指と順に合わせる。

○とんとんとなりの

ㄮとんとんとなりの じいさんが

綱引き引いて ぎんたまつぶいて

はかりにかけたら 三百匁三百匁

演唱者は遊び方を忘れたが、おそらく、肘ひじをげす板の上でトントンとたたき、すかさず、手首の骨や指の関節を唄に合わせて板に当て、音を出す遊びではなかったかといっている。

○かたどんひじどん

ㄮ肩かたどん 肘ひじどん

手っ首 手の平

きゆうすけ きたろう

せーなが びしゃもん

ちっくりさん

肩、肘、手首、手の平、親指、人指し指、中指、薬指、小指を、歌いながら順にさわっていく遊びである。

○ちゅうちゅうたこかいな

ちゅうちゅう たこかいな

親指と人指し指で丸を作る。一人が唄に合わせて人指し指を丸に入れていき、最後に当たった人が抜けていく。各

地で歌われているが、唄を五つに刻んで、おはじきなどを二個ずつ計十個数えるのに歌う。

○せっせっせ

ㄨせっせっせ こらこいこい

青山土手から

白い蝶々が 三つつみつ

そのあと女学生が

袴はかまはいて 靴はきはいて

スッポロボンの ポン

二人向かい合つて唄に合せて、手をとりあつてゆるする、手を三つたく、相手と手の平を合わせる、という動作をくり返し、最後にジャンケンをする。大勢のときは、勝つた者同志、負けた者同志でくり返す。

7 お手玉唄

お手玉遊びにはツキダマとナゲダマの二種類がある。ツキダマは座つてする遊びで、床上の手玉を唄に合せて投げ上げたり、受けたり、つかみ上げたり、落としたりして、規則正しく複雑な技を競う遊びである。ナゲダマは一人または数人の間で、唄に合せて手に持った手玉と投げ上げた手玉を機敏に交換し合つて技を競う遊びである。女子の遊びである。

○おえべっさまと

ㄨおえべっさまと いう人は

一に俵たわらを ふんまいて

二でにっこり 笑つて

三で酒よ つくつて

四つ世の中 よいように
五つで泉の 湧くように
六つで無病 息災に
七つで何事 ないように
八つで屋敷を ひろめて
九つ小蔵を ぶったてて
十で徳利 納めて

ナゲダマ遊びの唄として歌われた。全国的に同類の歌があるが、毬つき唄や民謡として歌われる例もある。「大黒さまという人は」と歌い出すのが普通である。

○おさらい

ㄱおさらい

おひとつ おひとつおろして おさらい
おふたつ おふたつおろして おさらい
おみつつ おみつつおろして おさらい
おみんなの おさらい
てとけけ てとけけ てとけけおろして おさらい
おはさみ おはさみ おはさみおろして おさらい
おちりんこ おちりんこ おちりんこおろして おさらい
おひざか おひざか おひざかのだりだり
なかよせ しもよせ さらりこ てーすけ しもつけ
やっちょない やっちょない やっちょないおろして おさらい

おてつぶく おてつぶく おてつぶくとんぎの おさらい
ひるひる こぜん
ひるひるひるひる とんぎりの おさらい
おうまのはねかい はねかい はねかいとんぎの おさらい
おきそで おきそで ゆかけておろしておさらい
おひじ おひじ ゆかけておろして おさらい
おてばた おてばた ゆかけておろして
おてばたの おさらい
小さい川 ござんせ

小さい川 ござんせ

大きい川 ござんせ

大きい川 ござんせ

大きい川 ござんせのおさらい

小さい山 のぼれ

小さい山 のぼれ

小さい山 のぼれの おさらい

大きい山 のぼれ

大きい山 のぼれの おさらい

ツキダマ遊びの唄である。奇妙な言葉の一つ一つに手玉の扱い方が定められている。全国各地に同類の唄があるが、言葉の使い方は千差万別である。

8 羽子つき唄

羽子つきは正月の遊びとして古くから行われた。最初は男女入り交じって二組で打ち合う追羽子であったが、やがて続けてつく数の多さを競うようになり、主として女子の遊びとなった。演唱者の思い出によると、大田和では羽子板一式を売る店があったが、鳴沢では、父親に板を削って羽子板を作ってもらい、羽子は家人に内緒でクレヨンを丸め、鶏の羽をつけて自作したこともあった。

○正月門松

〽正月 門松

二月は 初午

三月 ひなさん

四月は 釈迦さん

五月の おのぼり

六月 天王

七月 七夕ななは

八月 八朔はつし

九月の 菊月

十月 えびす講

霜月 帯解おびと

師走の 餅つき

丁度一年と

長く突き続けられるときは唄をくり返したが、風が吹くので途中で落とすことが多かった。この唄も全国で歌われているが、土地土地で月の行事に違いがある。

○お月のうのう

お月のうのう 神のうのう

何の木を 切り申す

梅の木を 切り申す

梅の木の下に

女郎と 殿と

髪よ梳りけんず 化粧けぼって

どこへ ござる

信濃へ ござる

信濃の 道に

尾のある 鳥と

尾のない 鳥と

あっち向いちやピーククチャ

こっち向いちやピーククチャ

ピーククチャの お寺に

屁へっぴり小僧が 居てして

屁をひとつ ひったらば

お小僧さんが 驚いて

蚤のみにくつわを おつばめて

虱しむに槍やりよ かつがせて

鎌倉街道 のり下す

9 毬つき唄

羽はね子ねつきや毬つきに歌ったというが、奇妙な唄である。

毬つきは古くからあつたろうが、子供が毬をついて遊ぶようになったのは、木綿が普及して糸毬が作れるようになった江戸中期以後である。ゴム毬は明治三十年代には日本に入ったが、農村では大正の初めごろでも手に入らなかつた。この唄を演唱してくれた人たちも、その少女時代はまだ綿に糸を巻いて作った手製の糸毬をついて遊んだのである。

毬つきは、足を使つたり、手の甲へ受けたり、からだを回転させるなどの技巧を使つたが、長くつき続けることが

大切であった。そのためには長く続く唄が必要になり、いろいろな物語の唄が歌われるようになった。それでも足りない、別の唄を適当に継ぎ足して歌った。そのため、物語の筋が一貫しないような唄が今でも伝わっている。

○正月えー

ㄣ正月えー 障子あければ 万才まんざいの
つづみの声こゑやら 唄の声 サー唄の声

ㄣ二月えー にんでもんでの 寺参り

明日は彼岸の 中日だ サー中日だ

ㄣ三月えー 桜花より ひーなさま

飾かたって見事な 内裏ないり様 サー内裏様

ㄣ四月えー 死んでまた来る お釈迦様

竹の小柄こびしやう杓しやくに卯木うつき花 サー木卯花

ㄣ五月えー ごんごんはやりの 前掛まへかかを

正月掛けるとして 取っておいた サー取っておいた

ㄣ六月えー ろくに田の草 取らないで

前掛まへかかないとて 腹が立つ サー腹が立つ

ㄣ七月えー 質ひらを出すやら 受けるやら
ランチクセンパン 最中だ サー最中だ

ㄣ八月えー 蜂に刺されて 泣いて来た

何なにとお薬くすりや あるまいか サーあるまいか

ㄣ九月えー 草の中にも 菊がある

通る子供の 目にかかる サー目にかかる

ㄣ十月えー 重箱かかえて どこいごさる

私わたしやえびす講の お使つかいいだ サーお使つかいいだ

ㄣ霜月えー 七五三だよ さあ今日は

春日さまへ お参りだ サーお参りだ

ㄣ師走えー 火種ひね絶たやすな 年越しの

寝ねずに元日 迎えよう サー迎えよう

類歌が多く特に東日本で広く歌われているが、月々の行事やその表現に違いが見られる。例えば、二月の「にんでもんで」は伝承の間に意味のある言葉から変形したものであろうが、「にんじもんじ、にんざらまんざら、二日にんち参りの、二日にんち三日は、二度と参るは、二度三度の、人形詣りに、人情万情の、入道坊主の」など、何とか意味を通そうと筆録者が苦心しているのが察せられる。

○もーめんもじろ

もーめん もじろ

もじろの 糸は

絹より 細い

細いけりや 埋めろ

毬つき唄では短い方である。東北地方に類歌が多いが、「木綿の糸は絹より細い」と歌っている。

○こことうりやれ

ここと通りやれ 小田原通りやれ

小田原名主の 中娘なかむすめ

色白で 桜色で

目許めもとに 化粧けしよして

やどさか庄屋に もらわれた

この庄屋は 伊達だての庄屋で

絹つむぎに袖そでに金襴かなわた鍛子たねこを七重ななむらね

七重ななむらね 八重やえむら重ねて

柳やなぎの 下ひたへ

石灯笼 建てて

金灯笼 建てて

一かんしよ

染めておくれよ 紺屋さん

紺屋の 役なら

染めても やろうが

張はっても やろうが

お型かたはなになに つけしやんす

肩裾かたすそに 大雀おほすず小雀

雪割ゆきわり牡丹ぼたんと 置おかしゅんせ

まずは一かんかしました

江戸時代すでに歌われていた。全国に類歌がある。演唱の曖昧のところは、意味が通じる程度に最低度に補修した。なお「やどさか庄屋」は当て字であるが、釈行智編『童謡集』（文政三年（一八二〇）頃編纂）には「江戸崎塩屋」と記してある。

○正月のだいたいは

〽正月のだいたいは

七つ並べて お目にかけて

十になったら 取りあげな

十一の 初山に

女を連れて 参りましょ

その女は 伊達おんな

一尺五寸の 元結もとゆいで

髪をからから 結むすって来て

子供衆こどもむらや 子供衆こどもむらや

演唱者は姉の歌っているのを聞き覚えたというが、意味の通じない所が多い。伊豆地方に類歌があったので、意味が通じる最低限度の補修をした。ただ※印以下は原形のままである。恐らく他の唄が混入したものと思われる。曲節は陰旋の四節をくり返すだけの簡単なものである。

○一番はじめは

一番はじめは 一の宮

二は日光 東照宮

三は佐倉の 宗五郎

四また信濃の 善光寺

五つは出雲の 大社おほやしろ

六つ村 鎮守様

私と花折り 行かないか

今日の寒さに 河花かはなを

仏に進げる 菊の花

一本折っちゃ 腰にさし

二本折っちゃ お手に持ち

三本目には 日が暮れて

どこに宿を とろうか

※八幡長者の 小息子が

とれば十三に なるちゆうが

耳よし髪よし 形よし（以下不明）

七つは成田の 不動さん

八つ八幡の 八幡さん

九つ高野の 弘法さん

十は東京 心願寺

それはど信心 したならば

浪子の病やまいも なおるでしょう

全国で歌われているまりつき唄で、社寺の名称は各地で多少異なる。鳴沢村でも「十は東京明治神宮」という人もある。歌詞は替女唄の中の数え唄と川島武夫と浪子（徳富蘆花『不如帰』の主人公）の愛情物語を結びつけたもので、十のあとに二人の哀別の長い歌詞を歌う所もある。曲節は明治四十年ごろ流行した添田啞蟬坊の作詞作曲となっている演歌「ああ金の世や」と同じものである。

10 動植物、自然の唄

動物、植物、気象、自然などを対象として歌った唄を集めてみた。昔時の開発を知らなかった自然の中で、子供たちの遊び相手になるものはいくらでもあった。次に掲げた唄のほかに、まだまだ沢山の唄があったはずである。この類の唄のほとんどは、歌詞は二、三行と短く、曲節は四度の音程の中の三つの音（テトラコルドと称する）を使うだけの単純なもので、例外の二曲を除いて、楽譜は省略することとする。

○とんびとるところ

ㄇとんび とるところ

三回めぐれ

純白の富士に対するかのように、大空を羽ばたきもせず悠然と旋回するとんび、それを見あげている小っちゃな子供唄である。

○からすからす

ㄇからすからす 勘三郎

お前の家が 焼けるじょ

早く行って 水かけろ

〔類歌〕からすからす、うぬが家が火事だど、早く行って水かけろ、水がなきゃ小便かける〕からすからす勘左衛門、うぬの山

焼けるに、ちつと行つて水かけろ

夕焼け空を飛んで行く鳥に、みんなで歌いかける。

○とんぼとんぼ

ㄣとんぼとんぼ 日蔭で休め

俺わがあ捕りとらゃあ しないぞ

〔類歌〕とんぼとんぼ この指とまれ

とんぼをつかまえる目的を秘めた、こわい唄。

○毛虫毛虫

ㄣ毛虫毛虫 おととい来こう

来ないけりや はさみで うっちゃあれ

〔類歌〕毛虫毛虫おととい来う、塩と味噌をくれるじよ」毛虫毛虫おととい来う、豆を煎いつてくれるじよ

「おととい来い」は「二度と来るな」との大人の言葉である。子供は真似て使いながら、「来い」を使って余分な遊びを考える。

○じじいばあ

ㄣじじいばあ 寝てろ

嫁は起きて 茶煮ろ

娘は起きて 水汲め

婿むこは麦あ ダラかけろ

あけびの花のめしべは、紫色で頭にねばるものがついている。それを手の平にのせ、人指し指でたたくと、だんだん起きる。そのとき歌う。

○ペーロペーロ

ㄣペーロペーロ花よ

だがひった かがひった

ひった方へ つんむけ

〔類歌〕ペーロペーロ花を だれが取ったかが取った 取った者の方へ つん向け

花の茎などを親指と人指し指でつまみねじると戻って来る。向いた方の人が同じことをする。

○桃栗三年

ㄣ桃栗三年 柿八年

梅はすいすい 十三年

果樹の苗を植えてから実がなるまでの年数を歌ったものである。昔は継木の技術が未発達だったので長い年月を要したのである。しかし、子供たちにとっては調子のよい言葉ということで、特に「梅はすいすい」は実感をこめて歌ったのである。

○おおさむこさむ

ㄣおおさむ こさむ

山から小僧が 泣いて来た

団子の一つも くれてやれ

〔類歌〕おおさむこさむ、山から小僧が泣いて来た、あとからばんばが追って来た「おさむこさむ冬の風、あれあれ木の葉が四つ五つ、ひらひらひらとまって来た。おおさむこさむ風の風、山から小僧が泣いて来た、団子の一つもくれてやれ」

全国に同じ唄があるが、「団子の一つも」以下のところが各地で違って、鳴沢村でも類歌の(一)がそれである。類歌の(二)はこれと異り、明治時代の唱歌とこの唄との混成されたものである。楽譜は、原曲と類歌二曲のほかに、類歌

(二)の元となった唱歌「おおさむこさむ」(石原和三郎作詞、田村虎藏作曲)(『幼年唱歌』明治三十三年九月発行)所収)を参考に掲載した。

○お月さまいくつ

♪お月さま いくつ

十三と 七つ

まだそりゃ 若いな

若い子を 産んで

おたかにおぶせて おそそにおぶせて

油買いに やったらば

油屋の 背戸で

油一升 こぼした

その油 どうした

白どんの犬と 黒どんの犬と

なめて しまった

〔類歌〕お月よさんいくつ、十三と一つ、そりゃまだ若いな、若い児を産んで、おちよちよにおぶせて、油買いにやったらば、油屋の背戸へ、油一升こぼいた、黒兵衛どんの犬と、赤兵衛どんの犬と、なめてしまった、その犬どした、ぶっころいて、煮て食ってしまった。

全国で歌われている月の唄で、問答の意外な展開が興味をひいたらしい。お月さんの年は「十三と一つ」が祖形で、十三と一の合計十四は満月の十五より若いと歌ったのであるが、江戸時代の「十七節」という娘盛りの十七を讃える唄などの影響を受けて、「十三七ツ」に変化したという説がある(上笹一郎『日本のわらべ唄』)。鳴沢村には、その新古の両形が共存しているのが面白い。

家に帰りかけた子供たちが、夕空に輝きだした月に呼びかけて歌った唄であるが、父母が遅くまで畑から戻つて来ないときや、母が夜なべに追われているのに赤子が寝つかないときなどに、赤子を背にくくりつけられては、暗い戸外で月を仰ぎながら、子守唄のようにこの唄を口ずさんだものと、語ってくれた老女もあった。

11 歳事唄

来る年も来る年も四季の移りに乗せて、村の行事は古くからの仕来りに従つてとり行われる。村人の一人一人には吉凶悲喜さまざまのでき事があつても、村の自然と行事はとどこおりなく進行する。その中で子供たちも歳事唄を歌いながら、村の行事に組みこまれた役割を果たすのである。こうして段々と、村の行事の主宰層へと成長していくのである。

歳事唄はたくさんあるはずであるが、今のところ次に掲げる程度に止まつた。

○お正月はええもんだ

△お正月はええもんだ

雪のような 飯食つて

油のような 酒飲んで

木端こらばのような 餅食つて

お正月はええもんだ

〔類歌〕下駄の歯のよな餅食つて

食という点からの正月讃歌。全国で歌われている。

○どんどん焼き

△どんどん焼きや 十四日

猿の尻は まっかつか

〔類歌〕 どんどん焼きは えーもんだ、饅頭くって 尻をたれる

○からすの口焼き

ㄇからすの口焼き ツーツーツ

すずめの口焼き ツーツーツ

ねずみの口焼き ツーツーツ

節分の夜は御馳走の夕食を家族そろって食べる。食後主人の使った箸を二つに裂く。切って残しておいた鯛の尾をはさみ、頭を上向きにつき刺す。この箸を火じろにさしておく。「からすの口焼きツーツーツ」といつて鯛に唾をかける、続いて、他の害鳥や害虫の名をあげて口封じとする。唾でジリジリ焼けるとききめがあるという。ひととおり終わると戸口へもっていき、ぬきなどへ刺しておく。

12 言葉あそび唄、その他

尻とり唄と言葉づかいの面白い雑多な唄を集めた。道具はいらぬ手軽な遊びがある。

○いちじくにんじん

ㄲいちじく にんじん

さんしょ しいたけ

ごぼうに むすび

ななくさ やきいも

こいも ころいも

〔類歌〕 むすび、ななくさ、やきいも、くいたい、とうふ」ろうそく、なんばん、薬草、きゅうりに、とうふ」

全国的に歌われ、一から五までは大体共通であるが、六以下がまちまちである。野菜、果物の名だけで一貫するの

がむずかしいので、類歌のようにれ物一般からそ食以外のものに広げることになる。言葉あそびの唄としてだけでなく、羽子つきやおはじきの唄としても用いられた。

○陸軍の乃木さん

ㄣ陸軍の 乃木さんが

凱旋す すすめ

めじる ロシヤ

野蠻国 クロバトキン

きんたま マカロフ

ふんどし しめた

高ジャッポ ぼんやり

尻とり唄で広く歌われている。日露戦争直後の唄であろう。

○なんきりぼうちよう

ㄣなんきりぼうちよう 切りぼうちよう

朝鮮征伐 大勝利

季鴻章の はげ頭

負けて逃げるは ちゃんちゃんぼう

ぼうせきばあ の ぼほの毛

けつの穴は まゝるいな

尻とり唄で、終わると前へかえる。日清戦争後の唄であろうか。

○しょうこうしょうこう

ㄣしょうこうしょうこう かみしょうこう

かんじよの端い ほてがあれ
ごきも箸も くんないじよ

〔類歌〕 しょうこうだいじん 神だいじん、かんじのはたい 寝てゐる

「しょうこう」は、眼病のこと。「かみしょうこう」はそれを司る神ということか。「かんじよ」「かんじ」は閑所すなわち便所のこと、「ほてがあれ」は寝ていろという方言である。「ごき」は御器ごぎで蓋つきの食器である。古くは、便所には廁神かわやがみ、閑所神かんじよがみなどと呼ばれる、盲目の神がいて家を守るといふ俗信があつた。演唱者の一人は母から、便所には目の神様がいるから、目が悪くならないように、便所をきれいにしなければならぬと教えられた、と語っている。そうした民間信仰の神が零落してからの唄である。

○あーぶくたつた

ㄇあーぶくたつた ねーたつた

おろしごろだ 食いごろだ

炉端で煮物の煮えるのを待つ唄。子供は早く食べたいのである。他の地方では、鬼えらび唄の歌い出しとして用いられている。

○ありがたいなら

ㄇありがたいなら 芋虫やくじら

それじゃ螢が 江戸の火事

〔類歌〕 ありがたいなら 芋虫やくじら、電信柱に 花が咲く

「ありがたい」というのをまぜかえず唄。いうまでもなく「蟻が鯛」とこじつけたのである。

○あばよちばよ

ㄇあばよ ちばよ

またあした

ㄱ さよなら 三角

また来て 四角

ㄱ 指切り げんまん

うそついたら

針千本 飲ます

遊びつかれて暗くなると、互いに歌って家へ帰る。「指切りげんまん」は明日の約束をしたとき歌う。

13 子守唄

子守唄には、眠らせ唄、遊ばせ唄、子守子唄の三種があるとされる。眠らせ唄は幼児をなだめすかして眠らせる唄、遊ばせ唄は覚めている幼児をむずがらせず遊ばせる唄、子守子唄は子守のために使役される年少の子女のつぶやきの唄というのが基本的な形であるが、実際には一つの子守唄の中で、それらの要素が混在していることもある。

○ねんねんころりよ

ㄱねんねんころりよ おころりよ

坊やお守は どこへ行った

あの山越えて 里へ行った

里のみやげにゃ 何よもらった

でんでん太鼓に 笙の笛

鳴るか鳴らぬか 吹いてみる

眠らせ唄の代表的なもので、全国いたるところで、多少辞句の違いはあっても歌われている。この唄の原型は、江戸時代中期に江戸で歌われていた記録があり、歌調、曲節ともしっとりとした美しい唄である。

曲節は陽旋、陰旋に転換自在で、田舎では陽旋、都市では陰旋というのが大体の傾向である。鳴沢村での演唱で

は、陽旋に近い音で歌い始めるが全体としては陰旋で歌っているので、楽譜には一応陰旋で記載した。

〇おっついかんかん

〽ほれやいやいやい おっついかんかんよー

せめてこの子が 十にもなれば

白足袋よはかせて 馬車に乗せるじょう

馬車や人力車じゃ 便りがおそい

大八車に 乗せてやるじょえー

ねんねしろおっついかんかん ねんねしろよー

〽おうやいやいやい ねんねかんかんよー

泣けば 鰍沢の 川へほかすじょう

泣かないけりやおだい家の ぼこにしるじょえー

この唄もねむらせ唄であるが、四番の歌詞は子守子唄のものである。この唄を演唱してくれた方は、母子家庭で幼いころ学校へも行けず、村内の子守をして自らの食を得て育った。そこらの隣のお婆さんに教わったという。隣接町村でも採集されていないので、鳴沢村独自のものといえようか。

「おっついかんかん」というあやし言葉は、全国の子守唄集にも類例がなく、多少荒つぽいが朴訥で面白い。(ただし、国中地方で「おっついこんこん」とか「おっつしろよー」という言葉を聞いた記憶がある。二番の歌詞の「鰍沢の川へ流す」という詞句は、川のないこの土地のものとして不思議な感したが、明治時代の谷村で同じような歌詞が採集されていた(山中共古『甲斐の落葉』。「おだい家」は財産家のことである。四番の子守子唄の歌詞は子守娘の哀しさが胸を打つが、全国共通のものである。曲節の主要部は楽譜に示すとおり、平叙型と抑制型と二種の旋律句を歌詞に応じて歌いませるようになっており、素朴ながら美しい情感を出している。

なかのなかの

なかのなかのおんぼはなぜせがちくいな
なたねにもまれてそれからせがちくいな
うしろのしょうめんだーれ

The musical score for 'なかのなかの' is written in treble clef with a key signature of one sharp (F#) and a 2/4 time signature. It consists of three staves of music. The lyrics are written below the notes.

かごめかごめ

かごめかごめかごのなかのとりーは
いついつでやーるよあけのぼんに
つるとかめがすべったうしろのしょうめんだーれ

The musical score for 'かごめかごめ' is written in treble clef with a key signature of one sharp (F#) and a 2/4 time signature. It consists of three staves of music. The lyrics are written below the notes.

坊さん坊さん

ぼうさん ぼうさん どこへゆく わたしゃ たんぼの いねかりに
おまえがいくとじゃまになる かんかん ぼうず くそぼうず
うしろのしょうめんだーれ

The musical score for '坊さん坊さん' is written in treble clef with a key signature of one sharp (F#) and a 2/4 time signature. It consists of three staves of music. The lyrics are written below the notes.

世 界 の 唄

せかいのかたちは いかなるものぞ まるきものにて このとーおり
そしてせかいは まわるものにて いちにちいやにひとまーわり
またそのうちに おきまわれれば いっかーねん 年を分ちて四季という
はる なつ あき ふゆ はるは ござえに はなさきみちて
しかはあれども ここにひとつの うれいとなるは ひがしよりくる
やまあーらし さっとひとふき ふきくるときは はなをさそって
ちりうーせぬ

大 かん 小 かん

おかん こかん どのこが ほしい ちよいとみて あのこ はなんともうす
おくと もうす なによくて そだつ さとうに まんじゅう そりむしの どくよ
いちのぜんで かいましょまだまだ やらぬ にのぜんで かいましょまだまだ やらぬ
さんのぜんで かいましょまだまだ やらぬ ふじの やまほど かによかけて やりましょ
そんなら やりましょ

郵便ホイ

ゆうびん ほうい はしらん かい もう かれこれじゅうにじだ
 がっこうの せいとら が おかみの ごようで エッサッサ
 エッサと おうちへ かえると こ

子供と子供と

こどもと こどもと けんかして こどもの けんかに おやがで て
 なかなか すまぬと わっしょつて ひとさんと ひとさんと たちあつて
 そこで くすりやが とめました

せっせっせ

せっせっせ こいこいこい あわ やまどてーから
 しるい ちようちが みつみつ その あと じょがく せが
 はかまー はいて くつー はいて スッポロ ポンの ポン

おえべっさまと

おえべっ さまと いっ ひと は

(1) い ー ち に た わ ら きり ふ ん せ い て
 (2) に ー ち に に わ ら きり ふ ー ら い て
 (9)

00) と で とっ くり お さ め て

正月 門 松

しょうがつ かどまつ にがつは はつうま さんがつ ひなさん しがつは しかさん

ごがつの わのぼり ろくがつてんのう ひちがつ たなばた はちがつ はっさく

くがつは きくづき じゅうがつ えびすこ しもつき おびとき しわすの もちつき

ちょう ど いちねんと

お 月 の う の う

おつき のうのう かみのう のう なんのきを きりもうす
うめのきを きりもうす うめのきのしたに
じょ ろととのと かみをけんずり けばって
ど こへござる しなのへござる
しなののみちに おのある とりと
おの ない とりと あち むいちゃ ぴーちく ちゃ
こっち むいちゃ ぴーちく ちゃ ぴーちく ちゃの おてらに
へっぴり ごぞうが いてー て へを ひとつ ひたら ぼ
おごぞう さんが おどろい て のみに くつわを おっぱめて
しらみに やりを かつがせ て かまくら かいどう のりくだす

第五章 民俗芸能

正 月 え 一

正がつ エしよじ あければまんだい の つづみの こいやら うたのこい -- うたのこい
 になつ エにんで もんでのてらまいり あすは ひがんの ちゆいちだ サ ちゆいちだ
 さんがつ エさくら ばなよりひーなさま かだりてみごとな だりさま -- だりさま
 しがつ エしんで またくるおしゃかさま たけのこびしゃくにうずきば な -- うずきば な
 ごがつ エ ごんごん はやりの まいかけ を しおがつかけるとってとっておい た -- とっておい た
 るくがつ エるくに たのくさとらないで まいかけ ないとはらがたつ -- はらがたつ
 ひちがつ エひちを だすやらうけるやら ランタク センパン さいちゅうだ -- さいちゅうだ
 はちがつ エはちに さされてないきて た なんとおくすりやあるまい か -- あるまい か
 くがつ エくきの なかにもきくがある とおる こどもの めにかるる サ めにかかる
 じゅうがつ エ じゅうばこかかえてどこいござる わたしやえびすこのおつかいだ サ おつかいだ
 しもつき エひちご さんだよさあきよは かすが さまへ おまいりだ サ おまいりだ
 しわす エひだね たやすなとしこしの ねずに がんじつ むかえよう サ むかえよう

もうめんもじろ

もうめん もじろ もじろの いとは きぬより ほそい ほしいりゃうめろ
やなぎの したへ いしどろ たてて かねどろ たてて いっかん しょ

こことおりゃれ

こことりゃれ おだわらとりゃれ おだわらなぬしの なかむ ーすめ
ーいろ じろで ーさくらいろで めもとに けしよして やどさかしょうやへ
もらわ ーれた ーこの しょうやは ーだての しょうやで ーきぬにつむぎに
きんらん どんすを ななか ーさね ーなな か さね やかさね かさねて
ーそめて おくれよ こうや ーさん こうやの やくなら そめても やろうが
はっても やろうが おかたは なになに つけしゃ ーんす ーかた す そに
おすずめ こすずめ ゆきおり ぼたん と おかしや ーんせ まずはいっかん
かしま ーした ー

正月のだ い だ い は

しよーがーつの だいだいは なーなつ ならべて おめにか け
とーになったら とりあげ な じゆー いーちの はつやまに

いちばんはじめは

いちばん はじめは いちのみ や にーは にっこう どうしょう ぐう
きーんは さくらの そうごろ う しはまた しなのの ぜんこう じ

おおさむこさむ

おわさむ こさむ やまからこぞうが ないてきた だんごのひとつも くれてやれ
【類歌(1)】
おわさむ こさむ やまからこぞうが ないてきた あとからばんばが おつてきた
【類歌(2)】
おわさむ こさむ ふゆのか ぜ あれあれ このはが よついつ つ
ひらひら ひらと まつてきた おわさむ こさむ ひるのか ぜ
やまから こぞうが ないてきた だんごの ひとつも くれてやれ
【幼年喜歌、おわさむこさむ】
おわさむ こさむ ふゆのか ぜ あれあれ からすが よついつ つ
おわさむ こさむ ふゆのか ぜ あれあれ このはが むつなな つ
カア カア カアと ないてゆ く あれは ねぐらに かえるの か
ヒラ ヒラ ヒラと もうてゆ く あれは ねぐらに かえるの か

おつきよさまいくつ

おつきよさまいくつ じつさと ななつ まだそりの わかいな わかいを うんで
わたかにおふせておそそにおふせて あぶらかいに やつたらば あぶらやの かどで あぶらいしほ こぼした
そのあぶら どした しるどんかぬとくどんかぬと なめて しまった そのいぬー どした
たたころして しまった そのかわー どした たいこにはわて しまった そのたいこ どうした
たたきつぶして しまった そのかわー どした ひにくべて しまった そのほいを どした
むぎかけて しまった そのむぎよ どした みんなでくつて しまった

お正月はええもんだ

おしょうがつは ええもんだ ゆきの ような めしくつて
あぶらの ような さげのん で こっばの ような もちくつて
おしょうがつは ええもんだ

第五章 民俗芸能

ねんねんころりよ

ねんねんころりよ
 あこのやまこえで おころりよた
 ぼおやの おもりは どこへいっ た
 さーとの みやげにゃ なにもいらっ た

おっつかんかん

(1) ほれーやい やいーやい おっつかんかんよ — ①せーめて このこがとうにもなれーば —
 ②しあ たびよ はかーせて はしやにのせる じよ —
 ③ばーしや じんきしやじやたりが おそーい —
 (3) だいーはち ぐるまに のせてやるじよえ —
 (4) ねんねしろ おっつかんかんねんねーしろーよー —

(1)[4]はあやし言葉が前後へつくとき歌う。

歌詞本文が2行のときは(2)[3]を順に1回歌う。

歌詞本文が4行のときは(2)を3回(3)を1回か、または(2)を1回(3)を1回(2)を2回歌う。